闇を司る転生者

アニメ大好き

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王が好きなごく普通の会社員であった青年が、ある日「転生してみないか？」と書かれた不思議なサイトを見つける。物凄く胡散臭さを感じたが興味を持ち、自分が知っているラスボス達の闇の力を手に遊戯王の世界にへと転生する。

※特撮や他のアニメ作品のラスボス達の闇の力を実体化させる事も出来ます。

注意

▼主人公は正義の味方ではありません。だから原作キャラに酷いことを言う事もあります。

▼ＯＣＧでもアニメ効果を使用する時があります。

▼デッキは実際自分が組んでいる物を参考にします。

▼その時代にはないカードも使います。

▼複数デッキ使用

▼オリジナル設定あり

それでＯＫな方はどうぞ。

目次

プロローグ 1
1話 4
2話 9
3話 17
王国編
4話 22
5話 40
6話 53
7話 66
8話 88
9話 118
10話 146
バトルシティ編
11話 152
12話 167
13話 182
14話 197
15話 224

プロローグ

「ハァ、つまんねェ…」

俺の名は【神山悠也】何処にでもいる普通のサラリーマン。普通に社会人になって、普通に会社に行って、普通に生活をしている。

だが、俺はそれが嫌だ。毎日、毎日同じ事の繰り返し繰り返し。もっと刺激があることはないのか？

今日は休みで気晴らしにパソコンで動画とかを見ている。最近遊戯王にまたハマり始めた。

今年で遊戯王の漫画の歴史が始まって２０周年だから色々とそれに因んで色んな企画があった。

遊戯王の最新の映画が作られたり、アニメが再放送されたり、今まではアニメオリジナルカードだったのがここでＯＣＧ化されたりと色々あった。

だが、遊戯王は子供達にこそ人気だが大人はどうかというと…。それに最近ではルールが色々と変わってきているから分からなくなってくる事も多いのだ。

だからカードを集めてデッキを作ったり買ったりしても相手がいないから退屈で仕方がない。

そんな時、ネットであるサイトを見つけた。「別世界に転生してみないか？」というサイトだった。

明らかに怪しさ満載のサイトだなぁ。でも一応興味があったからそのサイトに入ってみた。

中を見ると幾つか空欄のカッコがあった。多分この中にワードを入れるんだろうな。

何々、まず一番最初の項目は「転生先」。

ここはやっぱり遊戯王かな。でも時代はどうしよう。一番しっくりくるのが第２期のＧＸだけど、でもここは今ブームを呼んでるＤＭにしよう。あの時代ならルールもザックリとしているし丁度その世代だからな。

年代は……最初の王国編からでいいかな。最初のルールはあまり

よくわからない事が多かったけど、でもやっぱりやるのなら最初からの方がいいからね。
二つ目の項目は「特典」。
そうだな。…この時代では闇のアイテムがあるからそれらが厄介だな。特に相手の心を見る「ミレニアムアイ」とか、未来を見ることができる「千年タウク」とか、さらには相手の心を操る事ができる「千年ロッド」とかあるし。
ここは俺が知っている全ての闇の力の全てにしよう。　ウルト○マンメ○ウスのエン○ラ星人とかティ○のガタ○ゾーアとかの強大な力を闇全て、そして万が一の事も考えその姿になれるようにする。
千年アイテムの闇の力は確かに強力だ。だったらその千年アイテム以上の闇の力を手に入れれば大丈夫……な筈だ。
そして後はカードだな。俺が今持っているデッキとカード全て、同じカードでもアニメオリジナル効果とＯＣＧ効果の両方。これくらいかな一応。
最後のところは「容姿」、外見か。……遊戯達と同じくらいの学生にでもしておくか。
よし、これでいいだろ。
これで後はＯＫボタンを押せばいい筈だ。でもいざ押すとなると、やっぱり抵抗があるなぁ。それでも俺は勇気を振り絞ってボタンを押した。すると画面が光始めて俺や周りを包み込んだ。俺は眩しさのあまり両手で目を隠した。暫くすると光収まりだした。
辺りを見渡すが今までの俺の部屋と同じで特に変わった形跡はない。
「何も変わってない。…失敗したか、嘘だったかのどちらかだな」
そうだよな。転生なんてできるわけがないんだから。漫画やおとぎ話じゃないんだから。
内心ガッカリしながら俺は目を冷ますため洗面所へ向かった。
洗面所についた俺は蛇口を捻り水を出すと掌に水を溜めそれを顔にへとかける。
「クゥ～、冷たい水で目が覚めるな～」

顔を拭いて自分の顔を見たらビックリ仰天！まだウトウトしていたが、これで完全に目が覚めた。
　それは中学生くらいの頃の俺だったからだ。よくよく見るといつもより目線が低いような気がした。
「という事はつまり……」
　俺は急いでリビングにへと駆け出しテレビをつけた。そこに映ったのは……
『我が海馬コーポレーションの技術が生み出したソリッドビジョンにデュエルモンスターズはさらなる進化した！』
　ＤＭで主人公である武藤遊戯のライバルの１人であった海馬瀬戸が演説をしていた。しかし来ている服は俺がいつも見ていた白が特徴のジャケットではなく、何処かの学生服みたいな格好だった。
　あれは確かＤＭの第１話で着ていた服…という事はここはデュエルモンスターズのソリッドビジョンシステムが出たばかりの初期辺りか。
「じゃあ俺は本当に転生出来たんだ…」
　最初はあまりのことで頭が追いつかなかったが、嬉しくなって「ヤッター！」と叫んでしまった。
　そうすると確かこれをきっかけにデュエルモンスターズの全国大会が行われるんだ。それでインゼクター羽蛾が優勝し、ダイナソー竜崎が準優勝するんだったな。
　よし、俺もその大会に出るか。この世界に来ての初出陣といきますか

1話

俺がこの世界に来て約一ヶ月近くが経った。生活の方は今まで貯めていた貯金があるため節約をしながらなんとかなっていた。
だが今注目すべきところは得点で手に入れた複数の悪のラスボスクラスの力だ。
早速試そうとしたがよく考えたら部屋の中で試すと私物や部屋が荒れてしまう可能性がある。かと言って外でやれば多くの人に目が付き話題と言うか騒がれそうなのでやれない。仕方がないから人気が少なそうな夜に近くのの公園か何処かでやる事にした。
そして殆どの者が寝静まった夜に近くの公園にへと向かい辺りに誰もいないことを確認し力を解放させた。
まず邪神ガタノゾーアの力を使ったところ触手を出す事に成功した。流石に本来（怪獣姿）の大きさになるとヤバイので手だけでも変えてみようとしたが変化しなかった。
恐らくまだ力のコントロールが出来ていないから弱い力は使えても大きな力はまだ使えないって言ったところか。これに関しては仕方がない、後にこの力になれていく必要があるな。

そして時は流れ現在の約一ヶ月後、あれから夜な夜な力を使う練習したおかげで、一部だけだが体を変化させる事が出来るようになり闇の力も以前より使えるよになった。これもフ〇ーザ様の力のおかげかな。あのお方は生まれながらの天才だから僅か数ヶ月で神の領域に近い実力をつけたから。（主人公の孫悟〇はかなり掛かったにも関わらず）
そんなことを考えているとお昼になった。腹も減ってきた事だし何か食べるとするか。……強大な闇の力を持っているとはいえベースは人間だ、だから腹も減るもんだ。おかしな事は無いはずだろ…。
しばらく歩いているとハンバーガーショップを見つけた。ＢＡＲＧＥＲ　ＷＯＲＬＤかぁ……はて？この店名前どこかで聞いたことがあるようなそれに見た目もなんか見覚えが…まぁそんな事は今ど

うでもいいか。兎に角食事にするか。そして入口の扉が開いて中に入ると…

「いらっしゃいませ」

「……は」

…何とこの無印時代のヒロインポジションの真崎杏子が従業員姿で笑顔で出迎えた。…あッ!?そうか。ここは此奴がバイトをしているところだったのか。どうりで覚えがあると思った。

そして俺は列に並んでハンバーガーを2つ頼んで席についた。元々食べるのは好きだったし腹も減っていたから軽くてこれくらいは食べるだろう。

食べ始めようとした瞬間に遊戯と城之内が店に入って来た。確かここで杏子がバイトしているのがバレて自分の夢を二人に話すんだよな。よく「現実を見ろ」って言うが夢を見る所の何処が悪いんだか?まだ若いんだからこれくらいは夢に向かって冒険してもいいバズだ。

しかし食事をしている最中に突如複数のミニカーが客の元にへとやって来た。何だ何だ?折角楽しく食事している時に!他の客もその事で腹を立てて文句を言ってくる。それを刑事さんが警察手帳を見せて落ち着かせた。

「皆さん聞いてください。実はこの中に脱獄囚がいます」

脱獄囚がこの客の中に混じっているって事で何かを判別させるためにミニカーを使ったのか。あれ?そんな話確か前に見たことがあるぞ。でもあれば「デュエルモンスターズ」が流行る前にやっていた遊戯王の時にやっていた筈だ。

そんな事を考えているといきなり一人の男が騒ぎ出した。

「俺は卵に弱いんだぁー!!」

確かにあのキャラクターいたぞ。卵アレルギーでこのハンバーガーに「卵が入っている」と聞いて具合が悪くなってきたのを見つかり逃げようとしたところを捕まえられた。しかし実はそれは嘘であった。その上此奴確か続けてここのハンバーガー食べてたから卵が入っていたら最初の時点で気付いている筈なのに慌ててその事を

忘れていた、その上脱獄してから盗みに入ったが全て失敗に終わっている哀れな脱獄囚である。
だが刑事さんを振り切り逃げようとしたらこの店の店長を下敷きにしてしまった。そしてそこで店長の脹脛に痣がある事に気付く。それは確か前に襲われた場所の一つで警備員の人に付けられたと刑事さんが言っていた痣であろう。
つまり自分が今まで盗みに失敗したのは自分以外に犯人がいるのではという事に辿り着いた。
「犯人は此奴だ!!この男だ！」
刑事さんは男を引っぺがそうとした。だが男は店長のシャツを強く掴んでいたためそのシャツの背中部分が破れてしまった。するとその店長の背中に蜘蛛のような刺青があった。
それはこの脱獄囚の前に脱獄しそのまま逃走中の凶悪犯のものであった。
そして店長は脱獄囚の脇に隠していた拳銃を手に取り、杏子の口を手で押さえコメカミに銃を当てた。顔は先程とは一変し凶悪な顔をしていた。
どうやら顔を整形し善良な市民としてこの町に住んでいたみたいだ。しかしこの脱獄囚が盗みに入るところを目撃したせいで、犯罪者としての血が騒いでしまったみたいで、今までテレビのニュースで取りだだされていた事件の真犯人はこの店長だった。成る程顔を整形されちゃパッと見でわかる人はまずいない。だから今日まで捕まらなかったんだな。
「全員床に伏せろ！」
杏子を人質に取られ皆渋々その言葉に従い床に伏せる。…俺以外は。俺は何しているかって？勿論食事をしているぞ。だってまだ食事中だし席を離れる訳にはいかないだろう。なんかこういう所は真面目だなと自分でも思う。
「おい、そこのお前！お前を床に伏せろ！」
食事をしている俺に気付いた店長が俺も床に伏せろと命令してくる。だが俺はそれを無視して食事を続ける。それに腹を立てたのか

さらに怒鳴りつける。
「聞いてんのか!?とっとと床に伏せろ！」
「……煩いなぁ。こっちは食事をしているんだ。雑魚はどっか行ってろ」
「何だと!?」
その言葉に激怒し拳銃を俺にへと向ける。俺は食事をやめ席を立ち店長の方へ体を向けた。
「人質を取る雑魚に用はないと言っているんだ」
「…どういう事だ」
「人質を取るという事はその場で自分が勝つ、若しくは逃げる為にそれをするしかないという事。つまりお前は人質がいなくちゃ勝てない雑魚って事だ。フフフフフ」
「ーーーッ!!テメェェ、ふざけやがってェ!!」
その言葉に完全にキレた店長は銃の引き金を引いた。その場にいた者達は驚愕し杏子は目を瞑った。誰もが俺の死を覚悟しただろう。…俺が普通の人間なら。
銃声が鳴ったと同時に俺は右手を顔の前に出し何かを掴んだような仕草をした。そして手の中にある物を親指と人差し指で持ち直し店長に見せた。それは今打った銃の弾であった。
「な、何!?」
その光景に店長は驚いていた。そりゃそうだ、普通なら銃弾を素手で掴める人間はいない。だが俺は普通じゃない。
「これ…返す」
指で持っていた弾を親指を使って弾く。弾は店長の持っていた拳銃にあたり粉々に破壊される。その衝撃で人質に捉えられていた杏子は解放され離れる。
床に尻餅もついた店長に俺は体から邪神の触手を出し右腕を鋏に変え店長の首を掴んだ。
「は、離せェ…」
「この俺に喧嘩を売ったんだ。その償いとして死んでもらうじゃないかァ」

体からは黒い霧を出し、目は血のように赤く染まり口元を「ニタァ」と口を開けながら凶悪な笑いを浮かべる。恐らく顔はこの店長よりも凶悪な顔になっているだろう。

「うわぁぁー!!」

絶叫した後あまりもの恐怖に失神してしまったようで動かなくなった。完全に興味を無くした俺は店長を調理場の方へ投げ飛ばした。すると「ガシャン、ガシャン」という音がした。恐らく調理器具が落ちた音だろう。

俺は触手を消し挟みも元の腕にへと戻し……

「済まなかったねェ。少ないけど修理代を置いていくよ」

…一万円札を先程食べていたテーブルの上に置き残っていたハンバーガーを手に取って店を出た。

にしても折角の憩いのひと時が台無しになってしまった。大会に向けてデッキの調整や新しいデッキでも作るかな。

そんな事を考えながら自宅にへと帰った。

2話

あのバーガーショップの出来事からさらに時は流れ、俺は大会に出場して元々持っていたデッキを幾つか持ってきて、順調に勝ち進んでいき決勝戦まで上り詰めた。

でも相手も相手だ。通常モンスターばっかりで効果モンスターを出してこない。その上元々の攻撃力だけに目を取られている奴が多い。思い返してみれば……

『俺は【女剣士カナン】を召喚！どうだ、攻撃力１４００だぞ。』

『……俺のターン。俺は【アレキサンドライドドラゴン】を召喚』

『こ、攻撃力２０００だと!?そんなバカな…』

……とまぁこんな感じだったからねェ～。

攻撃力２０００は確かに高い方に分類されるけどそんなにビビる事かな？それに攻撃力１４００のモンスターで勝った気になるのもどうかと思う。まぁ時代が時代だからしょうがないかもしれないけどさぁ。魔法カードで強化させたりとか、罠カードとかで対処させるとか色々あると思うんだけど……まぁいいや。

そういえばこの大会って城之内も出場してたんだっけ。確かベスト８までいったと言っていたな、地区予選だけど。

デュエル経験はあるけど素人と程同じくらいだった奴がベスト８までいけたとは…。地区予選だけど正直凄いと思うよ。いや本当に凄いのはそれを教え鍛え上げた遊戯のお爺さんか。

そんなこんなでいよいよ全国大会の優勝決勝戦が始まる。相手は誰かなぁ～。

『レッツ全国一千万！　デュエルモンスターズファンの皆様、いよいよトーナメント優勝決定戦が行われようとしています！　全国の地区予選から選び抜かれた２００人のデュエリストの頂点に立つのは果たして誰か！　さぁ！　選手入場です！』

『　東日本代表、圧倒的な差で相手を倒してきた神山悠也選手！』

『そして同じく東日本代表、インセクター羽蛾選手！』

インセクター羽蛾か。……まぁ予想はしていたけどね。

あいつは本来ならこの後の全国の決勝戦で竜崎と戦い勝利して優勝者するんだったよな。
でもあいつは勝つためならどんな卑怯な手でも使う奴だ。遊戯のエクゾディアのカードを全てを海に投げ捨てたからな。でもその後すぐに遊戯に負けて強制送還され、バトルシティでは、人を使って城之内のデッキに小細工をしてピンチに追いやったな。まぁ結局敗北したけど。
もしかしてあの時竜崎に勝ったのも何かしらの姑息な手を使ったんじゃないかと思えてきた。
「ヒョヒョヒョ。君みたいな奴が決勝まで来れるなんて凄いねェ。でも相手が悪かったね。このデュエル僕が勝たせてもらうよ」
おっとっと。今はこっちに集中しないとな。
『両選手準備はいいかな?それではデュエル開始!』
『デュエル!』
悠也
ＬＰ２０００
羽蛾
ＬＰ２０００

「先行はもらうね、僕のターン。僕は【ギロチン・クワガタ】を召喚だ」
ギロチン・クワガタ
通常モンスター
☆４
風属性／昆虫族
ＡＴＫ１７００
ＤＥＦ１０００

『おぉと、羽蛾選手いきなり攻撃力１７００のモンスターを出してきたぞ。悠也選手ピンチか?』
「さらに魔法カード【火器付機甲鎧】を装備させる。これで攻撃力７

００ポイントアップだ」

ギロチン・クワガタ
ＡＴＫ１７００→２４００

『なんと羽蛾選手、魔法カードでモンスターを強化した！タダでさえ強力なモンスターが魔法カードでさらに強力になった!!さぁ、どうする悠也選手！』

「ヒョッヒョッヒョ、どうだい？降参するなら今のうちだぞ。ターンエンドだ」

羽蛾
ＬＰ２０００
手札４
モンスター
【ギロチン・クワガタ】
ＡＴＫ２４００
魔法・罠
【火器付機甲鎧】装備中

確かに実況者の言う通り攻撃力２４００のモンスターは強力だ。それは認める。だが攻略方法が全く無いわけではない。

「俺ターン、ドロー。俺はモンスターを守備で出してカードを１枚伏せてターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠

伏せ×1枚

「そんなんで僕のインセクト軍団に勝てると思うなよ。僕のターン。ヒョヒョいいカードを引いたよ。僕は【女帝カマキリ】を召喚」

女帝カマキリ
通常モンスター
☆6
風属性／昆虫族
ＡＴＫ２２００
ＤＥＦ１４００

『羽賀選手、さらに強力なモンスターを出してきた。悠也選手絶体絶命かァ！』

攻撃力２０００を超えるモンスターが２体。確かに普通の奴ならここで諦めるかもしれないーーだが俺は普通じゃないからな。

「そして【女帝カマキリ】で君のモンスターに攻撃だ！」

蜂の女王みたいな格好をしたモンスターが鋭い鎌で俺のセットモンスターを真っ二つにした。俺のモンスターは【シャイン・エンジェル】。守備力は８００のため破壊される。

シャイン・エンジェル
効果モンスター
☆４
光属性／天使族
ＡＴＫ１４００
ＤＥＦ８００

「戦闘で破壊された【シャイン・エンジェル】の効果発動。デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを一体、攻撃表示で特殊召喚する事ができる。【ハネクリボー】を特殊召喚する」

「クリクリ」
ハネクリボー
効果モンスター
☆1
光属性／天使族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００
【クリボー】と言う茶色の毛に覆われた毛玉みたいなモンスターに小さい天使の羽が付いている【クリボー】、【ハネクリボー】が場に現れる。
すると会場から「可愛い!!」と女性と思われる声が複数に聞こえる。確かにクリボーは他のモンスターと違くて可愛いから女性からの人気も高いだろう、正にこの時代のマスコットモンスターと言っても過言ではない。
それに小さい天使の羽が付いているのだから可愛いさ倍増だろう。俺も正直可愛いと思う。
…俺は可愛い物が好きなんだよ！闇の力を持っている奴が可愛い物が好きで悪いか!!ええ!!
「ほぉ、羽が生えた【クリボー】なんて珍しいカード持ってるね。でもたったの攻撃力３００のモンスターを出すなんて勝負を捨てる様なもんだな。ヒョヒョヒョ。そんなに負けたいのなら望み通りにしてやる行け【ギロチン・クワガタ】、その羽の生えた【クリボー】に攻撃だ！」
頭にあるノコギリのようなハサミでハネクリボー目掛けて突撃してきた。ハネクリボーは怯えて体をブルブル震わせている。本当に可愛いなァ。だが【ハネクリボー】よ、怯える必要はない。何故なら……
「今攻撃と言ったな。この瞬間速攻魔法【進化する翼】を発動！」
「な、何!?」
「その効果で場の【ハネクリボー】と手札２枚を墓地へ送りデッキから【ハネクリボーＬＶ１０】を特殊召喚する」

手札からカードを２枚墓地へ捨てると【ハネクリボー】が突如強い光を放ちながら光りだした。そしてその場には先程のような幼さとはと裏腹に羽が大きくなり、ドラゴンのような鎧を纏い可愛いさに、さらに格好良さも兼ね備えて成長したクリボーがいた。

ハネクリボーＬＶ１０
効果モンスター
☆１０
光属性／天使族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００

「な、なんだぁ。姿が変わったと言っても攻撃力は変わらないじゃないか。所詮見かけだおしって事か。そんなモンスター僕のインセクトモンスターで粉砕してやる」
「確かに攻撃力に変化はないがその効果は強力だ。【ハネクリボーＬＶ１０】の効果発動！表側表示のこのカードを生贄にする事によって相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する。その身を犠牲にして、やれ！」
「な、何!?」
『クゥーリー!!』
【ハネクリボーＬＶ１０】の体から強い光が放たれて相手の全てのモンスターを包み込み破壊する。
そして【ハネクリボーＬＶ１０】も消滅する。効果とは言えあの可愛い【ハネクリボー】を犠牲にするのはやっぱりなんか心が痛むな。
「ぼ、僕のモンスターが…全滅…」
「さらに破壊されたモンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える。つまり２２００と２４００の合計、４６００のダメージを受けてもらう」
「そ、そんな！ギィヤーー!!」

羽蛾
ＬＰ２０００→０

『決まったァァァ!!この瞬間優勝は悠也選手に決定いたしました!!』

羽蛾は放心状態になっていた。自慢のモンスターを一掃された上にこの攻撃力が高いせいで負けただ。ショックがデカイのだろう。だがこのままでは終わらせないぞ。

「お前に一つ言っておくわ。俺ね、この世で一番嫌いなもの。それは……虫なの」

追い討ちをかけるようだが、事実俺は虫が大が付くほど嫌いだ。それだけ言うと俺はその場を後にして降りる。

『優勝者の悠也選手には優勝トロフィーと賞金が授与されます！プレゼンターはデュエルモンスターズの生みの親にしてインダストリアルイリュージョン社の名誉会長！　さらには天才ゲームデザイナーであるペガサス・Ｊ・クロフォード！』

来たな。デュエルモンスターズの生みの親、そしてこれから始まる王国編のボスにして遊戯が大会に出場する元凶となった者。

「コングラッチュレーション、悠也ボーイ素晴らしいデュエルでした」

髪で隠れている左目のミレニアムアイから俺の心を読もうとしているのかな？だがそれは無駄な事。俺にはそんなオモチャなんかよりもっと凄い闇を纏っているのだから。

「はい、ありがとうございます」

ここは素直にお礼を言っておこう。変に事欠いて揉め事起こしたくないし。お礼を言い終わるとペガサスは一瞬目を見開いた。多分俺の心が読めなかったのだろうな。それで動揺してしまったんだろう。

だがすぐに表情を元に戻して語り掛ける。

「ユーには近々我が社で開催するイベントに無条件で参加してもらうよ」

遊戯にとって、いや闇遊戯ことアテムにとって最初の試練になり、そして自分の記憶を取り戻すための戦いの幕開けとなる大会。元々その大会に出る予定だったので好都合だな。

「それと、ユーとは一度ゆっくりと話をしたいと思ってマース」

「それについては大歓迎ですよ。私でよければ」

俺はそれだけ言うとその場を後たする。俺にとっても最初の大きなイベントだ。色んな強者が集う、楽しみでしょうがない。早く大会当日にならないかな…。

3話

あの全国大会から数日が過ぎ王国で開かれる大会に強制的に参加される事になった俺は、その王国へ出航する船がある港に来ていた。

「選ばれしデュエリストの諸君。インダストイリュージョン社が主催する大会にようこそ。君達はデュエルモンターズにおいて我々が過去の成績などを特別に調査し選び向いた精鋭達だ」

過去の成績を調査…プライバシーの侵害にならないのか、それ？

「チャンスは皆平等に与えられている。今君達の頭上には栄光という星が輝いているのだ。さぁデュエリスト達よ、海を渡ろう！いざ栄光を求め、いざ王国へと行かん」

―――――――――――――――――――――――――――

「スターチップを提示して乗船してください」

この大会に出場する為には二つのスターチップが必要。これがないと入れないからな。次々とデュエリスト達が乗船していく中トラブルが起きた。なんと城之内がスターチップを持っていないのに船に乗ろうとして止められていた。あいつは何処へ行っても騒ぎを起こすか。……てか騒ぎを起こす事しかないのか、あいつの頭の中は？

その後遊戯が自分のスターチップを一つ渡し、係の人がペガサスに連絡を取ってＯＫをもらった事により城之内は乗船を許可された。

しかし「城之内君と一緒にいることの方が大切」ね。……素晴らしい友情と言いたいが正直言って反吐が出る。何が友情だ、何が友達だ。信頼していてもいつかは裏切られ捨てられるのが落ちだ。そんな事を考えていると俺の番が来た。

「スターチップの提示を」

「ほら、これでいいか？」

右の掌にスターチップを二つ係の人に見せた。

「宜しい、乗船を認める」

俺はスターチップをポケットにしまい乗船した。ここから俺の新

たな物語のスタートへの一歩だ。

全員が乗船すると遂に船は出航、長い船旅を楽しむとするか。甲板には多くのデュエリスト達が海の景色見たり他の奴と話をしたりと色々と楽しんでいる。

俺は海の景色を一人で静かに見ている。海はいい、見ていると何故か心が安らぐ。これは俺の中の邪神の影響なのかそれとも俺自身の気持ちなのかは定かではないがな。

しかしこの場所にいつまでいるのもアレなので、デッキの調整をしてゆっくり休もうと自室に戻ろうと廊下を歩いていると……

「オイ、ふざけんじゃねェぞ!!」

何処からか大きな声が聞こえた。この声からして城之内で間違いないと思うが、今度は何をやらかしたんだ？仕方なく見にいくと係りの人とまた揉めていた。何でもこんな大きな船なのに全員大部屋っていうのが気に入らないらしい。そんな事で一々怒るってどんだけ短気なんだよ。

「げっ、君は…」

後ろから声がしたので振り向くとインセクター・羽蛾が嫌そうな顔をしてこっちを見ていた。

「き、君もやっぱりこの船に乗っていたんだね」

「当たり前だ。俺はあの大会で優勝してペガサス自らの招待されたもんだ。居ても不思議じゃないだろ」

「そ、それもそうだね」

この間負けた事を根に持ってあるのか、それも【ハネクリボー】がトラウマになったのかわからないがなんか話がぎこちない。まぁ、自分のモンスターが一瞬にして全滅し敗北したんだ。誰だってトラウマになるか。

「あれ？君達は…」

「神山悠也にインセクター・羽蛾」

遊戯と城之内か俺たちに気付いた。

「悠也君この間の大会優勝おめでとう。それにあの時店で犯人を捕

まえたのも君でしょ？」
犯人を捕まえた？……！
「あぁ、あの時のハンガーバーショップの事か？」
遊戯はどうやらあの時の事を覚えていたようだ。
「うん、あの時は杏子を助けてくれてありがとう」
「杏子？あの少女の事か？別にそんな感謝される事はしていない。あの時は食事を邪魔されたからやっただけの事だ。それに俺はそんな優しい奴なんかじゃない」
「そんな事ないよ。それに君のお陰で杏子は怪我をしないで済んだんだ。本当にありがとう」
本当に遊戯は純粋でいい奴だね。だがその純粋さがつけ込まれ易くて弱点にもなる。
「わかった。その気持ちは素直に受け取っておく。だがこれからはライバル同士だ、互いに悔いの残らないようにしよう」
俺はそれだけ言うとその場を後にする。元々人混みの多い場所は苦手だったから早く離れたかったと言うのもあるかもしれないな。
さて、じゃあ今度こそ自室で休むとしますか。
「ちょっとふざけないでよ!!」
ようやくゆっくり出来ると思った矢先に今度はなんだ…（イラ）
「レディであるアタシにシャワーもないタコ部屋で一晩過ごせっていうの!!」
あいつは確か孔雀舞だったな。【ハーピィ・レディ】使いで最初は遊戯達と敵対関係だったが後に仲間になっていく女だったな。シャワーの無いくらいで一々煩い女だ。ここは少し痛い目を合わせるか。
「し、しかしこれも規則ですので…」
「責任者呼んで」
「煩いぞ。シャワーくらいで一々騒ぐな。目障りだ」
「何よアンタ」
「その部屋が嫌なら俺の部屋へ来い。別にいいよな、それにここで騒がれても困るだろ？」
「あ、あぁ構わない」

「と、言う事だ。行くぞ」
「あら、悪いわね」
俺は孔雀舞を連れて用意された自分の部屋にへと向かう。あんなところで騒がれたらこっちもゆっくりできない。
「ところでアンタ名前は？」
「…神山悠也だ」
「神山悠也ってこの間の全国大会で優勝した!?」
「…そうだ」
それを聞いた瞬間孔雀舞の口元が小さくニヤついた。恐らくいい獲物と思っているのだろう。そんな事を話していると部屋の前までついた。鍵を開けて中に入るとそこは一人にはかなり贅沢な部屋だった。
「わぁ、ステキな部屋。流石悠也さん、カード強いですね」
「……まぁな」
「強い男の人ってだぁい好き。…アタシよりもね」
「あっそ」
全く猫を被っている女だ。何か企んでいる事がバレバレだ。俺の態度にムカついたのか米噛みがピクって動いた。こっちはさっきからイラついてんだ。これ以上イラつかせるな。
「どう？アタシとデュエルしない？アンタが勝ったら何でもいう事聞いちゃんだけどなぁ」
「…いいだろ、退屈しのぎに丁度いい」
「じゃあ決まりね。さぁカードをシャッフルして」
「…わかった」
本来は今こいつとデュエルする気は一切ない。では何故誘いに乗ったかというとこいつの鼻をへし折ってやるためだ。
「そのカード目を瞑って上から順に当てて見せましょうか？」
「ほぉそんな事が出来るのか？面白い、やってみてくれ」
「一番上は【ハーピィ・レディ】」
俺はデッキの一番上のカードを巡った。すると確かに宣言した【ハーピィ・レディ】だった。

「ほぉ。確かに【ハーピィ・レディ】だ。だが偶然じゃないのか？」
「二枚目【銀幕のミラー・ウォール】、次は【ハーピィズペット 竜(ドラゴン)】、その次は【薔薇の鞭】」
次から次へとカードを巡っていくと宣言したカード達だ。しかも順番通りで。
「凄いね。本当に全部当たっている。しかも順番通りに」
「どう、凄いでしょ？」
「本当に凄いな……アンタの嗅覚は」
孔雀舞はその言葉に驚愕し動揺し始めた。
「な、何を言っているのよ…」
「バレないとでも思ったのか？さっきからこのカード達、香水臭くて堪んないだよ。大方それぞれ違う香水をつけその匂いでカードを当てていたってところだろ」
「くッ」
図星を突かれ唇を噛み締める。物凄く悔しそうな顔。見ていて楽しいな、気に食わない奴の苦しむ顔を見るのは…。もう少しその顔を見ていたいが辞めた。俺は無言のまま席を立ち荷物を持って部屋を出ようとする。
「ちょっと、何処いくのよ!?」
「この部屋から出ていくんだよお前のせいでこの部屋が香水臭くなっちまった。こんな臭い部屋にいつまでも居たら鼻がイカれちまう。だからこの部屋はくれてやるよ。じゃあね、香水女」
俺は勢いよくドアを閉め部屋を去った。何やら部屋の中から「キィー」と猿のような声が聞こえ始めた。あの女がどうせ悔しがっているその声だと思うがどうでもいい。問題は俺はどこで夜を過ごすかなぁ～。

王国編
４話

「おッ！やっと島が見えてきたな」
孔雀舞との騒動の後、俺はあれから船の甲板でずっと海を眺めていた。実は闇の力のお陰で一日、二日くらいなら寝なくても大丈夫なのだ。そして夜が明け大会が開催される島が肉眼で確認出来るくらいまでにまで来ていた。
やがて島に到着するとデュエリスト達が次々と上陸して行く。

「それではルールを説明しましょう。デュエルは全て、デュエルモンスターズのカードによって行われマース。ライフポイントは２０００。プレイヤーへの直接攻撃は禁止デース。皆さんがこのデュエルのために持ってきた最強のカードデッキで、思う存分戦って下サーイ。参加者の皆さんには予めデュエルグローブと２個のスターチップが届いているはずネ。グローブのリングにはスターチップを嵌め込む穴が１０個空いています。このスターチップが決闘者の証。デュエルはこのスターチップを賭けて行われマース。デュエルは島全土が舞台となりマース。バトルロイヤル形式で１０個のスターチップを揃えた者だけがこの門をくぐる事が出来マース。デュエルの開始はジャスト１時間後、タイムリミットは４８時間。その時点でスターチップが１０個に満たない者は敗者とみなし、この王国から強制退去を命じマース。……では決闘者の諸君、健闘を祈ってマース」
４８時間と言う事はまる２日…その２日間の間にスターチップを１０個集めなければならない。
参加者達は全国大会に出場した者達がいる中で、いきなり強い奴と戦ってスターチップを失いたくないだろう。だからと言ってモタモタしていたらスターチップを集められずタイムアップとなってしまう。とっとと対戦相手探しますか。
てな訳で近くにいた１人の少年に声をかける。

「そこの君、相手をしてくれないか？」
「い、いえ、結構です！」
その少年は一目散に逃げ出した。おいおい、逃げる事はないだろう。まるで人を化け物のように……いや間違っていないか。
それに大会優勝者と戦っていきなり失格になりたくはないだろうし。だがこのまま逃げられればかりではスターチップを集めるどころか失格になってしまう。それは避けなければ！
「おい、そこのお前」
悩んでいると後ろから声を掛けられた。顔を向けると何やらタチの悪そうな顔付きの少年が2人現れた。
「お前、全国大会の優勝者だろ？今ここで俺達と戦え！」
ほう、大会優勝者と知っていながら俺に戦いを挑んで来るとは。しかし好都合だ。このまま戦いなしで終わると思っていたからな。
「いいだろう。で、どっちが俺と戦うんだ？」
「おいおい、話を聞いていなかったのか？俺はさっき俺達って言ったんだぜ」
「そうだ。今から俺達と一人ずつデュエルしてもらう」
コイツら2人と戦うのかよ。面倒だなぁ～。
「お前が俺達二人に勝てば、俺達のスターチップを全てくれてやる」
「その代わり一人でも負けたらお前のスターチップをもらう。それが条件だ！」
ほぉ、これは面白い展開だ。勝てばスターチップ大量ゲット、反対にどちらか一人にでも負ければ俺はここで失格。一瞬驚いたが実に面白い。
「いいだろう。その条件飲んでやる。その代わりさっきの言葉忘れるなよ」
「当然だ。まぁどんなデッキを使おうが勝つのは俺達だからな」
フン、明らかにモブ基脇役のセリフだな。そもそもこんな奴らに俺が負けるはずがないし、負けてやるつもりもない。さて問題はどのデッキにするかだなぁ。デッキを変えるのも面倒だから続けて同じデッキを使おうと思うんだが、この王国ルールって訳わからない事が

多いからなァ…ま、いいか。何とかなるだろう。
近くにあったデュエルシステムに移動しデュエル開始の準備をする。
相手の方も順番を決まったみたいでまず黒髪のツンツン頭の奴が出てきた。
「よし、では始めようか」
「貴様など簡単に捻り潰してやる！」

『デュエル!!』

悠也
ＬＰ２０００
モブ１
ＬＰ２０００

「先行は俺が貰う、ドロー！俺は【隻眼のホワイトタイガー】を召喚！」

隻眼のホワイトタイガー
通常モンスター
☆４
風属性／獣族
ＡＴＫ１３００
ＤＥＦ１１００

片目の白いトラが「グルゥ」が俺を威嚇するかのように唸り声を上げている。しかし攻撃力１３００か。…この時代だから高い分類に入るのかな？それがイマイチ「ピン」とこない。
「さらにこのデュエルリングは森。フィールド・パワー・ソースの効果で攻撃力がアップする！」

隻眼のホワイトタイガー
ＡＴＫ１３００→１６９０
ＤＥＦ１１００→１４３０

成る程。それぞれ種族にあったフィールドパワーを得る為にここのデュエルシステムにしたのか。
「ターンエンドだ。どうだ、この新ルールを知っているのがお前だけだと思ったら大間違いだ。この場所のお陰で俺のデッキは最強になったんだ。これで俺に勝ち目はない。大人しくサレンダーするんだな！」

モブ１
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
【隻眼のホワイトタイガー】
ＡＴＫ１６９０
魔法・罠
なし

大抵この時代の組み上げるデッキって「種族」毎によって固定されているのが多い（世界大会で多くのデュエリストを見たんで予想がつく）。【隻眼のホワイトタイガー】が出たとなると獣族を中心としている可能性が高い。
この森のフィールドのお陰で毎ターンモンスターを召喚する事によってそのモンスターが強化されていく。これは正直キツイ。だが攻略出来ない事はない。
「俺のターン、俺はモンスターを守備表示でセット。さらにリバースカードを一枚伏せターンエンドだ」

悠也

ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠
伏せ×１

「へっ、粋がって割には守りとは大した事ねェな。俺のターン。俺はさらに【キャッツ・フェアリー】を召喚する」

キャッツ・フェアリー
通常モンスター
☆３
地属性／獣族
ＡＴＫ１１００
ＤＥＦ８００

肌が色黒で露出が高い格好をした野生児みたいな女性が現れる。
「フィールド・パワー・ソースの効果でパワーアップだ」
キャッツ・フェアリー
ＡＴＫ１１００→１４３０
ＤＥＦ８００→１０４０

「いくぞ【ホワイトタイガー】で守備モンスターに攻撃だ」

セットモンスターは【カーボネドン】。守備力６００のため破壊される。

カーボネドン
効果モンスター
☆３

地属性／恐竜属
ＡＴＫ８００
ＤＥＦ６００

「よし、これでお前のフィールドはガラ空きになった。ターンエンドだ」

モブ１
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
【隻眼のホワイトタイガー】
ＡＴＫ１６９０
【キャッツ・フェアリー】
ＡＴＫ１４３０
魔法・罠
なし

「俺のターン。この瞬間墓地の【カーボネドン】効果発動」
「何!?墓地からだと!?」
相手は物凄く驚いている。それもそうか。この時代には墓地にいる事によって効果を発動させる事が出来るモンスターってあんまりいないもんな。…いや。そもそもいなかったか、この時代には。
「墓地のこのカードをゲームから除外基取り除いて、デッキからレベル７以下のドラゴン族モンスターを一体守備表示で特殊召喚する事が出来る。デッキよりいでよ【真紅眼の黒竜（レッドアイズ・ブラックドラゴン）】！」

真紅眼の黒竜
通常モンスター
☆７
闇属性／ドラゴン族

ＡＴＫ２４００
ＤＥＦ２０００

「何、【レッドアイズ】だと!?」
「アイツ、あんなレアカードを持っているのかよ!」
レアカード…確かに俺の居た世界でもレッドアイズはレアカードの分類に入っている。だがそれのサポートカードの方がレアリティーが高いのがある。この世界は攻撃力重視だからな。
「だ、だが【レッドアイズ】を召喚しても所詮は守備表示だ。だから攻撃は出来ない。その間にこっちは策を練らせてもらうぞ!」
「それはどうかな?俺は魔法カード【攻撃封じ】を発動。【キャッツ・フェアリー】を守備表示に変更させる」
【キャッツ・フェアリー】は腕をクロスさせて膝をついた。
「俺のモンスターを態々守備表示に?何か考えてやがる」
「そしてリバースカードオープン、罠カード【重力解除】発動!フィールド上の全てのモンスターの表示形式を入れ替える」
これにより俺の【レッドアイズ】は攻撃表示に。相手の【キャッツ・フェアリー】は攻撃表示に【隻眼のホワイトタイガー】は守備表示になる。
「【レッドアイズ】が攻撃表示になったって事はッ!?」
「そう、攻撃可能になったという事だ。と言うわけで攻撃に移らせてもらう。【真紅眼の黒竜】で【キャッツ・フェアリー】を攻撃!」
赤い【レッドアイズ】の瞳が輝くと大きく口を開けエネルギーを溜めていく。
「【黒炎弾】!」
放たれた【黒炎弾】は【キャッツ・フェアリー】に真っ直ぐに向かっていき命中すると【キャッツ・フェアリー】は爆炎の中に消えていった。
「クッ!」
モブ１
ＬＰ２０００→９７０

一気に半分のライフを削り取ることができた。
「俺はこれでターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
【真紅眼の黒竜】
ＡＴＫ２４００
魔法・罠
なし

「クソ。こんな所で俺が負けてたまるか、ドロー！よし俺は【ファイヤー・ウィング・ペガサス】を攻撃表示だ！」

ファイヤー・ウィング・ペガサス
通常モンスター
☆６
炎属性／獣族
ＡＴＫ２２５０
ＤＥＦ１８００

フィールド上に炎の様に赤く染まっている羽と鬣？を持つペガサスが現れる。
「どうだ！これが俺のデッキ最強のカードだ。しかもフィールド・パワー・ソースでパワーアップだ！」
ファイヤー・ウィング・ペガサス
ＡＴＫ２２５０→２９２５
ＤＥＦ１８００→２３４０

【ファイヤー・ウィング・ペガサス】の攻撃力が俺の【レッドアイズ】

の攻撃力を超えた。
「行け【ファイヤー・ウィング・ペガサス】！奴の【レッドアイズ】に攻撃だ！」
【ファイヤー・ウィング・ペガサス】の体が炎に包まれ【レッドアイズ】目掛けて突っ込んだ。【レッドアイズ】は全身を焼かれて炎の中に消えていった。

悠也
ＬＰ２０００→１４７５

「どうだ見たか、俺の実力を。ターンエンドだ」

モブ１
ＬＰ９７０
手札５枚
モンスター
【ファイヤー・ウィング・ペガサス】
ＡＴＫ２９２５
【隻眼のホワイトタイガー】
ＤＥＦ１４３０
魔法・罠
なし

「俺のターン、俺はモンスターを守備表示で場に出し、伏せカードを二枚セットしてターンエンド」
今は起死回生のカードは手札にない。ここはモンスターを守備にして持ちこたえるしかない。

悠也
ＬＰ１４７５
手札２枚

モンスター
裏守備×１
魔法・罠
セット×　２

「俺のターン。行け【ファイヤー・ウィング・ペガサス】奴のモンスターを攻撃だ！」
【ファイヤー・フィング・ペガサス】は再び炎に包まれ俺のセットモンスターに突撃する。俺のモンスターは【暗黒の海竜兵】。守備力は１５００のため炎に包まれ破壊される。
「俺はさらにモンスターを召喚するぜ。【ペイルビースト】攻撃表示で召喚してターンエンド」

ペイルビースト
通常モンスター
☆４
地属性／獣族
ＡＴＫ１５００
ＤＥＦ１２００

ペイルビースト
ＡＴＫ１５００→１９５０
ＤＥＦ１２００→１５６０

ＬＰ９７０
手札５枚
モンスター
【ファイヤー・ウィング・ペガサス】
ＡＴＫ２９２５
【隻眼のホワイトタイガー】
ＤＥＦ１４３０

【ペイルビースト】
ＡＴＫ１９５０
魔法・罠
なし

クソ、このままじゃまずい。早くなんとかしないと。
「ドロー！」
ッこれは！よしこれならいけるぞ。
「俺は伏せていたカードを一枚発動！【強欲な瓶】！デッキから一枚ドロ。そして【暗黒の海竜兵】を召喚」
海底人とも言ってもいい見た目で長い槍を持っている青が特徴的なモンスターが現れる。

暗黒の海竜兵
通常モンスター
☆４
水属性／海竜族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１５００

「今更そんな奴を出して何をするつもりだ？」
「こうするつもり。更に手札から魔法カード【ワーム・ホール】を発動！このカードは自分フィールド上のモンスター一体を選択し、次の自分のスタンバイフェイズまでゲームから除外、基ゲームから取り除く」
「何自分からゲームから取り除くだと!?」
「そう。そしてゲームから取り除かれている間、そのモンスターゾーンは使用できない」
【暗黒の海竜兵】の後ろに異次元空間の穴が開くと段々広がっていき、その中に【暗黒の海竜兵】が吸い込まれる。
「へっ、こりゃあ飛んだミスを犯したな。自分のモンスターを取り

除いてしかもそのモンスターゾーンも使用出来なくさせて。自分が不利になってるのに気づいているのか？」
「これもちゃんとした作戦だ。その証拠を見せてやる。リバースカードオープン！【ゼロ・フォース】！このカードは自分フィールド上のモンスターがゲームから除外、墓取り除かれた時に発動。フィールド上にいる全ての攻撃力を０にする」
「何!?」
「全てのモンスターの!?」
【ゼロ・フォース】のカードから紫色の輪っかが三つ飛び出し相手の三体のモンスターのクビに巻きつく。

【ファイヤー・ウィング・ペガサス】
ＡＴＫ２９２５→０
【隻眼のホワイトタイガー】
ＡＴＫ１６９０→０
【ペイルビースト】
ＡＴＫ１９５０→０

「俺のモンスターの攻撃力が…０に…」
「そして魔法カード【死者蘇生】を発動！墓地から復活させるのは俺の【真紅眼の黒竜】だ！」
再び俺のフィールドに【真紅眼の黒竜】が咆哮を上げながら降り立つ。相手はこの状況で自身の敗北を確信のか顔色が悪くなっている。だが俺は勝負に情けをかけてやる程優しくはない。
「【真紅眼の黒竜】の攻撃！【黒炎弾】！」
レッドアイズの口に再びエネルギーが集められ放たれる。そのエネルギーの塊は【ファイヤー・ウィング・ペガサス】にへと直撃し破壊する。

モブ１
ＬＰ９７０→０

悠也ｗｉｎ

よし勝った。正直見くびっていた。この時代にはないカードを持っているし、初期段階である今は魔法・罠カードをデッキに入れている枚数はそこまで多くはないと思っていたからな。

だがこの初期段階にはフィールド・パワー・ソースがあるからな。そこがイマイチ分からないんだよな。

「次は俺が相手だ！」

考え事をしてたら次の奴にへと交代していた。今の経験で次は油断しない。俺の実力を見せてやる。手札と墓地のカードをデッキに戻してシャッフルしセットし直す。

『デュエル！』

悠也
ＬＰ２０００
モブ２
ＬＰ２０００

「先行は俺が貰う。俺のターン、ドロー！俺は【牛魔王】を召喚！」

相手のフィールドに顔が牛になっており来ている服の真ん中に「牛」と書かれた斧を持っているモンスターが現れる。

牛魔王
通常モンスター
☆５
地属性
獣戦士族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１３００

「そしてこいつは獣戦士族。フィールド・パワー・ソースでパワーアップだ！」

牛魔王
ＡＴＫ１８００→２３４０

さっきは獣族で今度は獣戦士族。兄弟だけあって似たようなデッキ使っているな。
「ターンエンドだ。どうだ。攻撃力２０００を超えるモンスターがお前に出せるかな？」

モブ２
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
【牛魔王】
ＡＴＫ２３４０
魔法・罠
なし

「出せるかな」ってさっき俺この世界では幻と言われている【レッドアイズ】を出したんだけど…。兄弟だけあってデッキだけでなく性格まで似てるのかよ。もう嫌だ。
「俺のターン。ドロー」
さっきと終わらせてやるっと言いたいところだが今回は思考を変えていくか。
「モンスターを守備表示で出し伏せカードを一枚セットしてターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター

裏守備×1
魔法・罠
伏せ×1

「またモンスターと伏せカード一枚だけか。随分チンケな戦法だな。俺ターン！【牛魔王】でお前のモンスターに攻撃だ！」

【牛魔王】が持っていた石の金棒を振り上げると勢いよく俺のセットモンスターに振り下ろした。
攻撃が命中するとリュックを担いだ六本指の虫が現れ破壊される。

魔導雑貨商人
効果モンスター
☆2
地属性
昆虫属
ＡＴＫ２００
ＤＥＦ９００

「セットモンスターは【魔導雑貨商人】、そしてリバース効果発動！デッキの上からカードを確認し一番最初に出た魔法もしくは罠カードを手札に加える。それ以外に出たカード即ちモンスターカードは全て墓地へ送る」
「モンスターを墓地へ送るだと!?お前正気か!?」
「俺はいつでも正気だ。まず一枚目ドロー…【暗黒の海竜兵】モンスターのため墓地へ。続いて二枚目…【真紅眼の黒竜】モンスターのため墓地へ…」
その後三枚目以降出たカードは…【ラビー・ドラゴン】、【インセクト・ナイト】、【デュナミス・エルフ】、【ライカン・スロープ】、…とモンスターが続き墓地に送られ七枚目にしてやってやっと…
「…【高等儀式術】魔法カードだ。よってこのカードを手札に加え

る」
「ケッ！ホント何がしたいのか分からない奴だ。俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ（この伏せカードは【ミラーフォース】。例えどんなモンスターを出してこようがこれで返り討ちにしてやる！）」

モブ２
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
【牛魔王】
ＡＴＫ２３４０
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、ドロー！手札から魔法カード【死者転生】を発動！手札一枚を捨てて墓地のモンスター一体を手札に戻す。手札から【エイリアン・ソルジャー】を捨てて墓地から【ライカン・スロープ】を戻す」
「今更そんなモンスターを戻したところでどうしようってんだァ？」
「まだまだこれからだ。手札から儀式魔法【高等儀式術】を発動！手札の儀式モンスター一体を選択しそのモンスターのレベルと同じになるようにデッキから通常モンスターを任意の枚数墓地にへと送る」
「デッキを使って儀式召喚だと!?」
「デッキからレベル６の【デーモンの召喚】を墓地へ送りさっき手札に戻した【ライカン・スロープ】を儀式召喚！」
フィールドに出現した魔法陣の上にデーモンの召喚が現れるとその中に吸い込まれるように消えていく。そしてその中から全身毛で覆われ身体の一部に機械が取り付けられた狼男が咆哮を上げながら姿を現した。

ライカン・スロープ

儀式モンスター
☆６
地属性
獣戦士族
ＡＴＫ２４００
ＤＥＦ１８００

「【ライカン・スロープ】は獣戦士族。よってフィールドパワーソースの効果を得る」

【ライカン・スロープ】
ＡＴＫ２４００→３１２０

「攻撃力が３０００を超えた!?」
「【ライカン・スロープ】で【牛魔王】を攻撃！」
「馬鹿め！リバースカードオープン！トラップカード【聖なるバリア・ミラーフォース】発動！これでお前のモンスターは全滅だ！」
【牛魔王】の前に虹色に輝くバリアが出現する。【ミラーフォース】は俺の今世界でも良く活躍しているレアカード。昔なら対策は難しいかっただろうが残念。
「ならこちらもリバースカードオープン。トラップカード【トラップ・スタン】発動！このターンこのカード以外のトラップカードの効果を無効にする」
「何!?てことは…」
「そう【ミラーフォース】は無効化される」
俺のカードの発動と同時にバリアは消滅し【ライカン・スロープ】の鋭い爪が【牛魔王】を引き裂いた。

モブ２
ＬＰ２０００→１２２０

「そしてこの瞬間【ライカン・スロープ】効果発動。このカードが相手プレーヤーに戦闘ダメージを与えた場合、墓地に存在する通常モンスターの数×２００のダメージを与える」
「何!?お前の墓地のモンスターの数は…」
「まず【魔導雑貨商人】の効果で５枚そして【死者転生】と【高等儀式術】で１枚ずつ…合わせて七枚。よって与えるダメージは１４００ポイント!」
「そ…そんな馬鹿な…」
「やれ【ライカン・スロープ】シャードー・ガンスト!」
【ライカン・スロープ】の身体から複数の影が飛び出し相手プレーヤーを襲いＬＰを削った。

モブ２
ＬＰ１２２０→０

悠也ｗｉｎ

デュエルが終わってモンスターが消えがリングが降りてくる。
「じゃあ約束通りお前達のスターチップ計４個は貰っていくぞ」
話しかけるが反応がない。どうやらあの影に襲われたショックが強過ぎたようだ。偉そうな事言ってた割には肝が据わってねェな。
これでスターチップは６つ。残りは後４つ。早いとこ集めないとな。

5話

城に入るのに必要なスターチップは残４個。何処もかしこもデュエルしているから参加者の内２０人近くが脱落しただろう。それに２日と言うタイムリミットがある。参加者がまだ大量に居たとしても時間が来てしまえばいそれで終わりだ。

まだ数時間しか経っていないが早いに越した事はない。次の対戦相手を探していると……

「もう最悪！アタシがあんな男に負けるなんてェ！」

……前からなんかイライラしている女が歩いてくる。てかあの女は…。

「あっ！アンタは！」

「…またお前か猫被りの香水女」

船内で小さな事で騒いでその上本来俺が泊まる筈だった部屋を香水臭くした「孔雀舞」であった。

「誰が香水女よ！」

「そこしか指摘しないとなると猫被りは認めるんだな？」

「五月蝿いわね！こっちはイケ好かない男に負けてイライラしてるのよ！」

あぁ、そう言えばコイツ城之内と戦ってカードを言い当てるトリックを見破られた上に自分にとっては「美」を失っての最悪な敗北を味わったからな。だが同情は一切しない。何故ならコイツのせいで俺は徹夜する羽目になったんだからな。

「丁度いいわ。この間アタシを馬鹿にした屈辱を今此処で晴らしてやる！」

どうやら半俺の復讐と半城之内に敗北した事の八つ当たりを合わせてデュエルで晴らそうと言う流れになった。正直コイツとはやりたくないがこの際仕方がないか。

「もし私が勝ったらアンタのスターチップを全部頂く。そしてアタ

シの僕になってもらうわ！」
ハァァ!?何言ってんだコイツ!?スターチップ全部没収だけでは飽き足りず剰えこの俺を僕にするだと!?巫山戯るのもいい加減にしろ！
だがここで逃げれば変に追い打ちをかけて来そうだから素直に受ける事にするか。
「分かった。いいだろう。俺が買った場合はお前のスターチップを全て頂くぞ」
「良いわよ。どうせアンタがアタシに勝てるわけないんだから」
俺が言うのもなんだがコイツは本当に相手を見下すのが好きなんだな。イライラするぜ。
そして互いに左右それぞれの台座に着きデュエルリングが起動する。ここで負けたらコイツの一生パシリにされる。それは何としても避けなければならない。
この時代の【ハーピィ】は空を飛べるからで「地上からの攻撃は効かない」みたいなインチキ効果みたいなのがあったんだよな。だったらこっちも空中戦が出来そうなデッキでやるか。
「準備は出来たからしら？」
「いつでもどうぞ」
「じゃあ始めるわよ」

『デュエル！』

悠也
ＬＰ２０００
孔雀舞
ＬＰ２０００

「先行はアタシが貰うわ。アタシのターン！アタシは【ハーピィ・レディ】を攻撃表示で召喚！」

フィールドに両手に鋭い爪、脇には羽が生えた女性が登場。このモンスターが彼女が主体としてデッキの象徴である【ハーピィ・レディ】である。

【ハーピィ・レディ】
通常モンスター
☆４
風属性／鳥獣族
ＡＴＫ１３００
ＤＥＦ１４００

「更にハーピィに【薔薇の鞭】を装備！」
【ハーピィ】が何処からともなく出現した無数の薔薇の棘がある鞭を握りしめる。

ハーピィ・レディ
ＡＴＫ１３００→１６００

「カードを一枚伏せてターンエンド」

孔雀舞
ＬＰ２０００
手札３枚
モンスター
【ハーピィ・レディ】
ＡＴＫ１６００
魔法・罠
【薔薇の鞭】ーー【ハーピィ・レディ】に装備中
伏せ×１

あいつのデッキは主に【ハーピィ・レディ】を強化させるサポート

カードが多い。なら今回はゴリ押しで行くか。
「俺のターンだなドロー。俺は【サファイア・ドラゴン】を攻撃表示で召喚」

サファイア・ドラゴン
通常モンスター
☆４
風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ１９００
ＤＥＦ１６００

あの伏せカード…絶対罠だよなぁ。普通なら除去してから攻撃したいところだが、生憎手札にそれが出来るカードはない。それにここは敢えて引っかかってやるとするか。
「【サファイア・ドラゴン】で【ハーピィ・レディ】を攻撃！」
【サファイア・ドラゴン】が口から火炎放射のような炎を吐き攻撃する。この攻撃が通ればいいのだがそう簡単にはいかないよね多分。
「甘いわね。トラップカード発動！【銀幕の鏡壁（ミラーフォール）】！」
ほらやっぱり。【ハーピィ・レディ】の前に鏡の壁が現れ【サファイア・ドラゴン】を写し出しそのまま写った自分に攻撃してしまう。
「攻撃したモンスターは鏡に映った自身に攻撃する。それによって攻撃モンスターの攻撃力は半分になる」

サファイア・ドラゴン
ＡＴＫ１９００→９５０

「【ハーピィ・レディ】返り討ちにしなさい！」
鏡の壁が消えると【ハーピィ】が持っていた鞭を【サファイア・ドラゴン】の首に巻きつかせ、思いっきり引っ張り自身の方へと引き寄せる。
パワーダウンした事によって【サファイア・ドラゴン】は呆気なく

引き寄せられそのまま【ハーピィ】の爪に引き裂かれ消滅する。

悠也
ＬＰ２０００→１３５０

オウゥ！敢えて罠に掛かってやったとは言えかなりＬＰポイントを削られたな。しかもあの罠は永続罠、破壊しない限り消える事はない。結構厄介だ。

「どう？これでアタシの実力がアロマタクティクスだけじゃないってのが分かった？」

チッ言いたい放題言いやがって。だが確かにアイツの実力は本物ってのは認める。実際この後のバトルシティでの戦いでは決勝戦まで勝ち残った強者だし。

それに今俺の手札には打つ手がない。ここは守りを固めるしかない。

「リバースカードを一枚伏せターン終了だ」

悠也
ＬＰ１３５０
手札４枚
モンスター
無し
魔法・罠
伏せ×１

「アタシのターン！魔法カード【サイバー・ボンテージ】を発動して【ハーピィ】に装着！」

【ハーピィ】の身体に黄金で出来た鎧が装着される。あのカードは【ハーピィ・レディ】が装備するカードの中で一番攻撃を上げるカード。

ハーピィ・レディ
ＡＴＫ１６００→２１００

「さらに魔法カード【万華鏡ーー華麗なる分身】を発動！」
あれもまたこの時代の【ハーピィ】のサポートカードの一枚にして強力なカード。
【ハーピィ・レディ】が万華鏡の光に移るとオレンジの髪のと青い髪の【ハーピィ・レディ】が新たに現れる。
本来の【ハーピィ・レディ三姉妹】は元々三人で一体のモンスターで攻撃力は１９５０だが、その世界ではそれぞれ一体のモンスターとなっている。だから攻撃力もそれぞれが２１００である。
「どう？これだけの戦力差があるの。素直に負けを認めたらどう？ターンエンドよ」

孔雀舞
ＬＰ２０００
手札２枚
モンスター
【ハーピィ・レディ】×３体分
ＡＴＫ２１００
魔法・罠
【銀幕の鏡壁】発動中
【薔薇の鞭】ーー【ハーピィ】達に装備中
【サイバー・ボンテージ】ーー【ハーピィ】達に装備中

「俺のターンドロー」
今思ったけど【銀幕の鏡壁】って確か自分のスタンバイフェイズに２０００のＬＰを払わなくては継続出来ないカードの筈。だがそれがないって事はそれがないバージョンって事ね。ホント、ＯＣＧになったカードの一部って弱体化し過ぎだよね。
それはさて置いといて引いたカードは【トライホーン・ドラゴン】。

又しても破壊出来るカードが引けなかった。手札には【ハーピィ】倒せるモンスターがいるってのに【銀幕の鏡壁】が邪魔で攻撃出来ない。ここはモンスターを敢えて守備で出すしかない。下手に攻撃表示したら痛い目みそうだからな。

「俺はモンスターを守備で出してターンエンドだ」

悠也
ＬＰ１３５０
手札４枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠
伏せ×１

「防戦一方って訳ね。でもそんなんじゃアタシには勝てないわよ。アタシのターンドロー！…どうやらアンタもここまでのようね。アタシは【ハーピィズペット竜（ドラゴン）】を召喚」

【ハーピィ】達の後ろに全身が赤く鋭い緑色の目をした巨大なドラゴンが出現した。

ハーピィズペット竜
効果モンスター
☆７
風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ２５００

「このモンスターは【ハーピィ】の可愛いペット。そしてその効果はフィールド上にいる【ハーピィ】一体につき３００ポイントアップする」

ハーピィズペット竜
ＡＴＫ２０００→２９００
ＤＥＦ２５００→３４００

攻撃力２９００!?そうか。この時代ではハーピィ三姉妹は三体のモンスターとされていた。だから三体分の攻撃力が加算されたのか！

だが俺のモンスターは守備例え攻撃を受けてもダメージは入らない。

「守備表示だから安全だと思ってるんでしょうけど甘いわね。アタシはさらに魔法カード【誘惑のシャドウ】を発動！」

魔法カードの発動と共に【ハーピィ】の目が怪しく光りだすとフィールド上にピンク色の煙が広がり出した。何だこれは？

するとイキナリ俺の伏せってあったモンスター【エメラルド・ドラゴン】が攻撃表示になった。　まるでこのピンクの煙に反応したかのように。

エメラルド・ドラゴン
通常モンスター
☆６
風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２４００
ＤＥＦ１４００

「この【誘惑のシャドウ】は相手の戦闘ホルモンを刺激して強制的に攻撃表示にさせバトルさせるのよ」

「何!?てことは…」

「そう。アンタのモンスターは強制的にバトルする事になる」

エメラルド・ドラゴンが相手ターンでしかも俺の指示なしに攻撃態勢に入り緑色のブレスを吐いた。

「そしてその攻撃に対して【銀幕の鏡壁】の効果が発動！」

ブレスが当たる直前に例の如く鏡の壁が出現に映し出された自分に攻撃してしまう。その所為で【エメラルド・ドラゴン】の攻撃力が半分に。

エメラルド・ドラゴン
ＡＴＫ２４００→１２００

「これで終わりよ。【ハーピィズペット竜】で攻撃！」
【ペット竜】が多くに口を開けると炎のエネルギーを凝縮させ貯め始める。あの炎を食らったら一溜まりもない！
「これでトドメよ、【セイント・ファイアー・ギガ】！」
【ペット竜】の口から勢いよく火炎放射とも言えるいやそれ以上の炎が放たれる。
だがアイツも焦ったな。俺の伏せカードがある事を忘れている。
「リバースカードオープン！罠カード【和睦の使者】発動！このカードの効果によって俺はこのターンモンスターは戦闘で破壊されず戦闘ダメージも受けない！」
【エメラルド・ドラゴン】の前に複数のアラビアらしい女性が現れ両手を前に出すと炎を受け止め流れに沿って周りに拡散される。
「このターンは凌いだ訳ね。でも次のターンになればアタシの勝ちは決まりよ。潔く負けを認めたら？そしたらスターチップだけにしといてあげるわよ」
「嫌だね。降参するなんて恥だ。それなら堂々と負けた方がまだマシだ！」
「そぉ…折角のチャンスを無駄にするなんて余程無様に負けたいみたいね。良いわ、望み通りにしてあげようじゃない、ターンエンドよ！」

孔雀舞
ＬＰ２０００
手札２枚

モンスター
【ハーピィ・レディ】×３
ＡＴＫ２１００
【ハーピィズペット竜】
ＡＴＫ２９００
魔法・罠
【銀幕の鏡壁】発動中
【薔薇の鞭】ーー【ハーピィ】達に装備中
【サイバー・ボンテージ】ーー【ハーピィ】達に装備中

強気で言ったものの確かにアイツの言う通りここで起死回生のカードを引かなければ負ける。頼むぞ俺のデッキ。
「俺のターンドロー！…どうやら神は俺に味方したようだぜ。魔法カード【スタンピング・クラッシュ】を発動！このカードは自分フィールドにドラゴン族がいる時に発動可能。フィールド上の魔法・罠カードを一枚破壊する事が出来る。俺が破壊するのは当然ーー【ミラーウォール】だ！」
【エメラルド・ドラゴン】が羽根を広げハーピィ達に突撃すると三度鏡の壁が現れるが【エメラルド・ドラゴン】はその壁に飛び蹴りを食らわせ粉々に砕け散った。
「そんな…【銀幕の鏡壁】が…」
「しかもそれだけじゃない。破壊されたカードのコントローラーは５００ポイントのダメージを受ける」
粉々になり飛び散った【ミラーォール】の破片が孔雀舞を襲う。

孔雀舞
ＬＰ２０００→１５００

「クゥ」
「これで攻撃しても攻撃力を下げられる事は無くなった。俺は【トライホーン・ドラゴン】を攻撃表示で召喚」

全身青く鋭い爪と身体中に無数の鋭い棘が生えている【ペット竜】にも勝るとも言える巨大なドラゴンが現れる。

トライホーン・ドラゴン
通常モンスター
☆８
闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２８５０
ＤＥＦ２３５０

「攻撃力２８５０!?でもそれでもアタシの【ハーピィズペット竜】より５０ポイント足りないわよ」
「構うものか、【トライホーン・ドラゴン】で【ハーピィズペット竜】に攻撃！」
【トライホーン・ドラゴン】は鋭い爪で斬り裂こうとするがそれよりも早く【ハーピィズペット竜】がブレスを吐き【トライホーン・ドラゴン】は包み込まれ消滅した。

悠也
ＬＰ１３５０→１３００

「何よ、態々自分より攻撃力が高いモンスターに攻撃するなんて。【銀幕の鏡壁】を破壊出来た嬉しさで大きなミスを犯したのかしら？」
「これも作戦の内さ。この瞬間手札から速攻魔法【デーモンとの駆け引き】を発動！レベル８以上のモンスターが破壊された時に発動、デッキから【バーサーク・デッド・ドラゴン】を召喚する」
全身が骨のみで構成され２本の角と白い髪を靡かせている黒いドラゴンが現れる。

バーサーク・デッド・ドラゴン
効果モンスター

☆8
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ３５００
ＤＥＦ０

「攻撃力３５００!?」
「これはバトルフェイズ中で特殊召喚したから攻撃可能だ」
「で、でもモンスターが攻撃出来るのは一体だけ。例え【ハーピィ】を破壊したとしてもアタシのライフはまだ残るわ。その間にこっちは次の手を「それはどうかな」ッどう言う意味よ?」
「【バーサーク・デッド・ドラゴン】の効果は、相手の全てのモンスターに一度ずつ攻撃出来るんだ」
【ハーピィ・レディ】達の攻撃力はそれぞれ２１００。【バーサック・デッド・ドラゴン】の攻撃力は３５００。その差は１４００。ギリギリでライフを削り切る事は出来ない。
しかし【バーサーク・デッド・ドラゴン】は全てのモンスターに攻撃が可能な為、先に【ペット竜】を攻撃しても相手のライフを０に出来る。
「そ、そんな…」
「せめて最後ぐらいは思いっきりやってやる。【バーサーク・デッド・ドラゴン】ーー【ハーピィ・レディ】達そして【ハーピィズペット竜】に攻撃!」
【バーサーク・デッド・ドラゴン】が多く口を開けると、火球弾が４発連続で放たれ相手モンスターにそれぞれ命中し、それぞれの場所で火柱が上がる。

孔雀舞
ＬＰ１５００→０
悠也ｗｉｎ

「はい、ゲ～ムセット。それじゃあ約束通りスターチップは頂くぞ」

「…分かったわよ」
リングから降りると孔雀舞は俺の元まで来て持っていたスターチップ４つ出してきた。これで俺の手持ちは１０個になり俺は王宮に入る権利を手に入る。だが…
「今回はこれで勘弁してやる」
俺は３つだけ貰い残りの１つを返した。
「ちょっと、スターチップ１つ残してどうつもりよ!?」
「別に…これはタダの俺の気まぐれだ。このまま城に入るもいいかもしれないがまだ半日近くしか経っていない。だからここで終わるのは面白くないからお前に一つ残しおいてやる。じゃあな化粧女」
俺は逃げるようにその場から離れる。
「〜〜!覚えてないさいよ!絶対にアンタを負かしてやるんだからァ!!」
後ろであの女が「ピィ、ピィ」鳴いている。負け犬の遠吠えかな?…まぁそんな事は今はどうでもいい。スターチップも残り一つとなったし、最後の一人を探してスターチップをもらって城に行くとするか。

6話

やぁ、みんな俺だよ俺。神山悠也だ。俺は今ペガサスのいる城に向かっている最中だ。　何？「最後のスターチップはどうした？」って。そんなの手に入れたに決まってるだろ？

あの化粧女（孔雀舞）に勝って残り一個のスターチップを求めていたら丁度一人息がよさような奴がいたから「お前が買ったら俺の９個のスターチップ全部やる」って言ったら案の定乗ってきやがった。

そして当然の如く俺が勝ちスターチップを一つ貰った。あっ、因みにその時使用したのは【悪魔族】が中心のデッキだ。

こうして俺は１０個のスターチップを手に入れ城に入る権利を勝ち取ったのだ。そして今城の前に着き門の前にいるガードマンらしき人に止められる。

「スターチップの提示を」

「ほら、これでいいだろ？」

腕のグローブに付けている１０個のスターチップを見せる。

「確かに。それではここにスターチップを嵌め込め」

俺はその言葉の言う通り門にある１０個の星の凹みにスターチップを一つずつ嵌めていく。最後の一つを嵌めた瞬間門は「ギィー」と若干不気味な音を立てながら開いた。

洋風の城だけあって中も洋風系だな。床には赤い絨毯が一面広がっている。一度でいいからこんな大きな城に住んでみたいもんだな。城の感想を述べていると一人の黒眼鏡を掛けた男がやって来た。

「神山悠也ですね？」

「そうだ」

「ペガサス様が貴方をお呼びです。どうぞ着いてきてください」

ほぉ～、ペガサスが俺をねェ～。…これは絶対何かあるな。アイツが何もなく「ただ話がしたかった」なんて事あるわけ無い。しばらく城内を歩くと大きな扉の前で止まった。

「ペガサス様、神山悠也をお連れしました」

「ＯＫ、通してくだサーイ」
扉がゆっくりと開くとめちゃくちゃ長い縦長の向かい側にペガサスが左手に本を持ったながらワインを飲んでいた。
「ようこそ、神山ボーイ。まさか1日もしないで城に辿り着くとは思いませんでした」
「そんな事はどうでもいい。それより俺に何か用でもあるのか？」
「オー、ソーリーそうデシタ。以前言った通りユーとはじっくり話がしたいと思っていましたノデ」
「そうか。だがその前に休める部屋を用意してくれ。昨日から一睡もしてないから眠いし疲れているから休みたい」
「ＯＫ、直ぐに手配シマース」
それから直ぐにしてこの部屋に連れてきた人とは違う人が現れ、用意してくれたであろう寝室にへと案内してくれた。
「ではこちらの部屋をお呼びください」
扉を開けると中には普通サイズのベッドが設置されているだけで他には何もない寂しい部屋だった。流石に家具付きとまでいかなかった。
「何か御用があれば私共にお聞きください」
それだっけあって男は扉を閉めた。
さて、ゆっくり休みますか……と言いたいところだがペガサスが素直に頼みを聞いてくれたとは考えにくい。多分アイツは俺の心を覗き込もうとしてくるはずだ。いくら耐性があると言えど寝ている間なら無防備だから可能だと思っているに違いない。
だが、それだったらこっちにも考えがある。
ペガサス……お前が俺の心を覗いたら最後……今まで味わった事がない恐怖を味合わせてやる。まぁ心配せずとも死にはしないから安心しろ。

但し…肉体的にはだがな。

そして俺は布団に潜り込み疲れ切った身体を癒すために眠りについた。

それから暫くして扉が開かれ1人の人物が入って来た。

ペガサスｓｉｄｅ

神山悠也ボーイ。

以前世界大会での優勝の時、私はミレニアムアイの力で彼の心を覗こうとしました。しかしどう言う訳か彼の心が見る事が出来なかった。

その上それを分かっていたかの様に私が驚いた顔を見て楽しんでいる様にも見えました。

しかも彼は1日もしないでスターチップを集め私の城に入って来ました。これはどう考えても普通の人間には出来ることではありませーン。

かと言って聞いたところでこれが自分から話してくれるとは考え難いですし、片やミレニアムアイで見ようとしても前回のようになるのがオチデース。

しかし寝ている今なら心の覗けるはずデース。こう言うのはあまりしたくありませんが、彼の秘密をする為には仕方ありませーン。

「【マインド・スキャン】」

私はミレニアムアイの力を使って彼の記憶の中の出来事を映像として見てみる。

映し出されたのは特徴的な髪型で大量に出血しているボロボロの

黒髪の青年、その周りに鎧を着た人間とは思えない姿をした者が何人も取り囲んでいる光景。そしてその先には紫色が特徴で黒い変わった形をした椅子に座っている二本の小さい角の生えた子供体型の生命体。

『○、○○○○様！』

『○、○、○○○○様!!』

『○○○○○様が!!』

周りにいる大勢の者達は反応からしてあの小柄の人（？）の部下なのでしょう。主人の登場に皆驚いてますが、どちらかと言えばまるでこの後起こる事に恐怖しているような…。

『へへへ、これで全てが変わる。この○○○○○○○の運命…この俺の運命…○○○○○○の運命…』

小柄の人（？）は豆粒くらいの大きさの光を人差し指の上に作り出し顔の横にへと持ち上げ青年の言葉に顔色一つ変えず見ている。

『そして貴様の運命も……これで最後だ!!』

彼を掌に作り出された閃光を小柄の人（？）に向かって勢いよく投げ飛ばした。

これが直撃すればあの人物（？）もタダでは済まないデショー。

しかし小柄の人（？）は高らかに笑うと人差し指の豆粒くらいだった光がドンドン膨張し巨大化していき青年が投げ飛ばした閃光はその塊にぶつかり一瞬にして消滅してしまいました。

『な、何!?』

その後更に大きくなる塊はまるで太陽そのもの。あの小さい身体のどこにこんな力ガ!?小柄の人（？）は笑いながら人差し指を前に折り曲げ、巨大な塊は前へ動き出す。

『○、○○○○様!?』

そして周りにいる部下達諸共黒髪の青年を飲み込み青年の後ろにあった星にぶつかると、次第に星に輝が入り始め火山の噴火のように火を噴きながら大爆発を起こした。

『ホーホッホッホー！素晴らしい！ホォラ見てご覧なさい。○○○○さん、○○○○さん。こんなにも美しい花火ですよ。ホーホッホッ

ホッホッホッホッホ、ホーホッホッホッホッホッホッホッホッホッホ!!』

星一つを破壊し部下諸共多くの命を奪ったにも関わらず「綺麗な花火」平然と高笑いするその残虐さに私はその存在に恐怖を覚えた。

ドカーーン

「ウワァァーー!!」

私は更なる星の爆発に巻き込まれそうになった寸前に目を覚ました。今のビジョンは一体…。

「どうだ?楽しい夢は見れたか?」

すると突然誰かに声を掛けられたのでそっちの方へ顔を向けると、そこには寝ているはずの悠也ボーイがいつの間にか目を覚ましており不敵な笑いを浮かべながら私を見ていた。

悠也ｓｉｄｅ

ペガサスの奴余程俺が見せたビジョンにビビっていたのか、息を荒げ頭には汗をかいていた。でも俺は悪くないぞ。そもそも向こうが人が気持ち良く寝ている隙をついて、人の心を覗こうとしたんだからな。

「い、今の何ですか?」

「今のは俺の力の元になっているお一人の記憶だ」

「貴方の力の元?」

「そうだ。俺には色んな悪意のある者達の力が宿っている。宇宙の帝王に暗黒の皇帝、超古代の文明を一瞬にして滅ぼした邪神とかのな。だからお前のミレニアムアイの力が効かなかったんだよ」

矢は一本では折れてしまうが、三本の矢では折れないーーと昔から言う。一人では無理でも数人で力を合わせれば強い相手にも勝てる。

つまり一つの力では千年アイテムの力には勝てないだろう。しかし複数の力を合わせれば千年アイテムの力を凌駕し影響を受けなくなる。

「…何故貴方にそんな力が」

「それは流石に言えないな。こっちもそんなに自分の情報をホイホイくれてやる程お人好しじゃないんでね。まぁ、それはそれとしてペガサス、暇つぶしにデュエルでもするか？」

「デュエルデスって!?」

「そう。ここでただ待っているってのも暇だしデュエルでもしようぜ」

「…何が目的ですか？」

「言っただろう？暇つぶしだって。どうせ今日はもうここには誰も辿り着かない。それにお前の俺の使うカードを見てみたいだろう？デュエルモンスターズの生みの親として」

「…いいでしょう。そのデュエル受けましょう。着いてきてください」

俺は部屋を出てペガサスにデュエルをするであろう場所に案内される。しばらく歩くと一歩道の大広間に出る。ここって確か決勝、準決勝戦をやった場所だよな？道の中心まで行くとペガサスが振り返る。

「ではデュエルの準備をしマース！」

突如俺とペガサスを境に道が割れ後ろへ下がり始め、上からデュエルリングが降りてきて設置される。

ペガサスはいつの間にいた黒服の男からデッキを受け取りリングに立つとデッキをセットする。俺もリングに立ちデッキをセットする。

「準備はいいデスカ？」

「いつでもいいぜ」

「それでは…デュエルスタートデース！」

『デュエル!!』

悠也
ＬＰ２０００
ペガサス
ＬＰ２０００
「先行は貰いマース。私のターンドロー」
「先に言っておく。本気で来い。手加減してたら速攻で終わるぞ」
「…確かにユーには私のミレニアムアイでも手の内が読めないので全力で行かせてもらいまショウ。私は魔法カード【トゥーン・ワールド】を発動しマース」
フィールドに漫画本のようなファンタジーの本が出現する。
「そして【弓を引くマーメイド】を守備表示で召喚」
ペガサスが場にカードを出すと巨大な貝殻が現れて、その中に背を向けになっている女性がいた。

【弓を引くマーメイド】
通常モンスター
☆４
水属性／水族
ＡＴＫ１４００
ＤＥＦ１５００

すると【トゥーン・ワールド】からピンク色の煙が出て来て【マーメイド】を包み込むと【マーメイド】は煙に吸い上げられ本の中にへと吸い込まれてしまった。
「【トゥーン・ワールド】の効果によりこのカードが場にある限り私のモンスターは全てトゥーンモンスターとなりマース」
「ボォン」と音と共に【トゥーン・ワールド】が開くと吸い込まれた【マーメイド】が出で来た。しかしその姿は先程よりも子供の絵本に出でくるような感じになり色が肌黒くなっていた。
「私はこれでターンエンドデース」

ペガサス
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
【トゥーン・マーメイド】
ＤＥＦ１５００
魔法・罠
【トゥーン・ワールド】永続魔法

「先に言っておきますがトゥーンモンスターはトゥーンでしか破壊は出来ませーン。トゥーンとは【パーフェクト】な生命体を意味するのデース」
ハイ、知ってます…。
「じゃあ俺のターン、ドロー」
この世界のトゥーンモンスターはマジでチート級だったもんな。前の世界で観ていた時も「凄過ぎ」って思ったし。何しろカードの効果を受けない、戦闘で破壊されない上にダメージも与えられない。これをチートと言わずに何と言おうか。だがら今回のデッキはその対策をしてきている。
もうここまで言えば分かるだろう？今回のデッキは「トゥーン」デッキだ。
「俺は魔法カード【強欲で謙虚な壺】を発動。デッキトップ３枚をめくりその中の１枚を手札に加え、残りはデッキの１番下に戻す」
どれどれ。デッキトップの３枚のカードは……【激流葬】、【テラフォーミング】、【トゥーン・仮面魔道士】か。
【テラフォーミング】を手札に加え、残りはデッキの下に戻す。そして今手札に加えた【テラフォーミング】を発動。デッキからフィールド魔法を１枚加える。【トゥーン・キングダム】を手札に加えデッキをシャッフルする。そしてデッキの上からカードを３枚を裏向きのまま除外、ゲームから取り除いてフィールド魔法【トゥーン・キング

ダム】を発動！」
俺はデッキの上のカード３枚を除外すると【トゥーン・ワールド】に似た巨大な絵本が現れる。そしてその本が開くと中からお伽話とかに出てくる城が現れた。まるでリアル飛び出す絵本だなこりゃ。
「これにより俺のフィールドのモンスターはトゥーンモンスターと化す。そして【トゥーン・ヂュミナイ・エルフ】を攻撃表示で召喚】
俺のフィールドに豪華そうな服を着た２人の女性が出現した。

【トゥーン・ヂュミナイ・エルフ】
効果モンスター
☆４
地属性／魔法使い族
ＡＴＫ１９００
ＤＥＦ９００

「【トゥーン】カード!?それは世界で私しか持っていいないはず。それに私の知らない【トゥーン】カードまで。何故ユーが持っているのです!?」
「それは俺に勝てたら教えてあげるよ。俺はカードを３枚伏せてターンエンド」

ＬＰ２０００
手札１枚
モンスター
【トゥーン・ヂュミナイ・エルフ】
ＡＴＫ１９００
フィールド魔法
【トゥーン・キングダム】
魔法・罠
伏せ３枚

「私のターンデース。私は【ドラゴンエッガー】を召喚しマース」
フィールドに大きな卵が現れると中から赤いドラゴンが姿を現す（殻は服を着ているみたいに下半身と頭の上に乗っている）。

【ドラゴンエッガー】
通常モンスター
☆7
炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２２００
ＤＥＦ２６００

【ドラゴンエッガー】も【マーメイド】と同じく【トゥーン・ワールド】に吸い込まれピンク色の煙からファンタージー的な姿にへと変貌した。
「【トゥーン・ドラゴンエッガー】で【トゥーン・デュミナイ・エルフ】を攻撃しマース！」
【トゥーン・ドラゴンエッガー】が思いっきり息を吸うと鼻から炎が放たれ【トゥーン・ヂュミナイ・エルフ】を包んだ。
ＬＰ２０００→１７００
「【トゥーン・キングダム】の効果発動。デッキの一番上のカードを裏向きのまま除外……取り除く事によって【トゥーン】と名のつくモンスターの破壊を無効にする事ができる」
【トゥーン・ヂュミナイ・エルフ】はダンスをするように身体を回転させ炎を消し飛ばした。
「ｗｈａｔ!?そんな効果があったのデースか!?なら私はカードを１枚出して終了デース」
「おっとエンドの前にこちらのカードを発動させる。【トゥーン・マスク】！このカードは【トゥーン・ワールド】がある時に発動可能。相手フィールドのモンスター一体を選択し、そのモンスターのレベル以下の【トゥーン】モンスター一体を召喚条件を無視して手札・デッキから特殊召喚する事ができる。さらにそれにチェーンして【スター・

チェンジャー】発動！フィールド上のモンスターのレベルを一つ上げる。【トゥーン・ドラゴン・エッガー】のレベルを一つ上げる」

トゥーン・ドラゴン・エッガー
☆7→8

「私のモンスターのレベルを上げて何をする気デースか？」
「こういう事だ。チェーンが終わり【トゥーン・マスク】の処理に入る。レベルが上がった【トゥーン・ドラゴン・エッガー】を選択し、これによりレベル8以下の【トゥーン】を一体召喚条件を無視して特殊召喚する。レベル8の【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】を特殊召喚する」
　罠カードからマスクが飛び出してくると【トゥーン・ドラゴン・エッガー】に張り付く。【トゥーン・ドラゴン・エッガー】は必死に振り払おうと身体を振りまくる。そして暫くするとマスクは自分から離れ、俺の空いているモンスターゾーンへ移動するとそれが次第に別の形にはと変化していき、軈て黒くて大きなオモチャのロボットが現れる。

【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】
効果モンスター
☆8
地属性／機械族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ３０００

「攻撃力３０００……私のターンは終わりました。ユーのターンデス」

ペガサス
ＬＰ２０００

手札３枚
モンスター
【トゥーン・マーメイド】
ＤＥＦ１５００
【トゥーン・ドラゴン・エッガー】
ＡＴＫ２２００
魔法・罠
【トゥーン・ワールド】
伏せ×１

「俺のターン。どうやらこのターンで終わりのようだ。手札から魔法カード【トゥーン・ロールバック】を発動。これにより【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】は２回攻撃ができる。いくぞ【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】で【トゥーン・ドラゴンエッガー】を攻撃！」

「ならこの瞬間伏せカードを発動させ…ｗｈａｔ!?何故発動しないのデース」

「【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】が攻撃宣言した時、相手プレイヤーは魔法・罠カードを発動する事はできない」

「オーノー！そんな効果があったとは」

【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】の拳が【トゥーン・ドラゴンエッガー】に命中した。

ペガサス
ＬＰ２０００→１２００

「くっ！」

「そして【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】はもう一回攻撃することができる」

「し、しかし私のモンスターは守備表示、だからダメージを受けるはずは…」

「ところがそうでもないんだよ。【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】の効果は自分のバトル中に相手の魔法、罠を封じるだけ

じゃない。このモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その攻撃が守備力を超えていればその差分戦闘ダメージを与える事ができるのさ」
「アンビリーバボー!!そんな効果まであったとは…」
「いけ、【トゥーン・マーメイド】を攻撃!!」
【トゥーン・アンティーク・ギア・ゴーレム】の巨大な拳が【トゥーン・マーメイド】を貫き、そのまま後ろにいるペガサスにまで攻撃の余波が届いた。
「ウワァァーー!!」

ペガサス
ＬＰ１２００→０

ライフが０になった事によりデュエルが終了しモンスターは消えた。
「ペガサス様!」
近くいた黒服の男が倒れたペガサスに駆け寄る。ペガサスはフラつきながらも起き上がり俺にへ目を向ける。
「悠也ボーイ。楽しいデュエルでした。負けたのにこんな楽しい気持ちになったのは久しぶりかもしれまセーン」
確かに今のペガサスの目は負けたにも関わらず物凄く清々しい表情になっている。
「じゃあ終わったから俺は元の部屋で休ませてもらう」
よくよく考えたら昨日から全く休みを取ってない。休もうと思ったらペガサスが来ると思って力を使っていたから碌に休めてないし。さっきまではデュエルに集中していたから大丈夫だったが、終わって緊張が取れたからか一気に疲れがドッと出た。
少しフラつく身体を進ませ何とか部屋にへと辿り着いた。そしてベットにへと潜り込んで横になった瞬間物凄い睡魔に襲われ眠りについた。

7話

ペガサス城の一室に寝ている悠也。ペガサスとのデュエルが終わった後眠りについた彼はそれまでの疲労が重なった所為で眠ってから丸一日が過ぎている。それでもまだ寝ているのだ。しかしその眠りも終わる時がきた。

コン、コン

突如扉にノックがかかる。その音で目を覚まし身体を起き上がらせる。

「(折角良い気持ちで寝てたのに) 誰だ?」

「失礼する。休んでいるところ悪いがペガサス様がお呼びだ。至急来てくれ」

それだけ言うと扉を閉めた。

まだ起きたばかりで眠気が取れないが呼ばれたなら出向かないなと。それが一応礼儀ってものだ。

両頬を「パンパン」と2回叩き喝を入れ眠気を飛ばし部屋を出る。まぁまだ眠いから欠伸は出るけど。

部屋に入るとペガザスはワインを飲んで寛いでいた。

「おはようございマース、悠也ボーイ。疲れは取れましたか?」

「あぁ、お陰様でグッスリ寝れたよ」

「それは良かったデース。それで早速で申し訳ないのですが、ユーにはこれから海馬ボーイとデュエルをしてもらいたいのデース」

あぁ、そう言えば弟を取り戻すために遊戯とデュエルして勝ったからペガザスとデュエルするんだったな。しかし…。

「何故俺なんだ?お前が直接相手をすればいいだろう?」

「…海馬ボーイは遊戯ボーイと同じくらい強さを持つデュエリスト。貴方程のデュエリストなら彼と戦ってみたいと思っていると思いまして。それに私も貴方と海馬ボーイのデュエルを見てみたいのデース」

「……フン、本音は俺の使うカードが見たいからじゃないのか？」
「…フフフ、バレましたか。その通り。ユーが先程使用したカードは私の知らないカードばかり。それにここに来てからのデュエルでも知らないカードを使っていました。しかしあれが全部ではないでしょう？だから私は貴方が使うカード達をもっと見てみたいのデース」
まぁ知らないカードがあれば知りたくなるし見たくなるよな。その気持ちは大いに分かる。それに海馬瀬戸ーー俺はアイツが嫌いだ。確かにアイツは遊戯のライバルの1人にして知名度も高い。何より【青眼の白龍】使いとして知らない者はいないだろう（自分が元いた世界では）。だが俺は奴を許せない理由がある。
「いいだろう。その頼み受けてやる」
「オォ！Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ、悠也ボーイ。それでは早速デュエルの準備を始めるとしましょう」
海馬、俺はお前がやった一つの行いに一度ガツンっと言ってやりたいんだよ！

場所が変わり俺がペガザスとデュエルした部屋の前まで来る。ペガザスは俺に少しここで待っていてほしいとの事。多分最初から出て行ったら面白くないからだろう。
「待っていましたよ海馬ボーイ。早速デュエルを始めたいところですが、その前に紹介したい人がいマース。出て来てくだサーイ」
ペガザスに呼ばれ足を進める。観戦場所にはアメリカの国家柄のバンダナを巻いているサングラスを掛けた男、確かバンデット・キースとか言ったけ？そして武藤遊戯や城之内達がいた。
中でも俺の事を知っている遊戯、城之内、杏子は俺が出て来た瞬間驚きの表情をしていた。ペガサスと一緒にいる事が信じられないみたいだな。
「海馬ボーイ。今からこちらの彼、悠也ボーイが私の代わりにユー

とデュエルをしまーす」
「何だと!?巫山戯るなペガサス。俺はそんな小僧とデュエルしてる暇などない。さっさとこの俺とデュエルをしろ!」
「まぁそう言わずに。それに私は彼と先程デュエルをしましたが、結果は私の敗北でした」
「何だと!?」
この言葉に全員が驚愕する。相手の心を見通す力を持った千年アイテム【ミレニアムアイ】を持つペガサスに勝つことなんて不可能に近い。しかしそのペガサスが負けたとなれば驚かない方が無理か。
「海馬ボーイ。もし彼に勝つ事が出来ればモクバボーイは返してあげましょう。バット、負けた場合はユーには罰ゲームを受けてもらいます。どうしますか?」
「いいだろう。どんな奴が相手でも俺は自分のデッキを信じる!」
自分のデッキを信じる…今のお前にそんな事を言う資格があるのかよ。
「それではデュエルの準備をしましょう!」
例の如く上空からデュエルステージが降りてきて設置される。そしてお互いにデッキをセットしてカードを5枚ドローする。
「さて始めるとするか」
「御託はいい。貴様を倒し俺はモクバを取り返す!」

『デュエル!』

悠也
ＬＰ２０００
海馬
ＬＰ２０００

「先行は俺がもらう、ドロー。俺は【アサルトワイバーン】を攻撃表示で召喚」
フィールド上に全身が鋭い刃物で出来ているようなドラゴンが現

れる。

【アサルトワイバーン】
効果モンスター
☆４
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１０００

「更にリバースカードを一枚セットしてターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
【アサルトワイバーン】
ＡＴＫ　１８００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン。俺は【復讐のソード・ストーカー】を攻撃表示で召喚」
海馬のフィールドに全身紫色で巨大な剣を持った悪魔のような見た目をしたモンスターが出現する。

【復讐のソード・ストーカー】
通常モンスター
☆６
闇属性／戦士族
ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ１６００

「【ソード・ストーカー】奴のモンスターに攻撃だ！」

指示を受けた【ソード・ストーカー】は【アサルトワイバーン】目掛けて走りながら手前で高く飛び上がると持っていた剣を振り下ろした。

【アサルトワイバーン】は真っ二つに斬られ消滅した。

悠也
ＬＰ２０００→１８００

「フン、こんな茶番などとっとと終わらせてやる。ターンエンドだ」

海馬
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
【復讐のソード・ストーカー】
ＡＴＫ２０００
魔法・罠
無し

「なら俺のターン、ドロー。手札から魔法カード【ドラゴン目覚めの旋律】を発動！手札１枚を墓地へ送り、デッキから攻撃力３，０００以上、守備力２，５００以下のドラゴン族モンスターを２体まで手札に加える。俺は【伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）】を捨ててデッキから【青眼の亜白龍（オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン）】を２枚手札に加える。更に今墓地に送られた【伝説の白石】の効果発動！このカードが墓地に送られた時、デッキから【青眼の白龍（ブルーアイズ・）】を一体手札に加えることが出来る」

【伝説の白石】
☆1

光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００

「何!?【ブルーアイズ】だと!?そのカードは世界に４枚しかないはず！しかも俺の知らない【ブルーアイズ】のカードまで！何故貴様が持っている！」

「その問いに答えてる暇はない。さらに俺は今手札に加えた【青眼の亜種龍】の効果発動。手札の【青眼の白龍】を相手に公開する事によって手札から特殊召喚する事が出来る。出でよ！【青眼の亜白龍】！」

俺のフィールドに【青眼の白龍】に似た白い龍が神々しく現れる。

青眼の亜白龍（ブルーアイズ・オルタナティブ・ホワイト・ドラゴン）
効果モンスター
☆８
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００

「おい、あれ【ブルーアイズ】か!?」

「いや、似ているけど違う。全く別のモンスターだ」

【青眼の白龍】に似た【青眼の亜白龍】が現れた事によりギャラリーが騒めき始める。

もうとっくに気づいているだろうが今回のデッキは【ブルーアイズ】デッキ。今の海馬の奴を葬りにはこのデッキが一番相応しい。

「【青眼の亜白龍】で【ソード・ストーカー】を攻撃！【滅びのバーンストリーム】！」

【青眼の亜白龍】の口から【青眼の白龍】の必殺技に似た滅びのブレスが放たれ【ソード・ストーカー】を飲み込み消滅させた。

海馬
ＬＰ２０００→１０００

「クッ、己…」
「ところで一つ質問がある。さっきお前が言った通り青眼は世界で４枚しかないとされている。俺の持っているのを除いたとしてもお前はその内３枚を持っている。デッキに入れられる同じカードはルール上３枚までだ。じゃあもう１枚はどうしたの？」
「そ、それは……」
この質問に海馬は言葉が詰まる。そりゃあそうだ。答えようとしても答えられないもんなぁ。
「答えない。いや答えられないの方が正しいか。だが俺は知っているぞ。その４枚目は……破ったんだよね、自分の手で。「敵になったら厄介になるかもしれない」と言って破り捨てたんだよなぁ、ビリッと」
これが俺が今の海馬を嫌う理由だ。遊戯の祖父とのデュエル後、デッキに入れられる同名カードは３枚まで。４枚目は障害になるという理由で彼らの目の前で破り捨てたのだ。カードを平気で破り捨てるような奴なんて【エクゾディア】カード５枚を海に投げ捨てた羽蛾と同じくらいの外道だ。
それに海馬が持っている３枚の【ブルーアイズ】達はどんな気持ちなんだろうな。同じカードが破り捨てられ、しかももし自分があの立場だったらと思っているんじゃないのかな？だがら本当は同胞（？）を破った奴と一緒にいるなんて嫌なんじゃないかな？
ペガサスへ目を向けるとなんか不機嫌な顔をしている。そりゃそうだろう。
デュエルモンスターズの生みの親として全てのカードは自分にとっては子供のような存在。それを破られて怒らない訳はない。
「「敵になると厄介だから」と言って相手が持っていた【ブルーアイズ】を破る奴なんかに【ブルーアイズ】を持つ権利があるか？ないね。いやそれ以前にカードを破り捨てるような奴がこのゲームをやる資格

すらないんじゃないのかな～。ねぇ～、どうなの？ねぇ～」
「黙れ！貴様のそんな話など時間の無駄だ！さっさとデュエルを続けろ！」
「図星を突かれて怒ったか。だがこの程度であの破られた【ブルーアイズ】の怒りが治ると思うなよ！カードを一枚伏せ終了だ」

悠也
ＬＰ１８００
手札４枚（内２枚【青眼の亜白龍】、【青眼の白龍】）
モンスター
【青眼の亜白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×２

「俺のターン、俺は【青眼の白龍】を攻撃表示で召喚！」

青眼の白龍
通常モンスター
☆８
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００

ホォ、ここで社長が愛し信頼する白龍様の一体がここで登場か。まぁ俺の【ブルーアイズ】デッキに対抗できるのはそのモンスターくらいしかいないから出し惜しみは無しにしたいのだろう。
「しかし【青眼の白龍】の攻撃力は【青眼の亜白龍】と同じだ。相討ち狙いか？」
「いや、違うな。俺は更に魔法カード【催眠術】を発動！これにより貴様のモンスターの攻撃力を８００ポイントダウンさせる！」

【青眼の亜白龍】の前に丸い玉を糸で吊るした振り子が現れ左右にユラユラと揺れる。俺を眺めていた【青眼の亜白龍】は目が回り身体がフラつき始める。

【青眼の亜白龍】
ＡＴＫ３０００→２２００

「【ブルーアイズ】よ、お前の力を奴に見せてやれ！『滅びのバーストストリーム』！」
【青眼の白龍】の口から滅びの閃光が放たれ【青眼の亜白龍】を飲み込んだ。しかし…
「甘いな。伏せカードオープン【ガード・ブロック】！モンスターが戦闘で破壊された時に発動！その戦闘で受けるダメージを０にし、その後デッキから１枚ドローする。よって俺にダメージはない。残念だったな」
「チッ、カードを一枚伏せターン終了だ」

海馬
ＬＰ１０００
手札３枚
モンスター
【青眼の白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターンドロー。手札の【青眼の亜白龍】の効果により手札の【青眼の白龍】を公開して特殊召喚。更に【青眼の白龍】を通常召喚」
俺のフィールドに【青眼の白龍】と【青眼の亜白龍】が並ぶ。これの２体が並んで観れるとは嬉しい。映画ではこの光景はなかったからな。

「そして俺は場の【青眼の白龍】と【青眼の亜白龍】を墓地へ送りーー」
「何!?自ら【ブルーアイズ】を墓地へ送るだと!?」
「おいおい、折角召喚した2体の【ブルーアイズ】を墓地へ送るって正気かよ!」
海馬に続いて城之内が俺の行動に文句をつけてくる。俺が召喚したモンスターを何の考えもなく墓地へ送ると思うのかな?
「待って!彼の【ブルーアイズ】達の間に渦が!」
お!杏子は気付いたようだな。そうこの行動はあるモンスターを召喚させるための下準備だ。
軈て2体の【ブルーアイズ】は渦に吸い込まれ、そして新たな姿にへと生まれ変わる。

「ーーー【青眼の双爆裂龍(ブルーアイズ・ツイン・バースト・ドラゴン)】を融合召喚!」

現れるは【青眼の亜白龍】と同じ身体を持ち、首元に2つの長い首を持つ一体のドラゴンが降り立つ。

【青眼の双爆裂龍(ブルーアイズ・ツイン・バースト・ドラゴン)】
融合・効果モンスター
☆10
光属性/ドラゴン族
ATK3000
DEF2500

「馬鹿な!融合カードを使わずに融合召喚しただと!?」
「【青眼の双爆裂龍】は融合カードを使わなくても自分フィールド上の【青眼の白龍】を2体の墓地へ送る事によりエクスト…融合デッキから特殊召喚出来るんだ」
「あれ?でもよそれ可笑しくねェか?」
「エッ?」

「うん。彼のフィールドには【青眼の白龍】は一体しかいなかった。【青眼の亜白龍】は【青眼の白龍】とは違うモンスターの筈。なのにどうして？」
外野の方で遊戯達が伝言ゲームみたいに言葉のキャッチボールをしながら説明した【青眼の双爆裂龍】の召喚法に疑問を持つ。【青眼の白龍】と墓地へ送った【青眼の亜白龍】はカード名が違うからその召喚方では成立しない筈。普通ならそう考えるよな。
「フフフ、いい質問だ。確かに俺のフィールドには【青眼の白龍】は一体しかいなかった。だから本来なら不可能だが、同じくフィールドいた【青眼の亜白龍】はフィールドと墓地に存在する時カード名を【青眼の白龍】として扱う事が出来るんだよ！」
「そうか。【青眼の亜白龍】はフィールドにいたから名前が【青眼の白龍】となっていた。だから召喚する事が出来たんだ」
流石主人公武藤遊戯。理解が早～い。
「バトルフェイズに入る。【青眼の双爆裂龍】で【青眼の白龍】を攻撃する」
【青眼の双爆裂龍】の片方の首の口が開き、そこに【青眼の白龍】の時と同じ滅びの光のエネルギーが溜めていく。
「【青眼の白龍】と貴様のモンスターの攻撃力は互角、相打ちにする気か!?」
「そんな訳ないだろう。【青眼の双爆裂龍】には3つの効果があってな、その1つ目の効果でこのモンスターは戦闘では破壊されない。つまり相打ちにはならず破壊されるのはお前の【青眼の白龍】だけだ！」
「何!?」
「ヤれ！『ツイン・バーストストリーム』!!」
【青眼の双爆裂龍】の口に溜まったエネルギーが放たれ【青眼の白龍】に向かって一直線に進む。これで一体の【青眼の白龍】は終わりだ。
「魔法カード発動【攻撃の無力化】。このカードの効果により貴様のモンスターの攻撃を無効にする」
しかしそう上手くはいかなかった。【青眼の白龍】に攻撃が当た

る直前見えない壁によって「ツイン・バーストストリーム」が掻き消された。

無印時代での【攻撃の無力化】は魔法カードだから【サイコ・ショッカー】の対象にならないし跳ね返された自身の攻撃をも防ぐ事が出来るから使いやすいと思っていた。…だがこの時の【攻撃の無力化】にはＯＣＧや後の効果とは違ってある弱点がある事に気付いた。

「それで攻撃を躱したつもりだろうが甘いな。【青眼の双爆裂龍】の２つ目の効果、このモンスターは１度のバトルに２回の攻撃が出来る」

「何だと!?」

そう、後の【攻撃の無力化】は攻撃を無効にして「バトルフェイズを終了する」と言う攻撃そのものを止める事が出来るが、この時代での【攻撃の無力化】は攻撃を一度しか無効に出来ない。つまり複数の攻撃は防ぐ事が出来ないと言う事。

「【青眼の双爆裂龍】もう一度【青眼の白龍】に攻撃！『ツイン・バーストストリーム』!!」

俺の声にもう片方の首が動き口の中にもう一度滅びのエネルギーを溜め勢いよく放つ。【青眼の白龍】も反撃するべき滅びのバースト・ストリームを放つ。

互いの技がぶつかり合い、物凄い爆音と衝撃がフィールドにいる２体を包み込む。軈て光が晴れフィールドを見るとそこには【青眼の双爆裂龍】が勝利の咆哮を上げていた。

「【青眼の白龍】撃破。俺はこれでターンを終了する」

悠也
ＬＰ１８００
手札３枚
モンスター
【青眼の双爆裂龍】

ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺の【ブルーアイズ】をよくも。この屈辱貴様を倒す事で晴らしてやる、ドロー！手札から魔法カード【命削りの宝札】を発動！このカードは自分の手札を５枚になるようにドローし、５ターン後全ての手札を墓地にへと送る」

出ましたチートカードの１枚。アニメ版の【宝札】カードって大量ドローするカードが多いんだよ。あのカードもその内の１つだ。

「…フッ、どうやら勝利の女神は俺に味方したようだ。このターンで貴様を葬る！魔法カード【死者蘇生】を発動！墓地より蘇れ【青眼の白龍】！」

海馬のフィールドに再び【ブルーアイズ】が咆哮を上げながら現れる。

この時代では蘇生カードはかなり少ない。なのにそれをここで引き当てるとはーーーーやるな。

「さらに【融合】を発動！手札の２体と場の【ブルーアイズ】３体で融合！出でよ【青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）】！」

場に３体の【青眼の白龍】が出現し、【融合】カードを軸に混じり合い３本の首を持つ１つのモンスターへと姿を変える。

【青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）】
融合モンスター
☆１２
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ４５００
ＤＥＦ３８００

俺の【青眼の双爆裂龍】よりも更に巨大でデュエルモンスターズ界の中でもトッププクラスの攻撃力を誇る海馬デッキ最強モンスター。

しかしよく見ると両手がある白いキング○○ラとも言えなくもないかも。
「まさか【青眼の究極竜】を召喚するとは。…だがそれでも俺のライフを0にする事は出来ないぞ」
「フッ」
「？」
「さらにこのカードを出す！【闇の呪縛】！」
「ッ!?」
何処からともなく出現した無数の鎖が【青眼の双爆裂龍】を縛り上げる。
「このカードは敵モンスター1体の身動きを封じ攻撃力を７００下げる」

【青眼の双爆裂龍】
ＡＴＫ３０００→２３００

【青眼の双爆裂龍】の攻撃力が２３００までに下がった。【青眼の究極竜】の攻撃力は４５００、その差は２２００。そして俺のライフは１８００…。
「これで終わりだ。行け【青眼の究極竜】！『アルティメット・バースト』！」
【青眼の究極竜】の3体の口に溜められた滅びのエネルギーが身動きが取れない【青眼の双爆裂龍】へと放たれた。この攻撃が決まれば俺の負けだ。だがさっき【ブルーアイズ】を倒された怒りで伏せカードを見落としているぞ。
「リバースカードオープン！永続罠【竜魂の城】発動！このカードは1ターンに1度、自分の墓地のドラゴン族モンスター1体をゲームから除外…取り除き、自分フィールドのモンスター1体の攻撃力をこのターン終わりまで７００ポイントアップさせる。俺は墓地の【伝説の白石】をゲームから取り除き【青眼の双爆裂龍】の攻撃力を７００アップさせる！」

【青眼の双爆裂龍】の背後に現れた江戸時代並みの巨大な城が出現し、その一箇所から光が飛び出し【青眼の双爆裂龍】の身体へ入り込み力を与える。

【青眼の双爆裂龍】
ＡＴＫ２３００→３０００

しかし【青眼の双爆裂龍】は自身の効果で破壊されないが戦闘ダメージは防げない。よってその差の１５００ポイントのダメージを受ける。

悠也
ＬＰ１８００→３００

「フン、このターンは凌いだか。だが闇の鎖で守備にする事は出来ない。次のターンで今度こそ貴様にトドメを刺してやる。ターンエンドだ」
「この瞬間【竜魂の城】の効果が切れて【青眼の双爆裂龍】の攻撃力は元に戻る」

【青眼の双爆裂龍】
ＡＴＫ３０００→２３００

海馬
ＬＰ１０００
手札０枚
モンスター
【青眼の究極龍】
ＡＴＫ４５００
魔法・罠
【闇の鎖】（【青眼の双爆裂龍】に使用中）

「俺のターンドロー。魔法カード【一時休戦】を発動！このカードは互いに一枚カードを引く。そして次の相手のターン終了時まで互いが受けるダメージは０になる」
「フ、【アルティメット】の攻撃を防ぐための時間稼ぎか」
「一応そんなもんだ。そんなことより早くカードを引け」
俺達は互いにデッキからカードを一枚引く。
「来たぜ。速攻魔法【サイクロン】発動！このカードの効果でその邪魔な鎖を消し去らせてもらう」
カードの発動時、一つの小型のサイクロンが海馬の場にある【闇の呪縛】のカードを消しる。同時に【青眼の双爆裂龍】を縛り付けていた鎖は粉々に砕け散り【青眼の双爆裂龍】は自由のみとなる。
「チッ」
「そして【青眼の双爆裂龍】で【青眼の究極竜】を攻撃！」
「何!?」
【青眼の双爆裂龍】の二頭の口が開き滅びのブレスを放つ。が攻撃力は【青眼の究極竜】の方が上、【青眼の究極竜】は反撃とばかりに三頭の口からブレスを吐き、【青眼の双爆裂龍】のブレスは押し返し逆に攻撃を受けてしまった。
「【青眼の双爆裂龍】は戦闘では破壊されない。そして【一時休戦】の効果で俺が受けるダメージは０だ」
「何をしたか知らないが、攻撃力では俺の【アルティメット】の方が勝っている。幾らダメージを０にして攻撃したところで意味はない。今のは全く無駄な攻撃だった」
「いや、俺はこの時を待っていたんだ。この瞬間【青眼の双爆裂龍】の３つ目の効果が発動！このカードが戦闘を行い破壊されなかった相手モンスターはそのダメージ計算終了時、ゲームから除外、基取り除かれる」
「何だと!?」
【青眼の双爆裂龍】が突如咆哮を上げると【青眼の究極竜】の目の前に次元の渦が現れ吸い込もうとする。何とか抵抗しようと踏ん張る

が引力は強くなっていき、遂に【青眼の究極竜】は次元の渦にへと吸い込まれてしまった。
「お、俺の【アルティメット】が…」
「遊戯を追い詰めたあの【アルティメットドラゴン】が…」
「こんなアッサリ…」
「しかも海馬のデッキにはもう【ブルーアイズ】は残ってねェ」
「【死者蘇生】も使っちゃたから蘇生させる事も難しい」
「海馬君…」
…外野の人達よ、少しは俺の応援もしてくれてもいいんじゃないかな。まるで俺が悪者みたいじゃん!!……あっ！いや悪者だった。じゃあいいか。では気を取り直してーー
「さらに俺はカードを一枚伏せターンエンド」

悠也
ＬＰ３００
手札２枚
モンスター
【青眼の双爆裂龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
【竜魂の城】
伏せ×１

「…俺のターン…ドロー」
海馬のターンになりカードを引くが、さっきまでの威勢がなく生気を感じられない。まるで「心ここに在らず」と言える。【青眼の究極竜】を失ったのが余程ショックだったのだろうね。
【死者蘇生】はさっき使っちゃたし、この時代には除外されたモンスターを呼び戻すカードはまだなかった筈だから仕方がないか。
「…ッ【闇・道化師サギー】を守備表示で召喚」

【闇・道化師サギー】
☆3
闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ６００
ＤＥＦ１５００

「さらに一枚伏せ終了だ」

海馬
ＬＰ１０００
手札０枚
モンスター
【闇・道化師サギー】
ＤＥＦ１５００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターンドロー（【闇・道化師サギー】…アイツは海馬のデッキに存在モンスターの中で唯一攻撃力１０００以下のモンスター。そしてその傍に伏せカードが1枚。これはあの『ウィルスコンボ』だな）」

ウィルスコンボーーーーーーそれは海馬が初期に【サギー】と一緒にあるカードを出しての最強最悪のコンボ。そのカードは【死のデッキ破壊ウィルス】

ＯＣＧ化のこのカード（エラッタ前）もかなり強力だが原作版はそれを遥か上をいく凶悪な効果である。

それの効果は…

『攻撃力１０００以下の闇属性モンスター一体を媒体に、相手のフィールド・手札・デッキの攻撃力１５００以上のモンスターを全て破壊し墓地へ送る』

…と言うまさにデッキ破壊カードである。
「(この【ブルーアイズ】のデッキには殆どが攻撃力１５００以上のモンスターばかりだ。だから『ウィルスコンボ』は一番警戒しなくてはならないコンボだ。しかし突破方はある)」
原作効果は強力だがＯＣＧのと違い大きな弱点がある。それはモンスターを媒体にする事…即ち媒体モンスターが破壊されなければならない事。
つまり媒体用のモンスターが破壊されて発動するカードと言う事。
その突破口の一つとしてとして先に【ウィルスカード】を破壊するのが一番手っ取り早い。だが今回は別の方法で行かせてもらおう。
「【青眼の双爆裂龍】で【闇・道化師サギー】を攻撃！『ツイン・バーストストリーム』！」
【青眼の双爆裂龍】の２つの首が動き同時に閃光を発射。そのまま２つの閃光が【サギー】に向かっていく。
「(俺の伏せカードは【死のデッキ破壊ウィルス】。【闇・道化師】が破壊された瞬間、コイツを媒体にしてウィルスコンボが発動、貴様のデッキは粉々になるのだ！そうなれば俺まだ勝機はある)」
「【闇・道化師サギー】が出ているって事はもしかして…」
「間違いねェ、あの伏せカードは遊戯を苦しめた【ウィルスカード】だ」
「あのコンボが決まれば海馬君にもまだ勝機はある！」
確かにこのまま攻撃が決まれば【ウィルスカード】の効果が発動して【ブルーアイズ】を失ったとは言え主力モンスターが豊富な海馬のデッキに勝つ事は不可能だ。しかしそのコンボは既に知っているから対策はしてきてあるさ。
「この瞬間リバースカード発動！罠カード【竜の逆鱗】！自分のドラゴン族モンスターが守備モンスターを攻撃した時、その攻撃力が守備力を超えていればその数値分の貫通ダメージを相手に与える」
「何だと!?」
【ウィルス】コンボは強力。だがその分弱点も大きい。【ウィルス

カード】を破壊出来るカードがなければーーーーその前にライフを０にしてしまえばいい。
「【闇・道化師】を媒体に【ウィルスカード】を発動させようとしたんだろうが残念…発動前にお前のライフが尽きる!まぁ、それなりに面白いデュエルだったよ。だがそれもここまでだ。では…さよなら」
そして２つの閃光が【闇・道化師】を飲み込みその衝撃波が後ろにいる海馬を余波が襲う。
「クッ、グワァァー!!」

海馬
ＬＰ１０００↓０

デュエルが終了してフィールドに出ていた【青眼の双爆裂龍】も消える。
「ブラボー、良いデュエルでしたよ悠也ボーイ。そして海馬ボーイ、ユーに負けた者への罰ゲーム、そしてユーが破ったと言う【ブルーアイズ】のカードに対する仕打ちも今ここで償ってもらいまショー。『マインドカード』!」
ペガサスの左眼のミレニアムアイが光り出し海馬を照らす。光りを浴びた海馬は聴てその目に光りを失い倒れる。そしてペガサスの持っていたカードには海馬の姿が映し出される。カードの牢獄に魂が閉じられた証拠だ。
「俺はお前を認めない。カードを破る奴が況してや同じカードを持つ事など絶対に認めない」
これで海馬への俺の言いたい事、そしてその仕打ちは終わりその場を後にする。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

それから少し時間が進み食事の時間になり城に集まったデュエリスト４人＋３人は食事の場で豪華なディナーを楽しんだ…て訳でも

ない。
　食事中視線を感じその方へチラ見すると城之内とその悪友の本田がこっちに眼を飛ばしてくる。まぁペガサスと一緒にいて海馬をあんな目に合わせたんだから仕方がないと言うば仕方がないか。
　でも遊戯と杏子はなんか複雑そうな眼をしている。杏子はあのハンバーガーショップで俺に命を救われた訳だし、遊戯もその事に感謝しているから今回の件で俺への見方が変わったんだろう。
　だが別に関係ない。誰かに心配される程俺は落ちぶれていないつもりだ。
「ここで皆さんにお知らせがあります。決勝トーナメントに望む際には事前に皆さんにお配りしましたこのカードが必要になります」
　支配人は2枚のカードを取り出す。【王の右手の栄光】と【左手の栄光】のカード。この2枚の内どちらが持っていないければ最終的には決勝トーナメントに出る事は出来ない。
「そしてもう一つ、お手元のスープをご覧ください」
　全員の視線がスープに移すと中から【ミレニアムアイ】に似たカプセルが浮き上がってきた。おい、食べ物の中にこんな物を入れるなよ！折角の楽しい食事が台無しじゃないか！
「それを2つに割ってみてください」
　言われた通りにカプセルに手を取り割ってみると丸まっている一枚の紙が入っていた。開いてみると「D」の文字が書かれていた。
「これより決勝トーナメントの組み合わせを発表します」
　スクリーンに対戦の組み合わせが表示される。AとBが、CとDが対戦する事になった。
「Bは誰だ!?」
「…俺はDだ」
「僕がBだよ、城之内君」
「げっ!?いきなり遊戯とかよ…」
「なら俺様はお前とって事か」
「そのようだな」
「では改めて第1試合は「武藤遊戯」様対「城之内克哉」様、そして

続く第2試合は「バンデット・キース」様対「神山悠也」様で行います。それでは皆さん明日の試合に備えゆっくりとお休みになってください」

そう言って支配人は部屋を出て行った。俺はさっきのカプセルの所為で食欲が失せてしまい肉を2口程食べて部屋を出、用意されている自室へ戻りデッキ調整をする事にした。

バンデット・キース……奴は確か原作では参加カードを持っていないから対戦相手であった城之内が寝静まった所を忍び込み盗んだったな。だとすれば俺の部屋にも忍び込んでくる可能性があるが対策は練ってあるから心配する必要はない。

そんな事より明日のデッキ…キースは機械族モンスターが中心のデッキで魔法カードの効果を受け付けないモンスターのデッキだった筈。今回はそれに対策するより実力差を見せる為にあのデッキで行くとするか。

あのモンスター達を見せた時のアイツの顔が楽しみだ、フフフフフ。

8話

チュン、チュン
鳥の囀りで目が覚め思い瞼を持ち上げる。
「ふぁ～、もう朝か…」
あれから一夜明け遂に決勝トーナメントが始まる。
俺の相手はバンデット・キース。元全米チャンピオンにして賞金王、そしてデュエルでの腕も中々であった。しかしペガザスに敗れてからはドラックと酒に溺れ剰え不正行為をするまでに落ちぶれていった哀れな男。
しかし元全米チャンピオンだけあって強力なデッキであるのは確かだ。だから油断をしたら足下をすくわれると思わなくてはならない。誰であろうと手を抜くことは俺のプライドが許さない。
準備の為に鞄の中を確認すると、何とトーナメント戦に必要なカードが無くなっていた。しかも2枚とも。
絶対キースの仕業であると感づく。恐らく俺をこのまま参加不可能にさせるために、2枚とも持っていったんだと思う。しかしやる事が本当にセコいな。そんな事してまで勝ちたいのかね?
えっ?大事なカードを奪われたってのに随分と余裕こいてるなって?それはそうだ。それに対策は練ってあるって言ったでしょ。
それより今は対戦するデッキの最終チェックをしなくては。

ーー

全ての準備が完了し昨日海馬と戦ったあの会場の扉の前にまで来ている。扉を開いて中に入ると上の観覧部分には遊戯御一行様、そしてその段の下にはソファーで寝そべっている余裕綽々のキースの姿が目に入る。
「何だ来たのか小僧。俺様にビビって逃げ出したのかと思ったぜ」
コイツ相変わらず上から目線でムカつくな…。でもその余裕も直ぐに消えることになるがな。

「それでは両者カードの提示をお願いします」
審判の指示でキースは傍から参加カードの1枚を取り出し見せつける。
「オラよ、これでいいだろう?」
「確かに。神山悠也、貴方もカードの提示をお願いします」
審判から指示が出したので脇に手を入れ手探りの行動をしながらチラ見でキースを見ると、ニヤつきながらこちらを見ている。本当はその参加カードは俺から奪った物で、しかも2枚ともに奪っているから俺は参加カードが無いと思っているに違いない。
ここでカードを提示しなければ奴は不戦勝となり難なく決勝戦に進める。その後の事を考えているのかは知らないけど何かしらまた卑怯な手を使ってくるだろう。
俺は黙秘したまま暫く手探りを続ける。それから約1分くらい経つ、遊戯様御一行はどうしたのかと疑問に思い話を始め、審判は何時迄も同じ行動をしている俺にイライラし始め、キースはニヤニヤしながら余裕の表情を浮かべる。ペガザスに関してはキースの思考を読んだからなのか俺の行動を黙って見ている。
流石にこれ以上時間を掛けると失格にされる可能性があるので脇から手を出す。その手には…

「ホラ、これでいいか?」

…「王の右手の栄光」カードが握っていた。
キースはサングラス越しだから分からないが信じられないモノを見る目で見ているだろうな。そして案の定立ち上がり声を荒げる。
「テメェ、何でテメェがその参加カードを持ってやがんだ!?」
「何でって、これが私のカードだからに決まっているだろう」
「バ、馬鹿な…テメェのカードは俺が持っているはず…
「(ニヤ)そのカードをよく見てご覧」
キースが持っているカードに目を向けると、突如カードが光りだすと粒子になって消滅していった。何が起きたのか分からずキースは

カードを持っていた手を見つめていた。
「それは俺が前待って作っておいた偽物さ。お前が昨夜俺の部屋に忍び込んでカードを奪うことは想定していた。だから対策を練らせてもらった」
昨晩食事が終わり部屋に戻った後、自身の力でカードのレプリカを作り上げ本物は敷き布団の下にはと隠しレプリカを鞄の中に入れた。鞄の中にカードがあることが確認出来れば間違いなくそれが本物だと誰もが思う、それにその王国から支給されたものなら偽物なんて疑いもしないだろう。
「キース・ハワード、参加を所持していない貴様はこのトーナメントに参加することは出来ん。すぐにこの場から立ち去れ」
キースは唇を噛み締める。参加カードを所持していないことがバレてしまったので、このままではペガサスへの復讐を果たす前に退場することになってしまうからな。だが俺は…

「いいじゃないか、別に俺は構わないぞ」

…参加ＯＫの返事を出した。その言葉に観戦者の遊戯御一行様と審判、キース本人も驚く。
「このまま不戦勝と言うのは俺としても後味が悪いからな。それに対戦相手の俺が闘いたいのなら問題ないだろう？ペガザス」
「…いいでしょう。ユーがそこまで言うのなら私は止めませーン。それに私自身、ユーのデュエルを観たいのデース」
あぁ言っているけど、本音は俺のデュエルより使うカードの方が見たいからだろうな。この時代ではだが俺の使用するカードは自身の知らない未知のカードな訳だから、デュエルモンスターズの生みの親なら興味持たない方が無理な話か。
「さて、主催者であるペガサスからお許しが出たぞ。これでお前はトーナメン戦に参加出来る。それともこのままオメオメと帰るか？どっちにする？」
「フン、考える必要もねェ。当然ヤラせてもらうぜ。テメェを潰

し遊戯って言う餓鬼も潰してペガサスを叩きのめしてやるんだからよォ！」

「フフフ、そうか。でもそれは無理だな。何故ならお前はここで俺に倒されるのだから」

「ホザくなよ、この餓鬼!!」

お互いにデッキをセットし、デュエル開始！

『デュエル』

悠也
ＬＰ２０００
キース
ＬＰ２０００

「先手は貰うぜ、俺のターン。俺はモンスターを守備で出してターン終了だ」

キース
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠
無し

「俺のターン、俺もモンスターを守備で出してターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札５
フィールド
裏守備×１

魔法・罠
無し

俺の予想どうりなら初手のあの伏せモンスターはあいつだと思う。万が一の為無闇に攻撃はしないでおこう。

「ケッ、そんなで俺様に勝てると思うなよ。雑魚は消えな、【振り子刃の拷問機械】を攻撃表示だ」

【振り子刃の拷問機械】
通常モンスター
☆６
機械族／地属性
ＡＴＫ１７５０
ＤＥＦ２０００

やっぱり【拷問機械】か。あいつは意外に守備力が２０００で高いんだよなぁ。

「奴のモンスターを血祭りにあげろ。『断罪処刑』！」

【拷問機械】が守備モンスターの前まで移動し、腹部にぶら下がっている巨大な振り子を引くと勢いよく振り下ろしす。攻撃が決まり裏守備のモンスターが表表示になると真っ二つに切断される。

破壊されたのは機械で出来たドラゴン【プロト・サイバー・ドラゴン】だ。

【プロト・サイバー・ドラゴン】
効果モンスター
☆３
光属性／機械族
ＡＴＫ１１００
ＤＥＦ６００

「どうだ！俺様の最強のマシンモンスターの餌食にしてやるぜ！ターンエンドだ！」

バンデット・キース
ＬＰ２０００
手札６枚
モンスター
【振り子刃の拷問機械】
ＡＴＫ１７５０
魔法・罠
なし

最強って過信しすぎじゃないか？それにリバースカード無し。舐めなれているのか、それとも伏せるカードがないのか。まぁどちらにしても手を抜く気はないから。

「俺のターン。俺は【サイバー・ドラゴン】を攻撃表示で特殊召喚」

俺のフィールドに全身が機械で出来た銀色のドラゴンが現れる。それはまるでさっきの【プロト・サイバー・ドラゴン】が機械の鱗を纏ったようなモンスターであった。

【サイバー・ドラゴン】
効果モンスター
☆５
光属性／機械族
ＡＴＫ２１００
ＤＥＦ１６００

「【サイバー・ドラゴン】は相手フィールドにモンスターが存在し、自分の場にモンスターが存在しない時、手札から特殊召喚が出来る。バトルだ！【サイバー・ドラゴン】で【拷問機械】を攻撃、『エヴォルーション・バースト』！」

サイバー・ドラゴンの口から光の光線が発射され拷問機械を破壊する。

キース
ＬＰ２０００→１６５０
「くそッ!!」
「さらに場に【アーマード・サイバーン】を召喚」
【サイバー・ドラゴン】の横に２つのキャノン砲を付けた特撮とかでよく見るような戦闘機が出現。

【アーマード・サイバーン】
ユニオン・効果モンスター
☆４
風属性／機械族
ＡＴＫ０
ＤＥＦ２０００

「そして【アーマード・サイバーン】を【サイバー・ドラゴン】に装備させる。合体せよ、【アーマード・サイバーン】！」
その掛け声に応えるように【アーマード・サイバーン】が上空にへと飛び上がり変形していく。そして【サイバー・ドラゴン】の真上にへと移動しそのまま背中にドッキング!!
「そしてカードを２枚伏せターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札２枚
モンスター
【サイバー・ドラゴン】
ＡＴＫ２１００
魔法・罠

伏せ×２
【アーマード・サイバーン】ーー【サイバー・ドラゴン】にユニオン中
「どうしたの？元全米Ｎｏ．１の最強デッキの力はこの程度なのか？あんま大した事ないね」
「ほざくなこの餓鬼！俺のターン！俺はこいつを出すぜ【リボルバー・ドラゴン】！」
挑発に激怒したキースはカードを叩きつけると、両腕と頭部が拳銃になっているマシンモンスターが現れる。

【リボルバー・ドラゴン】
効果モンスター
☆７
闇属性／機械族
ＡＴＫ２６００
ＤＥＦ２２００

「ヤれ【リボルバー・ドラゴン】。『ガンキャノン・ショット』！」
【リボルバー・ドラゴン】の頭部と両腕のチャンバー部分が高速回転し止まると、両腕の銃口から球が発射され一発がサイバードラゴンに直撃する。
「装備中の【アーマード・サイバーン】効果を発動。このカードが身代わりとなり【サイバー・ドラゴン】は一度だけ破壊を免れる」
合体していた【アーマード・サイバーン】のお陰で【サイバー・ドラゴン】の破壊は免れたが、ダメージを無効にした訳ではないので２体のモンスターの攻撃力の差の数値がライフから引かれる。

悠也
ＬＰ２０００→１５００

「チッ、防いだか。だがもう一発の球でテメエのモンスターは今度

こそ終いだ！」
残ったもう一発の銃弾が【サイバー・ドラゴン】に迫る。
「トラップ発動！【アタック・リフレクターユニット】！このカードの効果によって自分のフィールドの【サイバー・ドラゴン】を生贄に【サイバー・バリア・ドラゴン】を守備表示で特殊召喚する」
【サイバー・ドラゴン】の姿が光りだすと、首の周りに襟巻きを巻いた【サイバー・バリア・ドラゴン】にへと進化した。

【サイバー・バリア・ドラゴン】
特殊召喚・効果モンスター
☆６
光属性／機械族
ＡＴＫ８００
ＤＥＦ２８００

流石の【リボルバー・ドラゴン】の攻撃でも【サイバー・バリア・ドラゴン】の強固なボディーを貫くことが出来ず、銃弾は跳ね返されてしまった。

バンデット・キース
ＬＰ１６５０→１４５０

「畜生、モンスターを残しちまったか。だが守ってばかりじゃ俺様には勝てないぜ。ターン終了だ」

バンデット・キース
ＬＰ１４５０
手札６枚
モンスター
【リボルバー・ドラゴン】
ＡＴＫ２６００

魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー!…カードを一枚伏せターンエンド」

悠也
ＬＰ１５００
手札２枚
モンスター
【サイバー・バリア・ドラゴン】
ＤＥＦ２８００
魔法・罠
伏せ×２

【サイバー・バリア・ドラゴン】の守備力を超える攻撃力を持つモンスターはそう多くない。今はただ耐えるしかない。
「どうした?猛反撃しねェのかよ。そっちが来ないならこっちから行かせてもらうぜ。魔法カード【守備封じ】!コイツでテメェのモンスターを攻撃表示に変えるぜ」
【守備封じ】の効果で【サイバー・バリア・ドラゴン】が伏せの防御態勢から身体を起こして攻撃体制にへと変わってしまった。
「これで終いだ小僧、【リボルバー・ドラゴン】攻撃『ガンキャン・ショット】!」
【リボルバー・ドラゴン】のチャンバーが回転し止まると今度は頭部と両手のそれぞれの銃口から一発ずつ、計三発の球が発射される。
「【サイバー・バリア・ドラゴン】の効果発動!このモンスターが攻撃表示の時、１ターン１度だけ攻撃を無効にする」
【サイバー・バリア・ドラゴン】の首回りの鬣が緑色に光り壁を作り出し１の銃弾を打ち消す。しかし…
「馬鹿が!一発防いだところで意味はねェ!今度こそ終わりだ小僧!!」

…残る２発の銃弾が【サイバー・バリア・ドラゴン】の身体を貫き大爆発を起こした。

「罠カード発動【攻撃の無敵化】！このカードは発動時２つの効果の内１つを選び効果を適応させる。俺は２つ目の効果でこのターン受ける戦闘ダメージを０にする」

「チッ、悪運の強え野郎だ。俺は【スロットマシーン】を召喚してターン終了だ」

【スロットマシーンＡＭ－１】
通常モンスター
☆７
闇属性／機械族
ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ２３００

バンデット・キース
ＬＰ１４５０
手札５枚
モンスター
【リボルバー・ドラゴン】
ＡＴＫ２６００
【スロットマシーンＡＭ－１】
ＡＴＫ２０００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー。リバースカードオープン【リビングデッドの呼び声】！このカードは自分の墓地にあるモンスターを一体攻撃表示で特殊召喚することが出来る俺は【プロト・サイバー・ドラゴン】を攻撃表示で特殊召喚！」

俺のフィールドに【サイバー・ドラゴン】の簡単な作りにしたよ

うなモンスターが【プロト・サイバー・ドラゴン】現れる。
「おい、ちょっと待てよ!そのカードは確か墓地のモンスターをあの気色悪いモンスターに変えちまう奴じゃねェのかよ!?」
上で城之内が騒いでいる。どうやらあの時のデュエルが相当トラウマものだったらしいな。
「この【リビングデットの呼び声】はお前が知っているのとは別物だがらだ。俺のモンスター達をゾンビみたいにさせてまで復活させたくないからな」
俺も大切なモンスター達をあんな姿にさせるのは俺も抵抗あるっと言うか嫌だからな。
「そしてこの特殊召喚に対して手札から速攻魔法【地獄の暴走召喚】を発動。自分フィールドに特殊召喚したモンスターと同名のカードを手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚させることができる」
「ケッ!幾ら雑魚を並べたところで壁にもらりゃしないぜ」
「それはどうかな。…俺はデッキ二体、墓地から一体、計三体のの【サイバー・ドラゴン】を特殊召喚させる」
更に俺のフィールド上に三体の【サイバー・ドラゴン】が特殊召喚される。
「ソ イ ツ は さっ き の!? だ が サイバードラゴン は プロト・サイバードラゴンとは違うカードの筈だ!?何故召喚が成立してやがる!!」
「それは【プロト・サイバー・ドラゴン】の効果のお陰さ」
「何!?」
「コイツは表側表示の時、《サイバー・ドラゴン》として扱われる効果を持っている。そして【地獄の暴走召喚】は可能な限り同名のモンスターを呼び出すカード。だから3体の【サイバー・ドラゴン】を呼び出すことが出来たのさ」
これは元の世界のこの作品のゲームでも相手が使用していたコンボで有名だからな。それにしても、いざやってみると気持ちいもんだな。

「さらに【地獄の暴走召喚】の効果で相手プレーヤーも自分のフィールドにいるモンスターを一体選択して同名カードを全て特殊召喚出来る」
「…俺様のデッキに【リボルバー・ドラゴン】と【スロットマシーン】は一体しかいねェ」
「ならこのまま俺のターンの続行させてもらう。手札から魔法カード【フォトン・ジェネレーター・ユニット】を発動。この自分フィールド上の【サイバー・ドラゴン】二体を生贄に【サイバー・レーザー・ドラゴン】を召喚させる。俺は【サイバー・ドラゴン】一体と《サイバー・ドラゴン》と化している【プロト・サイバー・ドラゴン】を墓地へ送り、デッキから【サイバー・レーザー・ドラゴン】を召喚！」
【プロト・サイバー・ドラゴン】の一体と【サイバー・ドラゴン】が光りだし、尻尾の先端がレーバー砲になってある【サイバー・ドラゴン】に酷似したモンスターが現れる。

【サイバー・レーザー・ドラゴン】
特殊召喚・効果モンスター
☆6
光属性／機械族
ＡＴＫ２４００
ＤＥＦ１６００

「次から次へと姿を変えやがって。だがそいつの攻撃力じゃ【スロットマシーン】を倒すがやっとところだ。次のターン俺の【リボルバー・ドラゴン】で相殺してやるぜ」
「それはどうかな。【サイバー・レーザー・ドラゴン】の効果発動！1ターンに1度このカードの攻撃力以上の攻撃力、若しくは守備力を持つモンスター一体を破壊する！その効果の対象はーーー【リボルバー・ドラゴン】だ！」
「何!?」
「『フォント・エクス・ターミネーション』！」

【サイバー・レーザー・ドラゴン】の尻尾の先端が開くとエネルギーが収縮していき放たれる。そのレーザーは【リボルバー・ドラゴン】に命中し破壊する。【サイバー・レーザー・ドラゴン】は防御に特化した【サイバー・バリア・ドラゴン】の逆で攻撃に特化しているのだ。

「俺様の【リボルバー・ドラゴン】が…」

「自分より強いモンスターを破壊する効果だなんて…」

「あれだったら、海馬君の【ブルーアイズ】でも突破出来る」

「マジかよ!最強じゃねェか!?」

遊戯達が【サイバー・レーザー・ドラゴン】の効果に驚いている。そりゃそうだ。自分の攻撃力より高い数値を持つモンスターを無条件で破壊する効果だもんね。

「【サイバー・レーザー・ドラゴン】で【スロットマシーン】を攻撃!『エヴォリューション・レーザー・シャット』!!」

【サイバー・レーザー・ドラゴン】の口から『エヴォリューション・バースト』に似た虹色の光線が放たれ【スロットマシーン】を破壊する。

バンデット・キース
１４５０→１０５０

「【スロットマシーン】撃破!ターンエンドだ!」

悠也
ＬＰ１５００
手札１枚
モンスター
【サイバー・レーザー・ドラゴン】
ＡＴＫ２４００
【サイバー・ドラゴン】×２
ＡＴＫ２１００
魔法・罠

【リビングデッドの呼び声】←モンスター無し

「凄い、あんな強力なモンスター相手に一歩も引いてない」

「あぁ、元全米Ｎｏ．１と互角に戦えるなんてよな。やっぱアイツスゲェよ」

「けどまだ分からないよ」

『えっ!?』

「悠也君とキースのデッキは、お互いにマシンモンスターを中心としたデッキ。マシンモンスターはその特性上直線的な攻撃になってしまうけど、攻撃力が高いカードが多いんだ。キースのデッキはまだまだ強力なカードが沢山入っているはず。油断しちゃダメだ、悠也君」

おぉ、流石遊戯君、応援していた海馬を倒した俺を応援してくれるとは随分優しいな。でもその助言を素直に受かっておくことにしよう。何せキースのモンスターの大半が、魔法攻撃を一切受け付けないとか言う能力か特性を持っているからな。

「だがこれでお前のモンスターは０。片や俺の場にはモンスターが３体だ。この戦力差は大きいなぁ。さぁ、どうする?」

「調子に乗るなよ小僧、俺様のターン!俺はこのモンスターを出すぜ、【機械王】召喚!」

キースのフィールドにまるで鬼を機械化したような昭和とかに大流行したロボットが現れる。

【機械王】

効果モンスター

☆６

地属性／機械族

ＡＴＫ２２００

ＤＥＦ２０００

「コイツは自身を含め、場にいる機械族モンスター１体につき、攻撃

力が１００ポイントアップする。今場にいる機械族はコイツも含めて４体、攻撃力は４００ポイントアップだ！」

【機械王】
ＡＴＫ２２００→２６００

「ヤれ【機械王】！あのレーザー野郎に攻撃【ジェット・パンチ】！」
【機械王】が右腕を向けると肘部分が点火し、その上部分が飛び出す。その腕は【サイバー・レーザー・ドラゴン】に直撃し爆発する。てかレーザー野郎って、名前で言ってくれないかな。

悠也
ＬＰ１５００→１３００

ＬＰは減ったが機械族モンスターが減ったことによって【機械王】の攻撃力がダウンする。

【機械王】
ＡＴＫ２６００→２５００

「さらにカードを一枚伏せターン終了だ」

バンデット・キース
ＬＰ１０５０
手札４枚
モンスター
【機械王】
ＡＴＫ２５００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、ドロー。モンスターを守備表示で召喚。そして２体の【サイバー・ドラゴン】を守備表示にしてターンエンド」

悠也
ＬＰ１３００
手札１枚
モンスター
【サイバー・ドラゴン】×２
ＤＥＦ１６００
裏守備表示×１
魔法・罠
【リビングデッドの呼び声】←モンスター無し

「俺様のターン。…まずはモンスターを１体召喚するぜ。【ＴＭ―１　ランチャースパイダー】！」
背中に２つのロケットランチャーを背負った４本足の蜘蛛型の機械モンスターが現れる。

【ＴＭ―１　ランチャースパイダー】
通常モンスター
☆７
炎属性／機械族
ＡＴＫ２２００
ＤＥＦ２５００

【機械王】
ＡＴＫ２５００→２６００

「さらに魔法カード【機械改造工場】！コイツで俺様の場のマシンモンスターの攻撃力、守備力を３００ポイントアップさせる」

【機械王】
ＡＴＫ２６００→２９００
ＤＥＦ２０００→２３００
【ＴＭ―１　ランチャースパイダー】
ＡＴＫ２２００→２５００
ＤＥＦ２５００→２８００

あれ？あのカードは確か装備魔法のはず？なのに何故効果が全てのモンスターに……あっ！そう言えば遊戯と戦っていた時には機械族モンスター全てに効果が適応されていたな。
「【機械王】奴の守備モンスターを蹴散らせ！」
【機械王】の今度は両腕を飛ばして攻撃。裏守備モンスターが表側表示になったが飛んできたパンチによって簡単に破壊される。

【サイバー・ドラゴン・ツヴァイ】
効果モンスター
☆４
光属性／機械族
ＡＴＫ１５００
ＤＥＦ１０００

「そして【ランチャー・スパイダー】でそのドラゴンに攻撃だ！」
【ランチャー・スパイダー】の背中のロケットランチャーから無数のミサイルが発射され１体の【サイバー・ドラゴン】を吹き飛ばした。

【機械王】
ＡＴＫ２９００→２８００

「どうだ？俺様の恐ろしさが分かったか。どうあがいても俺様には勝てないってことを教えてやるぜ。ターン終了だ」

バンデット・キース
ＬＰ１０５０
手札３枚
モンスター
【機械王】
ＡＴＫ２８００
【ＴＭ―１　ランチャー・スパイダー】
ＡＴＫ２５００
魔法・罠
【機械改造工場】

「俺のターンドロー！魔法カード【マジック・プランター】発動。俺の場の【リビングデッドの呼び声】を墓地に送って２枚ドローする。俺は【サイバー・ドラゴン・ドライ】を召喚！」

【サイバー・ドラゴン・ドライ】
効果モンスター
☆４
光属性／機械族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ８００

「コイツはフィールド上にいる時、《サイバー・ドラゴン》として扱われる。そして魔法カード【アイアンドロー】。自分フィールド上に機械族効果モンスターが２体の時に発動可能であり、デッキからさらに２枚カードを引く。よし、魔法カード【融合】を発動！フィールドの【サイバー・ドラゴン】と《サイバー・ドラゴン》と化している【サイバー・ドラゴン・ドライ】で融合。融合召喚【サイバー・ツイン・ドラゴン】!!」

２体のモンスターが混ざり合い、以前海馬との戦いで【青眼の双爆裂龍】の様に２つの首を持つ機械の双頭龍が現れる。

【サイバー・ツイン・ドラゴン】
融合・効果モンスター
☆８
光属性／機械族
ＡＴＫ２８００
ＤＥＦ２１００

「攻撃力２８００だと!?」
「これで【機械王】との攻撃力は互角。バトルだ！【サイバー・ツイン・ドラゴン】で【ランチャー・スパイダー】を攻撃！『エヴォリューション・ツイン・バースト』!!」
【サイバー・ツイン・ドラゴン】の２つある首の口が開き、それぞれの口から黄色い閃光が放たれ【ランチャー・スパイダー】を破壊する。
バンデット・キース
ＬＰ１０５０→７５０

【機械王】
ＡＴＫ２８００→２７００

「チッ」
「まだだ、【サイバー・ツイン・ドラゴン】は１度のバトルに２回の攻撃が出来る」
「何!?」
「【サイバー・ツイン・ドラゴン】で【機械王】を攻撃！『エヴォリューション・ツイン・バースト』！」
【サイバー・ツイン・ドラゴン】は再び攻撃体勢に入り、両方の口から黄色い閃光が放たれ【機械王】を破壊する。
「だがこの瞬間、罠カード発動！【時の機械ータイム・マシーン】！このカードは自分のモンスターが破壊された時に発動し、１ターン前のモンスターを呼び出す。これで【機械王】を呼び戻すぜ」

キースのモンスターゾーンに昔の石炭とかを入れる（？）ような入れ物が現れ、扉が開くと中きら【機械王】が姿を現わす。
てかどうしてＬＰが減っていないんだ？１ターン前のモンスターだから発生するダメージも無かったことに出来るのか？ＯＣＧ版はダメージを無効に出来ないからその点は便利だよな。
「（チッ、厄介なモンスターを残しちまった）カードを１枚伏せターンエンドだ」

悠也
ＬＰ１３００
手札１枚
モンスター
【サイバー・ツイン・ドラゴン】
ＡＴＫ２８００
魔法・罠
伏せ×１

「小僧、俺様をここまでコケにしやがって…許さねェ！テメェはここで叩き潰してやる！俺様のターン！俺様もこのカードを出すぜ【融合】！場の【機械王】と手札の【機械軍曹】を融合！出ろ【パーフェクト機械王】!!」
相手のフィールドに剣を持った機械の兵士【機械軍曹】が出現すると【機械王】と合体していき、プラロデルやアニメで大人気のあの有名なガ○○ムぽい巨大ロボットが出現する。

【機械軍曹】
通常モンスター
☆４
炎属性／機械族
ＡＴＫ１６００
ＤＥＦ１８００

【パーフェクト機械王】（アニメ版）
融合・効果モンスター
☆７
地属性／機械族
ＡＴＫ２７００
ＤＥＦ２２００

このカードの名前を聞いた一瞬ビクッとしたが、機械族のデッキなら入っていても可笑しくないか。【機械王】入ってるし。
「まさかテメェのような餓鬼にこのモンスターを出すことになるとはなぁ。コイツの効果は自身も含める場の機械族モンスター１体につき、攻撃力が５００ポイントアップだ！」

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ２７００→３７００

シマった！アニメ版の効果は自身もパワーアップの対象になるんだった！ＯＣＧ版のイメージが強いからすっかり忘れてた！
「さらにこのカードを出すぜ。【メカ・ベビーウェポン】」
キースの場に戦闘機に酷似した小さなマシンモンスターが現れる。

【強化支援メカ・ベビーウェポン】
ユニオン・効果モンスター
☆３
闇属性／機械族
ＡＴＫ５００
ＤＥＦ５００

「コイツは自分の機械族モンスターの装備カードなって攻撃力を５００ポイントアップさせる」

【ベビーウェポン】が変形し、頭部の部分がキャノン砲になり【パーフェクト機械王】の両手に収まり、後方部が下半身と合体しケンタウロスのように四足歩行になる。
そしてそのパワーを受け取り【パーフェクト機械王】の攻撃力が上がる。

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ３７００→４２００

「そして【機械改造工場】の効果！コイツの効果で攻撃力、守備力共に３００ポイントアップだ」

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ４２００→４５００
ＤＥＦ２２００→２７００

【パーフェクト機械王】の攻撃力が４０００を超えた。これはマズい。
「ここまで俺様と戦ったことは褒めてやる。だがこれで終わりだ。【パーフェクト機械王】奴のモンスターを蹴散らせ！」
キースの指示により【パーフェクト機械王】は両手に持っているビーム砲の照準を【サイバー・ツイン・ドラゴン】に合わせると、エネルギーを貯め始めチャージが完了すると物凄い威力を秘めたビーム発射される。
「ッ！罠カード発動！永続罠【レアメタル化・魔法反射装甲】！このカードは発動後、機械族モンスターの装備カードとなり攻撃力を５００ポイントアップさせる。【サイバー・ツイン・ドラゴン】に装備させ攻撃力を５００アップ！」

【サイバー・ツイン・ドラゴン】
ＡＴＫ２８００→３３００

しかしそれでも【パーフェクト機械王】の攻撃力には及ばないため【サイバー・ツイン・ドラゴン】は身体を貫通され爆発を起こし消滅した。

悠也
ＬＰ１３００→１００

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ４５００→４０００

「チッ、ギリギリ耐えたか。悪運の強い奴だ。ターンエンドだ」

バンデット・キース
ＬＰ４５０
手札１枚
モンスター

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ４０００
魔法・罠
なし

…これはちょっとヤバいな。手札は【サイバネティック・フュージョン・サポーター】の１枚だけでモンスターもいない上に、ＬＰは僅か１００。正に絶対絶滅の状態に等しいな。
ただ、直接攻撃がないこの時代だからまだなんとかなるかもしれない。諦めないぜ、俺は。
「俺のターンドロー。……【サイバー・ヴァリー】を攻撃表示で召喚してターンエンドだ」

【サイバー・ヴァリー】

効果モンスター
☆1
光属性／機械族
ＡＴＫ０
ＤＥＦ０

悠也
ＬＰ４００
手札１枚
モンスター
【サイバー・ヴァリー】
ＡＴＫ０
魔法・罠
なし

「攻撃力０のモンスターを攻撃表示で出すってことは、もう勝負を捨てたってことだな。だったその諦めの良さに対して最後は思いっきりやってやるぜ、俺様のターン。【パーフェクト機械王】奴のモンスターを攻撃だ！」

先程と同じビームが両手に持っている主砲から放たれる。本来ならこの戦闘で終了になるが、攻撃力０のモンスターを攻撃表示な上伏せカードなしで出しているのに「何もない」訳はない。

「【サイバー・ヴァリー】の効果発動！表側表示のこのカードが攻撃対象になった時、このカードをゲームから取り除くことで、デッキからカードを１枚ドローしバトルを強制終了させる」

【サイバー・ヴァリー】が粒子となって消滅すると、ビームも同じく粒子化され消滅する。そして俺はカードを１枚引いた。そのカードは【パワーボンド】だった。

「ケッ、今更何をしようが俺様のマシンモンスターを倒せやしないぜ。カードを１枚伏せターン終了！」

バンデット・キース
ＬＰ４５０
手札１枚
モンスター
【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ４０００
魔法・罠
伏せ×１

俺の手札は先程ドローしたカード１枚のみ。この引きに全てが掛かっている。
「俺のターンードロー!!…ッ（このカードは）!?手札から速攻魔法発動【サイバネティック・フュージョン・サポーター】！このカードはＬＰを半分払うことで、このターン機械族の融合モンスターを召喚する時、１度だけその融合モンスターの素材となっているモンスターを手札・デッキ・墓地から除外、基ゲームから取り除くことで、その機械族融合モンスターを特殊召喚出来る」

悠也
ＬＰ１００→５０

「何!?デッキと墓地からでもモンスターを融合させるだと!?」
「そして魔法カード【パワーバンド】を発動！このカードは機械族専用の魔法カード。本来は場と手札の機械族モンスターを墓地に送ることで融合召喚を行うが、【サイバネティック・フュージョン・サポーター】のお陰で墓地から除外することで融合召喚が出来る」
「よって俺は墓地の３体の【サイバー・ドラゴン】を除外して融合！」
場に３体の【サイバードラゴン】が現れると、１体を中心に交わり始め新たな１体のモンスターが誕生する。
その姿は【青眼の究極竜】のように３本の首を持った巨大な機械の３頭龍。

「出でよ!【サイバー・エンド・ドラゴン】!」

【サイバー・エンド・ドラゴン】
効果・融合モンスター
☆１０
光属性／機械族
ＡＴＫ４０００
ＤＥＦ２８００

「ほぉ、攻撃力４０００のモンスターを出すとはやるじゃねェか。だがそれでも強化された俺様の【パーフェクト機械王】の敵じゃねェ。しかも機械族モンスターが増えたことで攻撃力アップだ」

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ４０００→４５００

機械族が増えたことにより【パーフェクト機械王】の攻撃力が【サイバー・エンド・ドラゴン】の元々の攻撃力を超えた。…そう、元々の攻撃力は…。

「いや、そうでもないぞ。【パワーボンド】の効果、それは融合召喚したモンスターの元々の攻撃力を2倍にする。つまり【サイバー・エンド】の攻撃力は…」

【サイバー・エンド・ドラゴン】
ＡＴＫ４０００→８０００

「攻撃力８０００だと!?」

「バトルだ!【サイバー・エンド・ドラゴン】で【パーフェクト機械王】を攻撃!『エターナル・エヴォリューション・バースト』!!」

【サイバー・エンド・ドラゴン】の３つの首の口が開き、神々しい閃光が放たれる。これで俺の勝ち…。

「掛かったな！魔法カード発動！【リミッター解除】！コイツで自分フィールド上にいる全ての機械族モンスターの攻撃力を２倍にする！」

【パーフェクト機械王】
ＡＴＫ４５０００→９０００

【パーフェクト機械王】は反撃と言わんばかりにビームを放ち両者の攻撃がぶつかり合う。すると次第に【サイバー・エンド・ドラゴン】の閃光が押し戻され始める。
「最後は自滅してＴｈｅ　Ｅｎｄだ！」
攻撃力が９０００になるとは恐れ入った。このまま反撃を食らって１０００ポイントのダメージを受けて負けただろう。

ーーーーーーーこのカードが無ければの話だがーーーー

「速攻魔法【決闘融合ーーバトル・フュージョン】発動！自分フィールドの融合モンスターが相手モンスターとバトルする時に発動！その融合モンスターの攻撃力は、ターン終了時までバトルする相手モンスターの攻撃力分アップする！」
「何だと!?」
【サイバー・エンド・ドラゴン】
ＡＴＫ８０００→１７０００
「やれ！『エターナル・エヴォリューション・バースト』!!」

【サイバーエンド・ドラゴン】にさらなる力がプラスされ【パーフェクト機械王】の攻撃を逆に押し返し始め、軈て【パーフェクト機械王】の力が押し負け閃光に飲み込まれ、その衝撃はデュエルリングにいる俺達２人だけでなく観戦している遊戯達やペガサスにまで余波を受けるほどであった。

バンデッド・キース
ＬＰ７５０→０

「勝者、神山！」
よし！正直危なかった。よくよく思い返してみれば、この世界に来てここまでピンチになったことなんてなかったな。ＬＰ５０なんてギリギリにも程があるだろう。
「巫山戯るな！俺様がこんな小僧なんかに負けるなんてあり得ねェんだよ！」
完全にブチ切れたキースは脇にしまっていた拳銃を取り出しペガサスにへと向ける。おやおや…。
「ペガサス！今すぐ賞金を出せ！でなきゃ今ここでテメェの命を貰う！」
「キース、テメェ卑怯だぞ！」
外野の皆もキースの行いに批判し、特に城之内が今にも飛び降りてきそうな勢いだ。
「やれやれ、こんなことまでして勝ちたいとは…これが元全米Ｎｏ．１の成れの果てとなると情けなく思えてくるな」
「何だと!?」
「事実だろ？拳銃まで使うなんて情けなさ過ぎて呆れてくる」
「煩セェ！小僧ォが散々この俺様をコケにしやがって、ペガサスの前にテメェの命を貰うぞ！」
キースは拳銃を俺にへと向けてくる。これで脅しているつもりか？
「面白い…撃ってごらん」

「ッ!?どこまでおちょくりやがって…許さねェ!!」バン
キースは銃の引き金を引き銃声が会場に響き渡る。だが弾が俺に当たることはなかった。何故なら今撃った弾は俺が掴まえていたからだ。その光景に以前見たことがある遊戯、杏子、城之内、そして俺の力の事を知っているペガサスを除いた全員が驚愕していた。
「返すぞ。しっかり受け止めろよ」
持っていた弾を親指で弾くように打ち出すとキースの持っていた拳銃に当たり破壊される。
キースが衝撃で怯んだ隙に身体から触手を出し、奴の身体に巻き付けて持ち上げ身動きを取れなくする。
「な、何だこりゃ!?離せ!離しやがれェ!!」
「フン、所詮脇役は脇役…出番終了だ!」
左手を翳しキースの真横に異次元空間を作りあげ、そこにへと放り込む。放り込れたキースは「ウワァーー」と叫びながら消えていき空間を閉じる。
心配しなくても死んだわけじゃない。ただ空間を繋いでこの島の近くの海へと放り込んだだけだ。悪の力を持ってもあんな奴を葬るために使いたくないからな。
でもその光景に遊戯達男性陣は目を見開き、杏子は目を瞑って視線を背ける。今の光景はどう見ても殺したようにしか見えないもんな。
「そ、それでは暫し休憩の後、決勝戦『武藤遊戯』対『神山悠也』の試合を始める」
唖然としていた審判が正気に戻り次の対戦の発言した。
次は遂に決勝。いよいよこのトーナメント戦も大詰めになってきたな。
相手は主人公の武藤遊戯だ。生半可な気持ちで挑んだら足元掬われかねない。だから本気の本気であのデッキで挑むことにしよう。
じゃあこの後デッキの調整をして少し仮眠するとするか。ちょっと興奮して疲れてしまったからな。

9話

バンデット・キースとのデュエルから約1時間が経ち、遂に決勝戦が始まる。買っても負けてもこれでトーナメントは終了、だったら選択肢は『勝つ』の一つしかないな。

そして扉の前にへとやってくる。しかし相手は主人公の武藤遊戯。流石に緊張する…一旦気持ちを落ち着かせるか。

「スゥ～、ハァ～…スゥ～、ハァ～」

深く息を吸って、吐いてを3回程繰り返し顔をパチンっと叩き意を決して扉を開ける。

中にはもう既に遊戯がデュエルリングの向かい側に立っていた。しかも名もなきファラオことアイツになって。ーーー最初から本気で行くつもりだな。まぁ俺は端からそのつもりだから別に構わないけど。

「それではこれより武藤遊戯、神山悠也よる決勝戦を行う。両者カードの提示を」

遊戯は左手の栄光を、俺は右手の栄光を提示する。

「確かに。それではデュエルを開始する」

審判の合図でデュエルリングが起動する。しかしまさか本当に主人公と戦うことになるとはな。しかも歴代最強と言われるようになる存在に。普通の奴ならどんな反応するもんか？感激？熱いバトルしよう？だか俺はそんな暑苦しいのは嫌いなんでね。どう言ったものかな？

「遊戯ボーイ、悠也ボーイ。お二人もよくここまで勝ち進んできました。実に素晴らしいデース。お互いに悔いが残らないデュエルを期待シマース」

…ペガサスの言う通りだ。つまらない事なんか考えてないで、今はデュエルに集中しないとなぁ。

「神山君、君のような強いデュエリストと戦えるのは心こら嬉しいと思う。だが俺には負けられない理由がある。だからこのデュエル

最初から全力で行かせてもらうぜ」
「…その理由ってのが何なのかは知らないが、全力で行くって意見には賛成だ。折角の決勝戦が「出し惜しみして負けた」なんてチンケな終わり方は俺も納得出来ないしな。だから俺も全力でお前を倒す！」

『デュエル!!』

遊戯
ＬＰ２０００
悠也
ＬＰ２０００

「俺のターン！俺は【エルフの剣士】を召喚、守備表示！ターンエンドだ」

【エルフの剣士】
通常モンスター
☆４
地属性／戦士族
ＡＴＫ１４００
ＤＥＦ１２００

武藤遊戯
ＬＰ２０００
手札５枚
モンスター
【エルフの剣士】
ＤＥＦ１２００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー。魔法カード【トレード・イン】を発動。手札のレベル８のモンスターを一体墓地に送って、デッキからカードを二枚ドロー出来る。【青眼の白龍】を墓地に送って二枚ドローする。そして【アサルト・ワイバーン】を召喚」

【アサルト・ワイバーン】
効果モンスター
☆４
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１０００

「【アサルト・ワイバーン】で【エルフの剣士】を攻撃！」
【アサルト・ワイバーン】の刃物のような翼が【エルフの剣士】を斬り刻み消滅させた。
「そしてこの瞬間【アサルト・ワイバーン】の効果発動！このカードが戦闘でモンスターを破壊した時、自身を生贄に手札か墓地からドラゴン族モンスター一体を特殊召喚出来る」
「何!?まさかッ!?」
「その通り。さっき墓地に送った【青眼の白龍】を特殊召喚する！」

【青眼の白龍】
通常モンスター
☆８
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００

「マジかよ！１ターン目から【ブルーアイズ】を召喚しやがった!?」
「しかもモンスターを破壊することで、自身を生贄に新たなドラゴ

ンを呼び出せる」
「そんなカードがあんのかよ!?」
海馬のデュエルでは直ぐに倒されてしまったからな、その効果を知らない遊戯達は【青眼の白龍】が1ターン目から出てきたことに驚いている。
「さぁ、俺の【ブルーアイズ】を倒すことが出来るかな?カードを一枚伏せてターンエンド」

悠也
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
【青眼の白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン。いきなり【ブルーアイズ】を召喚するとはやるな。ならこっちはコンボ攻撃だ!【デーモンの召喚】を攻撃表示!」

【デーモンの召喚】
通常モンスター
☆６
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ２５００
ＤＥＦ１２００

「さらに魔法カード【魔霧雨(まきう)】発動!」
突如フィールド全体に霧雨が降り出し【ブルーアイズ】の身体を濡らしていく。しかしこれと言って何らかの変化は見られない。一体何がしたいんだ?

「【魔霧雨】のカードによって【ブルーアイズ】の身体は濡れる。これにより【デーモン】の電撃の威力が増し攻撃力３０％がアップ！」

【デーモンの召喚】
ＡＴＫ２５００→３２５０

しまった。このコンボはこの王国編で遊戯が【デーモン】の攻撃力を上げるためによく使っていたコンボだ。ＯＣＧ版と効果が違うからすっかり忘れていた。

「これで【ブルーアイズ】の攻撃力を上回ったぜ。行け【デーモンの召喚】、【青眼の白龍】を攻撃！【魔降雷】!!」

【デーモン】の身体から発せられた電撃が【ブルーアイズ】に直撃、断末魔を上げながら【ブルーアイズ】は破壊された。

「【青眼の白龍】撃破！」

悠也
ＬＰ２０００→１７５０

「よっしゃ！遊戯がまず一体【ブルーアイズ】を倒したぜ」

「でも彼のデッキには【ブルーアイズ】のカードはまだ2枚残っているし、あの【ブルーアイズ】そっくりのカードも3枚ある。まだまだ油断は出来ないよ」

「遊戯頑張って！」

「俺はこれでターン終了だ」

遊戯
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
【デーモンの召喚】
ＡＴＫ３２５０

魔法・罠
なし

流石主人公。こうも簡単に【ブルーアイズ】が一体倒されるだなんて思ってもみなかった。しかし倒されたからと言って復活させる方法は幾らでもあるけどね。それに俺のデッキにはまだまだ【ブルーアイズ】モンスターがいる。所詮ぬか喜びに過ぎない。

「俺のターン、ドロー。手札の【青眼の白龍】を見せ【青眼の亜白龍】を特殊召喚」

【青眼の亜白龍】
効果モンスター
☆8
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００

「だが【青眼の亜白龍】の攻撃力は３０００。パワーアップ【デーモン】の攻撃力には及ばないぜ」

「確かに攻撃力はそっちの方が上だ。だが攻撃力だけに目がいくようじゃまだまだだな」

「何だと？」

「【青眼の亜白龍】の効果発動！1ターンに1度相手モンスターを一体破壊することが出来る」

【青眼の亜白龍】の口に【バーストストリーム】に似た光が溜まっていき放たれ【デーモン】にへと直撃。その攻撃を食らった【デーモン】は破壊される。

「パワーアップした俺の【デーモン】がこんな簡単に…」

「あのモンスター【ブルーアイズ】と同じ攻撃力だけじゃなくモンスターを破壊する効果まであるのかよ!?」

「あれじゃ、いくらモンスターを出しても残らないわ」

「クッソォ、何とかならねェのかよォー！」
【青眼の亜白龍】も海馬とのデュエルでは効果を使わなかったからな。キースとのデュエルで使用した【サイバー・レーザー・ドラゴン】と同じように自分より強いモンスターも破壊出来る点に於いてはチートだよなぁ。
「だがこの効果を使用したターン、このモンスターは攻撃が出来なくなるデメリットがある。でも今はモンスターがいないから関係ない。ターンエンドだ」

悠也
ＬＰ１７５０
手札４枚（内１枚【青眼の白龍】）
モンスター
【青眼の亜白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

遊戯は「？」を浮かべたような顔をしている。手札に【ブルーアイズ】のカードがあるのに何故召喚しないんだっとでも思っているんだろう。確かにさっきのターン【ブルーアイズ】を出して一気に場を作ることも出来た。
だが相手は原作主人公、今までも思いも寄らない方法で突破口を編み出してきた。下手に強力なモンスターを揃えても全滅させられる可能性が高い。ここはいざと言う時のために温存しておく。
「俺のターン、ドロー！俺はモンスターを守備表示で出し、カードを一枚伏せターンエンドだ」

遊戯
ＬＰ２０００

手札３枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン！」
守備モンスターで俺のモンスターの攻撃を凌ごうと言うのか。
だったらこっちはモンスターを増やすまでだ。
「俺は【青眼の白龍】を召喚」
青眼の白龍
通常モンスター
☆８
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００

「【青眼の白龍】で守備モンスターに攻撃！『滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）』！」
【青眼の白龍】の口に貯められた滅びのブレスが守備モンスターに放たれ吹き飛ばした。攻撃された時カードが表になり正体が判明、【岩石の巨兵】であった。

【岩石の巨兵】
通常モンスター
☆３
血属性／岩石族
ＡＴＫ１３００
ＤＥＦ２０００

「俺はこれでターンエンド。さぁこの二体の【ブルーアイズ】モンスターの攻撃を凌げるかな？」

悠也
ＬＰ１７５０
手札４枚
モンスター
【青眼の白龍】
ＡＴＫ３０００
【青眼の亜白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、確かに【ブルーアイズ】の攻撃力は無敵。だが攻撃力だけが全てじゃないってことを教えてやるぜ。俺は【クリボー】を守備表示で召喚！」
『クリクリー』
遊戯のフィールドに小さく全身茶色い毛むくじゃらで可愛らしいモンスターが現れる。

【クリボー】
効果モンスター
☆１
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００

「そして伏せカードオープン。魔法カード【増殖】を発動！これでクリボーを増殖させる。これでターン終了だ」
魔法カードの発動と同時に【クリボー】が遊戯のフィールドを埋め尽くさんとの勢いで増えていく。これは【王国編】で使った増殖コンボ。【クリボー】を無限に増やし俺のモンスターの攻撃を凌ぐ気だな。

遊戯
ＬＰ２０００
手札３枚
モンスター
【クリボー】（増殖中）
魔法・罠
【増殖】（クリボーとのコンボ中）

「俺のターン、【青眼の白龍】と【青眼の亜白龍】で【クリボー】に攻撃！」
俺が命令を下すと二体の【ブルーアイズ】モンスターは滅びのブレスを放ち大量の【クリボー】を吹き飛ばす。しかしあれだけの爆発が起きたにも関わらず【クリボー】の群れは健在であり、さらに再び増殖し空いた場所を埋め尽くす。
「やっぱりダメか。他にすることもないし、俺はこれでターンエンドだ」

悠也
ＬＰ１７５０
手札５枚
フィールド
【青眼の白龍】
ＡＴＫ３０００
【青眼の亜白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、ドロー！（【ブラックマジシャン】！だがコイツは俺の切札の１枚。今ここで出す訳にはいかない）俺はこれでターンエン

ド」

遊戯
ＬＰ２０００
手札４枚
モンスター
【クリボー】（増殖中）
ＤＥＦ２００
魔法・罠
【増殖】（クリボーとのコンボ中）

モンスターを召喚しない…ほぼ無敵の壁である【クリボー】軍団に守られているなら場を整えるのが主流だと思うが。まぁどちらにしても俺には勝てないのだから問題ないだろう。
「俺のターン、ドロー。ッ!?フフフ、これでその【クリボー】軍団を除去できる」
「何だと!?」
「俺は魔法カード【滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）】を発動」
「あれ?その名前って確か」
「【ブルーアイズ】の攻撃名と同じ名前」
「このカードは自分フィールド【青眼の白龍】がいる時にのみ発動可能!このターン【青眼の白龍】の攻撃を破棄する代わりに相手フィールドのモンスターを全て破壊する」
「何ッ!?」
【クリボー】軍団はモンスターの攻撃には対しては無敵に近い。一体でも残っていればそいつが増殖するのだから、モンスターのバトルで突破するのは不可能に近いだろう。
だが一変に全て破壊されればもう増殖することは出来ない。だからほぼ無敵なのだ。
「やれ、【青眼の白龍】。【滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）】！」
【青眼の白龍】の口から例の滅びのブレスが放たれるが、先程の攻撃

の時よりも攻撃範囲が広く威力も上の様で、遊戯のフィールドを埋め尽くしていた【クリボー】の群生は消え去りガラ空きとなる。
「さらにフィールドにいる【青眼の白龍】と【青眼の亜白龍】を墓地に送り【青眼の双爆裂龍】を融合召喚させる！」
二体の【ブルーアイズ】モンスターが混じり合い、二つの頭を持つ双頭ドラゴンにへと生まれ変わる。

【青眼の双爆裂龍（ブルーアイズ・ツイン・バースト・ドラゴン）】
融合・効果モンスター
☆１０
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００

「コイツの効果は海馬との戦いで分かっているだろ？コイツはモンスターとの戦闘では破壊されず、２回の攻撃が可能。さらにコイツとバトルを行ったモンスターはその終わりにゲームから取り除かれる」
「クッ」
「鉄壁とも言える【増殖】コンボを失った今、【青眼の双爆裂龍】をどうやって攻略するか見せてもらおうとしよう。ターンエンドだ」

悠也
ＬＰ１７５０
手札５枚
モンスター
【青眼の双爆裂龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、ドロー。（【青眼の双爆裂龍】の攻撃力は【青眼の白龍】

と同じ３０００ポイント。しかし下手に攻撃力を下げ攻撃しても、効果でゲームから取り除かれてしまう。片や此方のモンスターの攻撃力を上げても結果は同じ。ここは逆転のカードが来るまで耐えるしかない）【ブラック・マジシャン】を守備表示で召喚！」

紫色のローブに長身の杖を所持したイケメンの最高位魔術師、遊戯の最強の切り札にしてベストパートナー【ブラック・マジシャン】が膝を突いて現れる。

【ブラック・マジシャン】
通常モンスター
☆７
闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ２５００
ＤＥＦ２１００

「さらに魔法カード【マジカル・シルクハット】発動！」
【ブラックマジシャン】の後方に「？」マークが描かれた巨大なシルクハットが現れると、【ブラックマジシャン】に被さり４つに分身しシャッフルされる。
「この四つのシルクハットのどれか一つに【ブラックマジシャン】が隠れている。それを当てることが出来るかな？ターンエンドだ」

遊戯
ＬＰ２０００
手札３枚
モンスター
【ブラック・マジシャン】
ＤＥＦ２１００
魔法・罠
【マジカル・シルクハット】（【ブラック・マジシャン】コンボ中）

「俺のターン、ドロー。いい気になるなよ。【ブラック・マジシャン】をその四つのどれかに隠しても俺の【青眼の双爆裂龍】は二回の攻撃が出来る。つまり確率は二分の一になると言うことだ。【青眼の双爆裂龍】で右から二番目のシルクハットと一番左のシルクハットに攻撃！『ツイン・バースト・ストリーム』！」

俺の指示で双頭の口が開き滅びのブレスが放たれ、指定した二つのシルクハットを吹き飛ばした。どうだ?その場を見守る者達に緊張が走る中、煙が晴れると攻撃を受けたシルクハットは消えたが、残る二つのシルクハットは消えてない。

相手フィールドのモニターを見ると【ブラック・マジシャン】カードは健在であった。

「チッ、外したか。俺は【ガード・オブ・フレムベル】を守備表示で召喚してターンエンドだ」

【ガード・オブ・フレムベル】
通常モンスター
☆1
炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ１００
ＤＥＦ２０００

悠也
ＬＰ１７５０
手札５枚
モンスター
【青眼の双爆裂龍】
ＡＴＫ３０００
【ガード・オブ・フレムベル】
ＤＥＦ２０００
伏せ×１

「俺のターン、ドロー！（ッこのカードは!?）カードを一枚場に出しターンエンド」

遊戯
ＬＰ２０００
手札３枚
モンスター
【ブラック・マジシャン】
ＤＥＦ２１００
魔法・罠
【マジカル・シルクハット】（【ブラック・マジシャン】コンボ中）
伏せ×１

「俺ターン、ドロー。リバースカードオープン、魔法カード【魔法石の採掘】発動。このカードは手札を二枚捨てて、墓地にある魔法カード一枚を手札に戻すことが出来る。手札から【伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）】と【太古の白石（ホワイト・オブ・エンシェント）】を捨て、墓地から【滅びの爆裂疾風弾（バーストストリーム）】を手札に戻す」

【伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）】
効果モンスター
☆１
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００

【太古の白石（ホワイト・オブ・エンシェント）】
効果モンスター
☆１
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ６００

DEF500

「さらに墓地に送られた【伝説の白石(ホワイト・オブ・レジェンド)】の効果でデッキから【青眼の白龍】を手札に加え、そのまま召喚。そして魔法カード【滅びの爆裂疾風弾(バースト・ストリーム)】を発動！【ブラック・マジシャン】シルクハットごと吹き飛べ！」

【青眼の白龍】から攻撃時よりも大きなブレスを溜める。【ブラック・マジシャン】を失えば怖いものなどない。しかし俺は見た、ブレスが放たれた瞬間遊戯の口がニヤけたのを。

「そうはさせないぜ！魔法カードオープン【魔法効果の矢】！」

遊戯のフィールドに一歩の矢が出現する。待てよ、この世界での【魔法効果の矢】の効果は確かッ。

「このカードは自軍に対する魔法効力を相手モンスターに与える。よってその攻撃は君のモンスターに跳ね返る！」

ブレスがシルクハットに当たる直前、矢がブレスにへと突っ込み飲み込まれる。するとそのエネルギーを吸収しながら突き進みそのまま【青眼の白龍】にへと突き刺さる。刺さった部分からエネルギーが解放され【青眼の双爆裂龍】諸共【青眼の白龍】を包み込み大爆発を起こした。

あまりの衝撃に顔を覆い隠す。再びフィールドを見た時には俺のモンスターは全滅していた。

「ヨッシャー!!【ブルーアイズ】を倒したぜ！」

「やったぜ、遊戯！」

「頑張って、遊戯！」

外野人が遊戯への応援を送る。別に羨ましくないわけではないが、一々煩い連中だ。しかし伏せカードが【ミラーフォース】かと思い警戒して魔法カードによって除去しようとしたが、逆に利用されこちらが全滅させられるとは…。流石原作主人公だ一筋縄ではいかない。だがまだ手はある。

「カードを一枚伏せターンを終了。そしてこの瞬間墓地の【太古の白石(ホワイト・オブ・エンシェント)】の効果発動。墓地に送られたターンのエンドフェイ

ズ、デッキから【ブルーアイズ】モンスターを一体特殊召喚する。出よ【白き霊龍】！」

俺のフィールドに【ブルーアイズ】に酷似した全身真っ白なドラゴンが現れる。

【白き霊龍】
効果モンスター
☆８
光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２５００
ＤＥＦ２０００

「このモンスターはルール上【ブルーアイズ】モンスターとして扱われる。そしてこのカードが特殊召喚された時、相手フィールドの魔法・罠カードを一枚選択し、そのカードをゲームから取り除くことが出来る。よって【マジカル・シルクハット】を除外だ！」

【白き霊龍】の身体が光り輝くと残っていた二つのシルクハットが消滅し【ブラック・マジシャン】の姿が露わになる。

「これで【ブラック・マジシャン】を守るものはなくなった。お前のターンだぞ」

悠也
ＬＰ１７５０
手札３枚
モンスター
【白き霊龍】
ＡＴＫ２５００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン。魔法カードでカウンターを掛けたつもりが逆に返さ

れるとはな。だがこれくらいで俺の勢いは止まらないぜ。俺は【カース・オブ・ドラゴン】を召喚！」

遊戯のフィールドに厳つい顔をした黄色いドラゴンが現れる。

【カース・オブ・ドラゴン】
通常モンスター
☆５
闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ１５００

「さらに魔法カード【融合】を発動！手札の【暗黒騎士ガイア】と【カース・オブ・ドラゴン】を融合させ、出よ【竜騎士ガイア】！」

さらにもう一体、仮面を付けた紫色の馬に乗り両手に赤いランスを持ち同じ仮面を付けた騎士が【カース・オブ・ドラゴン】と混ざり合うと、先程の騎士が【カース・オブ・ドラゴン】に跨った状態で現れる。

【暗黒騎士ガイア】
通常モンスター
☆７
地属性／戦士族
ＡＴＫ２３００
ＤＥＦ２１００

【竜騎士ガイア】
融合モンスター
☆７
風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ２６００
ＤＥＦ２１００

「【竜騎士ガイア】で【白き霊龍】を攻撃！『ダブル・ドラゴン・ランス』！」
【竜騎士ガイア】の両手に持っていたランスが【白き霊龍】を貫き粉砕する。

悠也
ＬＰ１７５０→１６５０

「【白き霊龍】撃破！ターンエンドだ！」

遊戯
ＬＰ２０００
手札１枚
モンスター
【ブラック・マジシャン】
ＤＥＦ２１００
【竜騎士ガイア】
ＡＴＫ２６００
魔法・罠
なし

「俺のターン！墓地にある【太古の白石（ホワイト・オブ・エンシェント）】の効果発動。墓地のこのカードをゲームから除外、基取り除くことで、墓地の【青眼の白龍】を回収しそのまま召喚！」
これで何回目になるか、【ブルーアイズ】がその白き身体を靡かせフィールドにへと降臨する。
「【青眼の白龍】で【竜騎士ガイア】を攻撃！【滅びの爆裂疾風弾（バースト・ストリーム）】！」
【青眼の白龍】の滅びのブレスが【竜騎士ガイア】を飲み込み跡形もなく消滅させた。

遊戯
ＬＰ２０００→１６００
「【竜騎士ガイア】撃破だ。ターンエンド」

悠也
ＬＰ１６５０
手札４枚
モンスター
【青眼の白龍】
ＡＴＫ３０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、ドロー。魔法カード【モンスター回収】を発動。自分のフィールドと手札のカード全てをデッキには戻しシャッフル。そしてデッキから新たに５枚引く」
手札一枚だったのが一気に五枚まで増やした。流石原作主人公、土壇場で手札入れ替えに加えて補充とは。
「そしてこのカードを出すぜ。【洗脳―ブレインコントロール】」
【ブレインコントロール】だと!?まさか俺の【青眼の白龍】を操る気か!そう思っていると【青眼の白龍】が飛び立ち遊戯のフィールドにへと移動する。
「これでこのターン【ブルーアイズ】は俺ののモンスターとなる」
「…でも忘れていないか。(この時の)ルールではプレイヤーへと直接攻撃は禁止されている。そして今俺の場にモンスターはいない。そしてこのターンが終われば【ブルーアイズ】は俺の場に戻ってくる。つまり攻撃する相手がいないのなら操っても意味がない、ただの使い損だ!」
「そう慌てるなよ。俺はさらにこのカードを出す【カオス―黒魔術の儀式】!これによって【ブルーアイズ】を儀式の生贄に捧げる」

【ブルーアイズ】の足元に魔法陣が現れると【ブルーアイズ】はその中にへと吸い込まれる。すると中から全身黒が特徴で【ブラック・マジシャン】と色違いの杖を持った魔術師が現れる。
「【マジシャン・オブ・ブラックカオス】を儀式召喚！」

【マジシャン・オブ・ブラックカオス】
儀式モンスター
☆８
闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ２８００
ＤＥＦ２６００

まさか俺のモンスターを儀式の生贄に使われるとは。盲点だった。
「そしてカードを一枚伏せターンエンド」

遊戯
ＬＰ１６００
手札１枚
モンスター
【マジシャン・オブ・ブラックカオス】
ＡＴＫ２８００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン、ドロー。魔法カード【死者転生】を発動。手札一枚を墓地に送り、墓地の【青眼の白龍】を回収して召喚！【青眼の白龍】で【ブラックカオス】に攻撃！」
「そうはいかないぜ！リバースカードオープン、【六芒星の呪縛】！相手モンスターが攻撃した時そのモンスターの動きを封じ、さらに攻撃力を７００ポイントダウンさせる」
【ブルーアイズ】の攻撃が放たれようとした時、遊戯の魔法・罠ゾー

ンの一箇所から星の形をした模様の陣が出現する。陣はそのまま【ブルーアイズ】の身体を拘束し攻撃を中断させた。

【青眼の白龍】
ＡＴＫ３０００→２３００

「クソ、（一ターン前にこのカードを伏せておけばよかった）カードを一枚セットしてターンエンド」

悠也
ＬＰ１６５０
手札２枚
モンスター
【青眼の白龍】――【六芒星の呪縛】発動中
ＡＴＫ２３００
魔法・罠
伏せ×２

「俺のターン。魔法カード【秘術の書】を使い【マジシャン・オブ・ブラックカオス】の攻撃力、守備力を３００ポイントをアップ！」

【マジシャン・オブ・ブラックカオス】
ＡＴＫ２８００→３１００
ＤＥＦ２６００→２９００

「【マジシャン・オブ・ブラックカオス】で【青眼の白龍】を攻撃！『滅びの呪文――デス・アルテマ』！」
【マジシャン・オブ・ブラックカオス】の杖の先端から【ブラック・マジシャン】を上回る黒い魔力が放たれ【青眼の白龍】を吹き飛ばした。
「罠カード発動【ガード・ブロック】！モンスターとの戦闘でのダ

メージを一度だけ０にしカード一枚ドローする」
「だが【ブルーアイズ】は倒させてもらった。最後にカードを一枚伏せターンエンド」

遊戯
ＬＰ１６００
手札０枚
モンスター
【マジシャン・オブ・ブラックカオス】――【秘術の書】装備中
ＡＴＫ３１００
魔法・罠
【秘術の書】――【マジシャン・オブ・ブラックカオス】装備中
伏せ×１

「強いなぁ。流石は全国大会優勝者だ」
「そりゃあどうも。ところでアンタは何でこの大会に出場したんだ？バンデット・キース（あの噛ませ）と同じで賞金が目当てか？」
「違う！俺はそんな理由で大会に出たわけじゃない！」
「じゃあ何だ？」
「…大会が始まる前、俺はペガサスとデュエルした。だが負けてしまい大切な爺ちゃんの魂を人質に取られてしまった。だから俺はこの大会で勝ち進みペガサスを倒し爺ちゃんを、そして海馬とモクバも助ける、絶対に！」
遊戯が負けたと言っても、ペガサスとデュエルした時はビデオテープ越しで、時間切れによっての敗北だった。もし普通にデュエルしていたら勝っていたの遊戯だろう。ペガサス自身も「最後の攻撃が決まっていたら負けていた」っと言っていたし。
「成る程、大会に出た理由は分かった。でもあそこに居る連中は何だ？城之内は分かるが他の連中は選手じゃない部外者だ。なのに何故この会場にいるんだ？」
「彼等は俺の大切な仲間だ。例え共に戦えなくても、俺達の心は常

に繋がっている、共に戦ってくれる信頼し合えるいるだ！」
「ハッ、笑わせるなよ！友情、信頼？そんなもの全部まやかしだ！お前達のその信頼もそうなんだよ！」
「何だと!?テメェ、俺達の友情が嘘だって言うのか！」
「そうだ！俺達の友情をバカにするな！」
「外野は引っ込んでろ！」
会話の途中に割り込んできた本田と城之内にイラつき、左手から念動力を発動させ二人を壁際にまで吹き飛ばした。
「…昔、ある一人の男が信頼していた仲間に裏切られたった一人無人島に置き去りされた。そして知った、人に友情、愛、そんなものはないってことを！そして俺自身も大勢の人間に虐められてきた。だから友情なんて全て幻！信じていてもいつか裏切られるのがオチ、信じるなんて愚かな行為なんだよぉ!!」
「…確かに君の言うことも分かる。人間にはそう酷いことをする奴もいる。だが全ての人がそんな奴じゃない。君に何があったのは知らないが、どんなに辛い時も苦しい時も手を差し出してくれる、君にもそう言う人がいたはずだ！」
「煩い！いいだろう、なら教えてやる。お前達の友情が絶対的力の前では、如何に脆くて無力なものかをな!!俺のターン、魔法カード【龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）】を発動。このカードは自分のフィールド、墓地から融合素材モンスターをゲームから除外、取り除きドラゴン族融合モンスターを特殊召喚させる事ができる。俺は墓地に眠る三体の【青眼の白龍】をゲームから取り除き【青眼の究極龍】を特殊召喚する！」
フィールド上に三体の【青眼の白龍】が出現すると混じり合う。胴体部分は変わらないが、二回りほど大きくなり首が三つになった三頭龍が姿を現す。

【青眼の究極龍】
融合モンスター
☆１２
光属性／ドラゴン族

ＡＴＫ４５００
ＤＥＦ３８００

「【青眼の究極龍】で【マジシャン・オブ・ブラックカオス】を攻撃！『アルティメット・バースト』！」

三つのそれぞれ頭からブレスが放たれる。

「罠カード発動！【聖なるバリア―ミラーフォース】！相手モンスターの攻撃をそのまま跳ね返す！」

【マジシャン・オブ・ブラックカオス】を守るように、遊戯のフィールドの前に透明なバリアが展開される。この攻撃を跳ね返されればマズイ。だがまだ詰めが甘い。

「ならこちらも罠カード発動【トラップ・スタン】！このターン、このカード以外の罠カードの効果を無効にする。よって【ミラーフォース】の効果は無効化される！」

「何っ!?」

展開されたバリアは塵となり消滅、【マジシャン・オブ・ブラックカオス】はそのままブレスに飲み込みれ破壊された。

遊戯
ＬＰ１６００→２００

これで遊戯のＬＰは風前の灯火。俺の勝利は確定したな。

「速攻魔法【異次元からの埋葬】発動。ゲームから取り除かれているモンスターを三枚までその持ち主の墓地に戻すことができる。よってさっきゲームから取り除いた三枚の【青眼の白龍】を墓地に戻してターンエンド」

悠也
ＬＰ１６５０
手札２枚
モンスター

【青眼の究極龍】
ＡＴＫ４５００
魔法・罠
なし

「モンスターも手札も０。諦めてサレンダーしたらどうかな？」
「…俺は諦めない、諦めるわけにはいかない！俺は自分のデッキを信じる。このカードに全てを賭ける！カードドロー!!」
遊戯はラストとなるドローしたカードを確認すると、ニヤリと口元を吊り上げ笑った。何だ？
「来たぜ、竜破壊の剣士【バスター・ブレイダー】召喚！」
彼のフィールドに全身紫色の装甲を纏い巨大な短剣を背負った剣士が現れる。

【バスター・ブレイダー】
効果モンスター
☆７
地属性／戦士族
ＡＴＫ２６００
ＤＥＦ２３００

バ、【バスター・ブレイダー】だと!?王国編の時、遊戯はまだあのカードをデッキにいれてなかったはず。いや元々入れていたけど、使われなかっただけなのか？
どちらにしてもここであのカードが出てくるのは予想外過ぎる。
「このカードは相手のフィールド、墓地に存在するドラゴン族モンスター一体につき、攻撃力が５００ポイントアップするぜ」
今俺の墓地にはさっき墓地に戻した三体の【青眼の白龍】を初め、【アサルトワイバーン】、【青眼の亜白種】、【伝説の白石】、【青眼の双爆裂龍】、【ガード・オブ・フレムベル】、【白き霊龍】、【死者転生】の時

に墓地に送った【アレキサンドライトドラゴン】、そしてフィールドの【青眼の究極龍】合わせて11体のドラゴンがいる。と言うことは…

【バスター・ブレイダー】
ＡＴＫ２６００→８１００

攻撃力８１００!?【青眼の究極龍】を上回っただと!
俺のＬＰ１６５０、【青眼の究極龍】と今の【バスター・ブレイダー】の攻撃力差は３６００。しかも俺の場に伏せカードはない。
…どう足掻いても無理だ。まさか再利用したことが仇となるとは。詰めが甘かったのは遊戯ではなく俺の方のだったようだ。
「行くぜ!・【バスター・ブレイダー】で【青眼の究極龍】を攻撃!・『竜破壊の剣―ドラゴンバスターブレード』!!」
【バスター・ブレイダー】は間合いを一気に詰め飛び上がり、剣を勢いよく振り下ろし【青眼の究極龍】の身体を斬り裂いた。斬り裂かれた【青眼の究極龍】は力なくその場に崩れ落ちる。

悠也ＬＰ１６５０→０

「勝者、武藤遊戯」
「ヨッシャーー!・遊戯が勝ったぜ!」
審判から遊戯の勝利宣言が告発され、彼の仲間の観戦者達は大いに喜んでいた。俺は負けたことに対する凄く悔しい感情が芽生えた。

――そう言えば負けたのって久しぶりだな。この世界に来て今まで負けなしだったからこんな気持ちになるのも久しぶりだった。だが負けたことに変わりはない――

俺はデュエルリングに背を向け歩き出す。敗者は大人しく消えるってね。このまま立ち去ろうとしたら…
「悠也君」

いきなり遊戯に声を掛けられ足を止める。声の高さからして表の方だな。
「君の過去に何があったのは分からない。でも君は前に杏子を助けてくれた、そんな君が悪い人だなんて僕は思わない。もし君が助けを求めることがあったら僕を頼ってきて。その時は必ず力を貸すよ」
振り向かないまま遊戯の話を聞いた。なんともお人好しと思える台詞だ。だがそれがアイツの周りに人が集まるのかもな。
「…絆なんて、いつか壊れるのがオチだ。俺はそれの考えを改める気はない」
「…」
「だが仲間との絆が力になるっと言うのも、あながちバカにしたものでもないのかもしれないな」
俺はそう言い残すとその場を後にした。現に最後の勝敗は絆が生んだ奇跡なのかもしれないしな。
さてこれで遊戯はペガサスと戦える権利が与えられた。このまま行けば遊戯はペガサスに勝利するが、その後ペガサスは下手をすれば命を落とすかもしれない事態になるな。そうなっては色々マズイ。だが今は疲れたから英気を養うとするか。
俺は与えられた部屋に戻りベットに横たわり眠りに付いた。

１０話

「ＺＺＺ…ッ、この感覚は!?」
決勝戦を終え部屋で英気を養っていた俺は、突如強い闇の気配を感じ目を覚ます。
「強い闇の波動…どうやら遊戯とペガサスが最終決戦に入るようだな」
トゥーンモンスターが全滅した後、ペガサスは闇のゲームを開始し、遊戯を闇のドームにへと閉じ込め外との接触を遮断した。だからこの闇の気配は千年アイテム所持者定番の「闇のゲーム」に違いない。
「起きたばかりだが、行くか」
ベットから起き上がり闇のゲームが行われているであろうデュエルリングにへと向かう。　しかし闇のゲームの波動が離れた場所にいる俺にまで伝わってくるとは。やはり多くの悪者達の力を持っていても千年アイテムの力は侮ることが出来ないな。
そんなことを考えているとデュエルリングがある部屋の観戦部分に到着すると、観客台のところにバクラが横たわって寝ていた。俺は気付かれないように隠れる。今闇バクラに気付かれでもしたら厄介なことになるからな。
物陰からリングの方へと目を向けると、リング全体が黒い靄に覆われており、その右側の方には遊戯のお仲間である３人が手を携えている姿が目を入る。
闇のゲームが始まってどれだけ時間が経ったか分からないが、あの３人が手を携えていると言うことは、そろそろ決着が付く頃か。
すると突然靄に雷が走ると、次第に靄は晴れていきリングにいる遊戯の姿が現れる。３人が遊戯が勝ったことに喜び祝言を挙げている内に、ペガサスはリングから離れ何処かにへと逃げる。俺も気付かれないようにその跡をつけていく。
小さな塔へと入り込むの確認し、音を立てないように足元に霊圧の足場を作ってゆっくり登っていく。暫く歩くと光が差し込み出す。ゴールは近いなっと思っているとペガサスの声が聞こえる。

「シンディア、私は間違っていたのでショーカ？」
「シンディア？その肖像画の女性のことか」
机の上には【魂の牢獄】と書かれたカードが３枚並べられている。あれは確か海馬の魂を封じ込めたカードだったな、でも表紙の部分が白紙なっている。と言うことは海馬含め３人の魂は解放されたと言うことか。
更に彼の後ろの壁には女性の肖像画が飾られていた。
「悠也ボーイ!?何故ここに！」
「デュエルが終わった後、お前が何処かに行くのが見えたんでな。気になってつけてきたんだよ。まぁ色々聞きたいだろうが後にしろ。ちょっとタチの悪いお客さんが来ているからよ」
後方に視線を向けると何処から来たのか、バクラ基闇バクラが立っていた。
「フン、俺の気配に気付くとは。そこを退け。素直に言うことを聞けば見逃してやってもいいぞ」
「…嫌だと言ったら？」
「なら仕方ねェ。少し痛い目にあってもらうじゃねェか」
千年リングから邪悪なるオーラが発せられ襲い掛かってくるが、俺は片腕を前に突き出しそのオーラを押し返し吹き飛ばし壁に叩きつけられる。
「バ、バカな！千年アイテムの闇の力を跳ね除けただと!?」
「フフフ、確かに千年アイテムの力はどれもこれも強力だ。だがたった一つの力が無数の力に勝てるわけないだろう」
それから少しして力の波動を鎮める。解放されたバクラは床に手を置き、顔を伏せながら息を整えていた。
「ミレニアムアイが欲しいならくれてやる。ちょっと待ってろ」
俺はペガサスの前にまで移動し、手をミレニアムアイにへと翳す。
「悠也ボーイ、一体何を？」
「少し大人しくしていろ」
俺は念力を使い意識をミレニアムアイにへと集中させる。
すると次第にミレニアムアイはペガサスの目からゆっくりと飛び

出し俺の手に収まり、それをバクラに投げる。バクラは座りながら右手でキャッチした。
「これでお前のようは済んだろ？早いとこミレニアム（そ）アイ（れ）を持って帰んな。それとももっと痛い目に合うのがご希望か？」
立ち上がったバクラは、完全に見下されているのが気に入らないようで鋭い目付きで俺を睨む。しかし力の差はわかっているようでただ睨み付けているだった。
「チッ、今は引いてやる。だが貴様に味合わされたこの屈辱、必ず晴らしてやる。覚悟しておけ」
それだけ吐き捨てるとバクラは部屋から出て行った。数秒経った頃に気配を探ってみる。
もしかしたら部屋から出た時に不意打ちをしてくる可能性も捨てきれないからな。…どうやらこの近くにはいないみたい、本当に帰ったようだな。
「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ、悠也ボーイ。助かりマシタ」
「礼なんていい。今のはここで世話になった借りだ」
この城に来てからペガサスは可能な範囲で俺の要望に応えてくれた。その恩を返さないまま死なれては流石に目覚めが悪くなる。
「それにさっきのお前の会話聞かせてもらった。後ろの肖像画の女性、シンディアって言ったかお前とはどんな関係だ？」
「それは…」
「まぁ、大方予想は付く。お前が好意を持っていた女性だろう。そしてさっきの会話から察すると…もうこの世にはいない人物じゃないか？」
「ッ!?」
嘘です、会話は聞いてません。全部アニメ（歴史）を観て知りました。こうでも言っておかないと「何故知ってんだ？」ってことになって疑われるからな。
「そうだ。何だったら次いでにお前の望み叶えてやる」
俺は右手を翳し力を入れる。すると光の粒子が現れ掌に集まっていく。更に力を込めると粒子は形を取っていき一枚のカードとなっ

た。イラストには先程の肖像画の女性が描かれていた。
「シンディアのカード!?悠也ボーイ、このカードは?」
「ハァ、ハァ…その女の魂を集めてカードにへと形を取った。言うならばお前が使っていた【魂の牢獄】と似たようなものだ。そのカードをデュエルにセットすれば人の姿になれるし会話と出来る。だがホログラムだから触れはしないがな」
「本当デスカ!?」
「嘘だと思うなら後で試してみな」
本来この技は結構疲れるからあまり使いたくないんだが、ここで借りを作っておくのも悪くないだろう。そうすればこちらの要求に素直に応えてくれそうだし。
「…悠也ボーイ、何故私にそこまで」
「タダの気紛れだよ」
俺は正義の味方や優しい奴じゃない。だから自分より利益になること、面白くなるだろうと思うこと以外はしない。後はタダの気紛れだな。
「ペガサス!」
いきなり後ろから声が聞こえたのでビックリして身体がビクッてしてしまった。振り返ると遊戯御一行様がいた。そう言えばここを探し当てるんだった、すっかり忘れてた。
「漸く見つけた。ペガサス、早く爺ちゃんや海馬君達の魂を解放して!」
「それなら心配いりませんよ。もう既に3人の魂は解放済みデース」
「ッ本当なの!?」
「ペガサスの言ってることは本当だ。その証拠がこれだ」
俺は机の上に置かれていた絵の部分が白紙になっているカードを見せた。
「このカードは【魂の牢獄】で3人の魂はこのカードに封印されていた。それが白紙ってことは分かるよな?」
「そっか…なら良かった。でも神山君、どうして君がペガサスと一

緒に?」
「それは何れ分かるかもな。そんなことより早くアイツ等の無事を確認して来たらどうだ?」
「おぉ、そうだな。行こうぜ、皆んな」
子供のようにはしゃいでいる城之内が階段を降りて行く。それを追いかけるように本田と杏子、遊戯も降りて行く。
「…じゃあ俺達も行くとするか」
前にキースを追い出す時に使用したゲートを出してそのまま中にへと入る。ペガサスも突然現れたゲートに驚きつつも、俺に釣られてゲートを潜る。出た先はデュエルリングのある部屋だった。不思議な現象に戸惑っているペガサス、だが今はそんなことに気を取られている場合ではない。
「そのカードをここにセットしてみろ」
ペガサスは戸惑いながらも俺の言われた通り、デュエルシステムにさっきのシンディアのカードを置いた。するとカードが光出すと、ペガサスの前にシンディアが現れた。
「…シンディア」
『…ペガサス』
もう二度と会うことはなかった二人は、数十年ぶりに運命の再会を果たした瞬間であった。
「積もる話もあるだろうから、俺は用意されていた部屋で待ってるよ」
それだけ言って俺は部屋の外へと出る。流石にあの流れは二人っきりにさせるべきだ。それにくらいの空気は読まないとな。
それから数分くらいだった頃、ペガサスがサングラスを掛けた黒服の男を連れて入ってきた。
「悠也ボーイ、色々ゴタゴタしてしまいましたが、改めてお礼を言います。これはその感謝の気持ちデース」
ペガサスの後ろにいた黒服の男が手に持っているアタッシュケースを差し出してきた。流れで受け取るとやけに重みがあった。何だこれ?開けてみると中には大量の札束が入っていた。

「おいおい、たかがあれだけのことでこんな大金は割りに合わないんじゃないか？」
「悠也ボーイ、貴方は私の一番叶えたかった願いを叶えてくれました。私からすれば、これでもまだまだ感謝したりないくらいデース」
これまでの人生、最愛の人に会うためにしてきたからな。その喜びに比べれば安いものってか。
まぁここまでされたら受け取らない方が失礼だし、金は多いことに困ることはないからいいか。

その後俺はペガサスが用意してくれた船で島を出港し、何とかその日の夜の内に童実野町に着いた。帰りに近くのコンビニで弁当を買って帰り、食べた後風呂に入ってベットに横になって、これからのことを考えていた。
「これで王国での戦いは終わりだな。次はバトルシティ、つまり神のカード争奪戦が始まる」
そしてにここから俺の知らないカードが沢山出てくる。前もって対策はしているが、改めて確認した方がいいかもしれないな。
ファァ～。でもまぁ、今は取り敢えず休むか。ここ数日真面に休めていなかったから眠気が襲ってきた。考えるのは起きてからにしよう。
そして部屋の電気を消し、ベットに横になって改めて思う。やっぱり自分のベットが一番だなっと。次第に眠気がピークに達して自然と瞼が閉じて眠りについた。

バトルシティ編
11話

ファァ～、よく寝た。久しぶりぐっすり眠た気がするな。ベットから降り、カーテンを開けて朝日を差し込み時計を見るとビックリ!!あの夜から一週間近く日付が進んでいた。

俺はあれから一週間近く寝ていたのかよ!?確かに昔っから朝起きるのは苦手だったけど、ここまで寝続けるなんてことはなかったぞ！なんか軽い冬眠していた気分…。

「まぁ、考えていても仕方ない。取り敢えず顔洗って食事等済ませるか」

一旦部屋を出て顔を洗い、冷蔵庫から買っておいたパンを食べながらテレビを観る。すると気になる話題が出てきた。

『昨晩海馬コーポレーションの社長、海馬瀬人がバルトシティの開催を宣言しました』

エッ!?海馬がバトルシティ開催宣言をした!?と言うことは一週間後、バトルシティが始まるってことか。だとすればのんびりしている場合じゃない、デュエルディスクを貰いに行かなければ！食べていたパンを急いで食べ終え、服も寝巻きから私服に着替えて家を出る。

確かバトルシティ参加条件は「デュエルディスクを所持すること」そして『レベル８』以上の実力を持つデュエリスト」の二つだったな。そしてデュエルディスクはカード専門店で売っているって言っていたな。だったらあそこしかないな。一店のカードショップに着き扉を開ける。

「おじさん、こんにちは。ここはデュエルディスク置いてありますか？」

「ん？おぉ、神山君か。その口振りからすると、君もバトルシティに参加するのかい？」

「まぁね」

ここは俺がこの世界に来て行きつけのカードショップだ。何度も来て常連になっているから店長の顔は覚えたし、向こうも俺のことを知っているはず。ここなら心配ないだろう。

「勿論デュエルディスクは置いてあるよ。でもその前に、君のデュエリストデータを調べさせてくれ。エェ～と、神山悠也君はと…あった、あった。君のレベルは最高レベルの8つ星、文句なしおめでとう」

店長から祝いの言葉を送られデュエルディスクが入った箱が渡される。

「しかし最高レベルだなんて凄いね。流石デュエリスト王国(キングダム)『準優勝者』のことはあるね」

俺のレベルと成績を店長は褒め称えてくる。どうやら俺が寝ていた間に、王国でのことは世間に知れ渡っているらしい。優勝した遊戯は勿論、準優勝した俺も今や有名人らしい。まぁ何はともあれ、無事デュエルディスクを手に入れることが出来家に帰ることにした。

あっ。そう言えば俺のレアカードって何になってるんだ？海馬が知っているのだとやっぱり【青眼の白龍】かな？それとも【青眼の双爆裂龍】かな？あの時店長に俺のデータ見せてもらえばよかった。ま、いいか。デュエリスト同士では互いのデータは見れないし、当日までのお楽しみということにしておくか。

そんなことを考えていると家に着き、帰ってきて早速箱を開けデュエルディスクを取り出す。…意外に軽いな。そこそこ大きさがあるから重たいと思っていたけど。とそんなことより早くデュエルディスク(これ)を使いこなせるようにするのが先だ。

その後説明書を読み何とか1日で使い方を覚え、デッキ調整をしながらテストを行い2日目でマスターした。物覚えの良さも偉大なるF様のお陰かな。

残った時間でデッキ調整を行い、そんなこんなで時が流れ一週間後、つまりバトルシティ開催当日が来た。

左腕にデュエルディスクを付けた大勢のデュエリスト達がゾロゾロと歩いている。ただこの町の人達全員が知っているわけじゃないみたいで、一般人達は「何の集団だ？」と不思議そうに見ている。

デュエルディスクに付いていたこのプレートの場所からスタートとのこと。そして俺のスタート地点は、この広場の時計塔の前から。如何にも目立ち易い場所からスタートなんて…。でも相手を探しに行く手間が省けそうでいいかも。

『デュリスト諸君！バトルシティへようこそ』

そんなことを考えていると、いきなり何処からともなく海馬の声が周りに響き渡る。周りの連中は何処にいるのかとキョロキョロと辺りを見渡す。

すると足元に大きな影が現れる。見上げると上空に飛行船がおり、その下に付いている大きなモニターに海馬の姿が映し出されていた。

『今から大会ルールを説明する。今日この街に集まった参加は、海馬コーポレーションが認定したレベル5以上のデュエリスト達だ。諸君らの手にあるデュエルディスク、それがその証だ』

『大会の舞台はこの童実野町全域。街の何処であろうとデュエリストが対峙した時、そこはデュエルの舞台となるのだ。デュエリストは各自持参したデッキを使い、負けた者は勝者にレアカードを一枚差し出さなくてならない。このバトルシティでは勝ち続けた者がよりデッキを強化していくことが出来るのだ！』

アンティルール。勝負で勝った者が相手のデッキから最も価値のあるレアカードを1枚奪うことが出来る。勝者は得だが、敗北者は大切なカードを失うと言うかなり悪質なルールだと思う。後に公式で禁止されるのがよく分かる。

『そのバトルロイヤル方式を勝ち残った8名のみが、決勝に進むことが出来る。さて決勝戦の場所だが、それはこの街の何処かに隠されている。フフ、俺も諸君らと同じ条件でこの大会に臨むつもりだ。よって決勝戦の場所は俺さえ知らない』

海馬も知らないと言うことに参加者達は不満気な声を上げる。確かに開催者本人が知らないのはどうかと思うが、それはアイツの言う『デュエリストとしての誇り（プライド）』が許さなかったのだろう。だから俺達と同じ条件で挑むと言うことで知らないってことか。

『スタート地点を示した透明プレートを見るがいい。そのプレートはパズルカード、カードを重ね合わせるとドミノ町の地図が完成するようになっている。このパズルカードには特別なプリズム加工がしてあり、６枚重ねることによって地図全体が出現し、プレートの一点に光が灯る。その場所が決勝の舞台だ！そしてデュエルはもう一つ、パズルカードを賭けて勝負する。未知なる決勝の場所には６枚のパズルカードを手にした者のみが辿り着くことが出来るのだ！』

つまりレアカードとパズルカードを賭けたサバイバルゲームって言ったところかな。

『さぁ、バトルシティの始まりだ。デュエリスト共よ、この町に潜む敵を探しに行くがいい！』

海馬の宣言と共にデュエリスト達が騒ぎだす。本当に元気な人達。

さて俺の最初の相手は誰にしようかなぁと考えていると、ある男が目に入った。

喫茶店でコーヒーを飲みながらパソコンを操作している白い髪で黒いマントを羽織っている見るからに怪しさ全開の男。

あいつって確か【エクゾディア】を使って城之内の【真紅眼の黒竜】を奪ったグールズのレアハンターだったな。

でもあいつはボスのマリク曰く「グールズの中で最弱だ」って言ったし、腕試しにあいつから行っておくか。

「ちょっとゴメンなさいよ」

「ん？なんだ貴様…」

「俺とデュエルしろ」

「ふん。貴様如きを相手にしている暇は私にはないのだ」

あれあれ？今そのパソコンで参加者リスト見てたんだよね。そこにはデュリストレベルとレアカードが提示されている筈なんだけど、何で俺のことを知らないの？それとも俺のところにはまだ目を通りしていないだけなのか。まぁそんなことはどうでもいい。

「おや、いいのか？俺に勝てば、このレアカードをあげるんだけど」

俺が見せたのは【ラビードラゴン】と言う攻撃力『２９５０』のモンスター。僅かに【青眼の白龍】には及ばないが、それでもそれに次

ぐ攻撃力。この時代は攻撃力が全てと思っている奴が多数いるからこのカードもかなりのレアカードになるはず。
そして案の定レアハンターは【ラビードドラゴン】の攻撃力を見るやいやな目つきが変わった。
「さらにはこのカードも賭けようかなぁ」
俺はさらに【エメラルドドラゴン】を見せる。このカードも今はかなりのレアカードみたいだからな、見逃す筈もない。そして案の定、レアハンターはニヤリと笑う。
「いいだろう。貴様とのデュエル受けてたとう!」
やっぱり単純な奴だ。あいつのデッキは手札に【エクゾディア】を揃えるために、守備力が高いモンスターが多い「守り」重視のデッキ。だったら今回はこのデッキにしよう。
「フフフ、いいだろう。貴様とのデュエル受けてやる。私に勝負を挑んだことを後悔させてやろう。そして貴様のレアカードを頂く」
「後悔するのはどっちかな?」
デュエルディスクから小型の機械が飛び出し、左右にへと展開し準備完了。俺のバトルシティでの最初の戦いが始まった。

『デュエル!』

悠也
ＬＰ４０００
レアハンター
ＬＰ４０００

「先行は俺がもらう、ドロー!俺は【暗黒界の騎士ズール】を攻撃表示で召喚!」
フィールド上に一本の大剣を持ち、マントを靡かせ、胸に青いクリスタルが付いている二本角の悪魔が現れる。
【暗黒界の騎士ズール】

通常モンスター
☆４
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１５００

「さらにリバースカードを３枚セットしてターンエンド」

悠也
ＬＰ４０００
手札２枚
モンスター
【暗黒界の騎士ズール】
ＡＴＫ１８００
魔法・罠
伏せ×３
「あっ！テメェ！」
ターンを終了させた直後に突然大きな声が聴こてたので振り向くと、城之内がおり何やら睨んでいた。
「何でお前がソイツとデュエルしてるんだよ！」
「何でって、俺がコイツにデュエルを申し込んだからに決まってるだろ。何か問題でもあるか？」
「大ありだ!!そいつは俺が倒すんだ！変われ!!」
「一度始めたからには中断させることは出来ない。俺達のデュエルが終わるまでそこで大人しくしていろ、凡骨君」
「何だとテメェ!!「城之内君、どうしたの？」っあ、遊戯」
城之内と歪みあってあるところに遊戯が来て、城之内は自分とレアハンターに何があったのか事情を話しだす。
遊戯が来てあの城之内（凡骨君）を大人しくさせてくれたお陰で、デュエルに集中出来そうだ。
「少々邪魔が入ってしまったが、俺のターンは終了した。そっちの

ターンからだ」
「では私のターン、ドロー。フフフ、魔法カード【天使の施し】を発動！デッキからカードを3枚引き、2枚捨てる。魔法カード【強欲な壺】を発動！デッキから更に2枚ドローする。そしてモンスターを守備表示。私はこれでターンエンドだ」

レアハンター
ＬＰ４０００
手札６枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠
なし

やはり攻撃はしてこないか。だが1ターン目でここまで手札を増やすとは。【天使の施し】に加え【強欲な壺】まで使ったから、既に【エクゾディア】パーツが少なくとも3枚はあるはず。早いところ片をつけないとこっちが敗北してしまう。
「俺のターン、ドロー！俺は【暗黒界の騎士ズール】を生贄に【暗黒界の軍神シルバ】を召喚」
【ズール】の身体が黒い光に包まれると、黒くて両腕に鎌みたいな武器を付けているモンスター、【暗黒界の軍神シルバ】にへと変貌した。

【暗黒界の軍神シルバ】
効果モンスター
☆５
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ２３００
ＤＥＦ１４００

「【シルバ】で、守備モンスターに攻撃！」

【シルバ】の両腕の刃が奴のセットモンスターを真っ二つに切り裂かれ、姿が顕となる。セットモンスターは【岩石の巨兵】だった。こちらの方が勝っていたのでそのまま破壊される。

【岩石の巨兵】
通常モンスター
☆3
地属性／岩石族
ＡＴＫ１３００
ＤＥＦ２０００

「さらにカードを1枚伏せターン終了だ」

悠也
ＬＰ４０００
手札１枚
モンスター
【暗黒界の軍師シルバ】
ＡＴＫ２３００
魔法・罠
伏せ×４

「フフフフ、ハーハハハハハ！ターン終了を宣言したな！貴様はこのターンで終わりだ！」
レアハンターは俺のターンエンド宣言と共に高笑いをし、俺の敗北を宣言する。
もう既に【エクゾディア】が４枚あるのか!?そしてこのターン引くのが最後のパーツカードってことかよ!?俺は初戦で敗北するのか……な～んてね。
「私のターン、ドｒ「この瞬間リバースカード発動！」な、何!?」
「罠カード【魔のデッキ破壊ウィルス】！」

「ウ、ウィルスカードだと！」
「そうだ。このカードは俺のフィールドの攻撃力２０００以上の闇属性モンスターを1体を生贄にして発動。相手の手札及びフィールド上の攻撃力１５００以下のモンスター全てを破壊する。俺は【シルバ】を生贄に捧げる」
その発言と同時に【シルバ】の身体が黄色く変色していき粒子となり、レアハンターの周りを囲む。
俺が【暗黒界デッキ】を選んだ最大の理由はこれだ！相手のデッキは【エクゾディア】のパーツカードをはじめ、攻撃力が１５００以下のモンスターばかり。魔のデッキ破壊ウィルスが入っているこのデッキにしたのだ。最初は闇属性が中心のデッキでもいいと思ったのだが、攻撃力２０００以上の闇属性モンスターを手っ取り早く展開するならこのデッキが一番。
するとレアハンターの手札の６枚の内、５枚から黄色い煙が上がっているのを確認出来た。
「こ、これは!?」
「ウィルスに感染したんだ。じゃあ効果でお前の手札を確認させてもらおうか」
レアハンターは顔を歪めて手札を公開した。６枚の手札には【封印されし者の左足】、【封印されし者の右腕】、【封印されし者の右足】、【封印されし者の左腕】の四枚のパーツカードがあり、後２枚は【ホーリーエルフ】と【光の護封剣】だった。
「フン、ウィルス効果でその４枚のパーツカードと【ホーリーエルフ】を捨ててもらおうか」
レアハンターは顔を歪め５枚を墓地にへと送る。
「一応言っておくがウィルス効果はこれで終わりじゃない。今から３ターンの間、お前がドローした時そのカードを確認し、それが攻撃力１５００以下のモンスターだった場合、そのカードは墓地に送られるからな」
奴の切り札である【エクゾディア】は手札に５枚揃って勝利するカード。しかしパーツカードは全て攻撃力１５００以下。つまり三

ターンの間は墓地から回収しない限り揃うことはない。まぁ三ターン凌げば何とかなるだろうが、奴のデッキには【エクゾディア】含めて攻撃１５００以下のモンスターだけしかいないはずだから無理だろうけど。

「攻撃力１５００以下のモンスターを破壊する。海馬の野郎が持ってるウィルスカードとは逆の効果か…」

「さらに3ターンの間、奴は攻撃力１５００以下のモンスターをドローしても墓地に送られる。【エクゾディア】デッキからすれば正に相性最悪のカードだ」

遊戯と城之内は俺の使ったウィルスカードの効果にそれぞれ感想を述べる。王国では遊戯も海馬のウィルスコンボで苦戦させられているし、城之内もそれを見ていたからな。

ウィルスカードは強力なカードであることが改めて実感させられたのだろう。

「如何したの？お前のターンだ。早くカードをドローしてよ」

「わ、私のターン、ドローカード…」

「ウィルス効果で、今ドローしたカードを見せてもらうぞ」

「クッ」

ドローしたカードは【封印されしエクゾディア】だった。

「そのカードは攻撃力１０００。よって墓地に送ってもらう」

レアハンターは今ドローしたカードを捨てた。これで手札にあるのは【光の護封剣】だけとなった。

「…私は魔法カード【光の護封剣】を発動！これで3ターンの間貴様の攻撃を封じる。ターンエンドだ」

「おっとお前のターン終了の前に、こちらの伏せカードを発動させる。速攻魔法【暗黒界に続く結界通路】！墓地から【暗黒界】と名のつくモンスター1体を特殊召喚させる。よって【シルバ】復活！」

デュエルディスクの墓地の部分から黒い靄が飛び出すと、中から【シルバ】が飛び出しフィールドに舞い戻ってきた。

レアハンター

ＬＰ４０００
手札０枚
モンスター
なし
魔法・罠
【光の護封剣】

【光の護封剣】のお陰で少なくとも３ターンは攻撃をしのげると思っているだろうが甘いな。
「俺のターン、ドロー。…如何やらこのターンで蹴りが付きそうだ」
「な、何を言う!貴様は【光の護封剣】で３ターンの間モンスターでの攻撃はできないはずだ」
確かに【光の護封剣】がある間は俺はモンスターで攻撃できない。【光の護封剣】がある間だけわね。
「俺はフィールド魔法【暗黒界の門】を発動!」
ディスクの一番右端のフィールド魔法カードゾーンにセットすること、俺の後ろに石で出来た巨大な扉が現れる。
「このカードは、フィールドにいる悪魔族モンスターの攻撃力を３００ポイントアップさせる」

【暗黒界の軍神シルバ】
ＡＴＫ２３００→２６００

「だ、だが如何に攻撃力を上げたとしても【光の護封剣】がある限り、貴様は３ターンの間攻撃は出来ん!」
「それはどうかな。罠カード発動!【闇のデッキ破壊ウィルス】!」
「何!?またウィルスカードだと!?」
「そう。そして今度は自分フィールドの攻撃力２５００以上の闇属性モンスターを１体生贄にして発動。魔法もしくは罠のどちらかを選択して選択した方をすべて破壊する。当然俺が選ぶのは…魔法カードだ!」

その宣言とともに【シルバ】が今度は紫色に変色し粒子になると、囲っていた【光の護封剣】が煙を上げながら溶けだし消滅した。
「そして例の如く相手は3ターンの間、ドローしたカードが魔法ならば墓地に送る。これでお前は3ターンの間、攻撃力１５００以下のモンスターと魔法は使えなくなった」
奴のデッキは殆ど攻撃力１５００以下と魔法カードで構成されていたはず。だからこのウィルスコンボは物凄く相性がいいのだ。
「さらに【暗黒界の門】のもう一つの効果。1ターンに1度、自分の墓地の悪魔族モンスター1体をゲームから除外、つまりゲームから取り除くことで手札から悪魔族モンスター1体を捨てる。その後デッキから1枚カードをドロー出来る。墓地の【暗黒界の軍神シルバ】を除外して手札から【暗黒界の武神ゴルド】を捨てる。そしてカードを1枚ドローする」
半透明な【シルバ】の姿が現れると、門の扉が開き【シルバ】はその中にへと吸い込まれ、扉は閉じられる。
「そして今墓地に送られた【ゴルド】の効果発動！このカードがカード効果で手札から墓地に捨てられた時、自分フィールドに特殊召喚する。出でよ、【ゴルド】！」
フィールドに斧を持った【シルバ】とは対等の黒と金が特徴の悪魔が現れた。

【暗黒界の武神ゴルド】
効果モンスター
☆5
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ２３００
ＤＥＦ１４００

「馬鹿な！5星モンスターを一瞬して召喚しただと」
「さらに【暗黒界の門】の効果で、攻撃力が３００ポイントアップする！」

【暗黒界の軍武神ゴルド】
ＡＴＫ２３００→２６００

「ッ！し、しかし、そのモンスターの攻撃力では私のＬＰを削り切ることは出来ん」
「いや、残らないよ。リバースカードオープン、罠カード【闇次元の解放】発動！このカードはゲームから除外されている自分の闇属性モンスター１体を選択し、そのモンスターを特殊召喚する。俺が選ぶのは、さっき除外された【暗黒界の軍神シルバ】だ！」
フィールド上空に穴が開き、その中から【シルバ】が三度現れ【ゴルド】の隣に立つ。
「そしてフィールド魔法の効果に適応しパワーアップ！」

【暗黒界の軍神シルバ】
ＡＴＫ２３００→２６００

「あぁ……あぁ…」
手札０、リバースカードも無し。この時代には墓地から発動するカードは殆どない。もはや相手にはなす術がないな、終わったな。
「先ずは【シルバ】でダイレクトアタック！」
【シルバ】が両腕の刃を振ると斬撃が飛び出しレアハンターの身体を斬り裂く。

レアハンター
ＬＰ４０００→１４００

「クゥ…」
「ではフィナーレと行こう。【暗黒の武神ゴルド】最後の一撃を食らわせてやれ！」
【ゴルド】が持っていた斧を振り上げ勢いよく振り下ろすと、黄金の

斬撃が放たれレア・ハンターを斬り裂いた。
「ウワァーーーーー!!」

レア・ハンター
ＬＰ１４００→０

吹き飛ばされたレアハンターはその場で倒れ動かなくなった。失神したかな？しかし呆気ない幕だったな。まぁデッキの相性もそうだけどボスのマリク曰くこの男は「グルーズの中で最弱の男」だって言うし。まぁ、コテ試し程度には丁度良かったかな。
「さてと、じゃあルールでお前のレアカードとパズルカードを一枚ずつ貰うぞ」
デッキを取り中身を確認すると【エクゾディア】パーツ以外では守備力が高い通常モンスターが殆どで、後は手札を補充する魔法カードが数枚入っているだけ。どう見ても素人のデッキにしか見えない。
「ちっ、ロクなカードがないじゃないか。……ん？」
カードを見ていくとその中に【真紅眼の黒竜】が1枚混じっていた。城之内から奪ったカードだというのは直ぐにわかった。
しかしハンターだったら、デッキに入れないでそのまま持っていればいいのに何故デッキに入れているんだ？それに、どう考えてもこのデッキに【真紅眼の黒竜】を入れるには無理があると思うんだが…。
「ほらよ」
俺は【真紅眼の黒竜】のカードを城之内（凡骨くん）にへと投げて渡した。
「それは元々そのカードはお前の物だろ？だったらくれてやる。それに元々俺には必要ないカードだしな」
「神山君、もしかして城之内の【レッドアイズ】を取り返すために…」
「さぁね。俺はただいいカモがいたから準備体操がてら勝負しただけのことだ」
レアハンターは負けたことにかなりのショックを受けているようで「私が…負けた…」と倒れたままブツブツ言っている。
これ以上は見るに堪えないのでパズルカードだけ貰ってその場を

去ろうとした時、突然頭を抱えて怯えるように叫び出した。そしてその額に千年アイテムの紋様が浮かび上がり遊戯と話をし始めた。変なことに関わりたくないのでさっさと行こうとしたら腕を掴まれる。

「何だ？俺はお前達は特に関係はないはずだが…」

『君が神山悠也だな。噂は聞いているよ、デュエリストキングダムで準優勝し、更に【青眼の白龍】を所持している男だと』

ッ!?何で俺が【青眼の白龍】を所持していることまで知ってんだ!?俺のデータに載っていたレアカードがそれだったのか？それともマリクが持つ「千年ロッド」の力で誰かから知ったか？

『海馬瀬人しか持っていないはずの【青眼の白龍】を何故君が持っているのか知らないけど関係ない。我等グールズを敵に回したことを後悔するがいい』

「…面白い。どう後悔させてくれるのか楽しみだ。ところで、いつまでその薄汚い手で触れてんだよォ…」

力づくで腕を払い除け、闇のオーラを纏わせた拳をレアハンターの土手っ腹に打ち込む。するとレアハンターの額に浮かんでいた千年アイテムの紋様は消え、身体は糸切れたようにその場で崩れ落ちる。

これでパズルカードは2枚となった、後4枚だ。しかし「敵に回したことを後悔しろ」だとォ？…それはこっちのセリフだ。上等、この俺を敵に回すとどうなるか、想い知らせてやる！

更に闇の力を使って町全体の気配を見渡しある人物を見つけた。そして「響転（ソニード）」と言う瞬間移動を使ってその人物がいる場所まで移動いる。その人物とは…ベンチの上に両手を上げたまま直立している不気味な男である。

12話

マリクからの挑戦（？）を受け、俺は闇の力でベンチの上で両手を上げ、鼻や口等顔の複数の場所にピアスをした直立している不気味な男がいる場所まで来た。アイツがマリクが操るパントマイマーだな。しかし実際見ると本当に気持ち悪いな。引きながらも我慢してパントマイマーに近づく。

「おい、見ているんだろ？望み通りこっちから来てやったぞ」

そう言ってパントマイマーに話し掛ける。その光景に周りに人はこっちをジロジロ見てくる。確かに一般的に見れば変な人、頭がおかしい人って思うだろうな。メンタルが削ぎ落とされるわァ。

するとパントマイマーの目が動きこっちを見た。

「…驚いた。君から接触して来るとは。何故コイツが僕の操る人形だと分かっただい？」

「さぁ、何でかな？知りたければお前の持つ【千年ロッド】で調べればいい。尤もそんな機会はないだろうがな」

「この僕に対して随分な口を叩くじゃないか。いいだろう、準備運動がてら武藤遊戯の前に貴様を倒すとしよう」

パントマイマー（マリク）は背負っていた鞄からデュエルディスクを取り出し装着する。

「じゃあ、始めるとしよう」

「待った、その前にやることがある」

俺は一番近くになったビルのテレビ画面に一つ筋の光を投げ飛ばす。光はモニターの中にへと入り込むと、全てのモニターの映像が乱れ出し「ジャー」と白黒の横線の映像が流れる。

それから数秒くらいしたところで白黒の映像から次第に何かの画像が映し出されていく。それは何と俺達がいる、ここの場所の映像だった。しかも近くにあるモニター全てに映し出されていた。

「な、何だ、これは!?」

「俺の力を使って全てのテレビやモニターにここの場所の映像を繋いだ。つまり、今から俺達の戦いが世界中に生放送されるんだ。どう

だ、面白いだろう？」
「ほぉ、神の力を世界に知らしめるとはいいアイディアだ。そうすればもう我々グールズに歯向かう者はいなくなる。だが自らの敗北を世界に見せつけると、君は変わり者のようだ」
「敗北？違うな。神は今から倒されるんだ、この俺にな！」
そう発言すると、テレビの俺の顔がドアップに映し出される。よくドラマとかで格好いいセリフ言っているとアップになるけど、実際やってみると恥ずかしいが悪くない。いや寧ろそれ以上に気持ちいい。最高の気分だ。
「フン。神を倒すだなんて、随分大きく出るじゃないか。だがその自信も、神を前にすれば直ぐに崩れ落ちることになる」
パントマイマー（マリク）はデッキをディスクにへとセットする。
「君のことを少し調べた。どうやら君は複数のデッキを所持している。故にレアカードもかなり持っているようだ。君を倒して持っているレアカードを全て手に入れる。心配しなくても我々グールズが有効活用してあげるからよ」
「さっきも言っただろ。お前にそんな機会は永遠に訪れない」
俺もデッキをセットし、デュエルディスクを起動させ互いに開始の宣言する。

『デュエル！』

悠也
ＬＰ４０００
パントマイマー（マリク）
ＬＰ４０００

「俺の先行、ドロー。まずはモンスターを守備表示で場に出す。さらにリバースカードを3枚伏せてターンエンド」

悠也

ＬＰ４０００
手札２枚
モンスター
裏守備×１
魔法・罠
伏せ×３枚

今回のデッキは【オシリス】対策のために用意したデッキ。でも対策と言ってもメタ的モノではない。前々から【オシリス】とは戦わせたいモンスターが１体いたんだ。そのモンスターで【オシリス】に対抗するために元々あった１つデッキを改良したモノ。だからギリギリセーフ…のはずだ。

「おや、偉そうな事を言ってた割には随分消極的だね。それとも口だけのホラ吹きなのかな？」

「御託はいいから、早く進めろ」

「フン、減らず口を。僕のターン、ドロー。僕は魔法カード【融合】発動！手札の【ワームドレイク】と【ヒューマノイドスライム】を融合し【ヒューマノイド・ドレイク】を融合召喚する」

口の中に一つ目があるワームと黄色の鎧を着た左手が鎌になっているスライムが合体し、さっきのワームの胴体と顔を持ったスライムが現れる。

【ヒューマノイド・ドレイク】
融合モンスター
☆７
水属性／水族
ＡＴＫ２２００
ＤＥＦ２０００

「融合モンスターは大会ルールでは召喚したターンには攻撃できないが、このカードがあれば問題ない。手札から魔法カード【速攻】を発

動。これで融合モンスターは召喚したターンでも攻撃が可能となった。行け【ヒューマノイド・ドレイク】！奴の守備モンスターに攻撃だ！」
攻撃宣言と同時に【ヒューマノイド・ドレイク】がセットモンスターに突撃し左腕の鎌で切り裂いた。切り裂かれたカードから金色の首飾りを下げた赤目の黒猫が姿を現わし消滅する。
「【不幸を告げる黒猫】のリバース効果発動！自分のデッキから罠カードを1枚デッキの一番上に置く。【罅割れゆく斧】をデッキの一番上に置く」

【不幸を告げる黒猫】
リバース・効果モンスター
☆2
闇属性／獣族
ＡＴＫ５００
ＤＥＦ３００

一度デッキを取り出し、この状況で要らない罠カードを選びデッキをシャッフル。デッキをデュエルディスクに戻した後選択したカードをデッキトップに置く。
「そしてこの瞬間リバースカードオープン、【二者一両損】！お互いのプレーヤーはデッキの一番上のカードを墓地に送る」
「自ら選んだカードを墓地に送るとは。どうやらお前は戦略と言うものがないらしい」
「これも戦略の一つなんだよ。そんなことより、カード効果で互いにデッキの1番上のカードを墓地にへと送るぞ」
俺とパントマイマー（マリク）は自分のデッキトップのカードを墓地にへと送る。これで先ずは1枚だ。
「何を考えているかは知らないが、神が降臨するまでその頭で作戦を練るんだな。僕はこれでターンエンド」

パントマイマー（マリク）
ＬＰ４０００
手札２枚
モンスター
【ヒューマノイド・ドレイク　】
ＡＴＫ２２００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー」
しかし、いきなり【ヒューマノイド・ドレイク】で攻撃して来るとは思わなかった。バトル・シティー編では融合モンスターは召喚したターンは攻撃出来ないからな。
だがあのデッキは一部のカードを除いては大した効果を持つカードはない。【オシリス】を除いては【ヒューマノイド・ドレイク】が最も攻撃力が高いモンスターのはず。効果を持っていない融合モンスターだから何とかなるが、俺の手札に今【ヒューマノイド・ドレイク】を倒せるカードはない。伏せカードも今は意味ないカードだし。ここは耐えるしかない。
「モンスターを1体を守備表示で出してターンエンド」
悠也
ＬＰ４０００
手札２枚
モンスター
裏守備×　1
魔法・罠
伏せ×２枚

「また守備表示か。どうやら貴様は口だけが達者な奴のようだね。倒されるなら、せめて神のカードを拝んでからにしてくれ」
「御託はいいから早く進めて」

「僕のターン。行け！【ヒューマノイド・ドレイク】奴の守備モンスターを蹴散らせ！」
【ヒューマノイド・ドレイク】の左腕の釜が俺の守備モンスターに振り下ろされそうになった時、カードが表となり紫色のローブを着込んだヨボヨボの小さなお爺さんが現れ、持っていた大釜で【ヒューマノイド・ドレイク】の攻撃を弾き飛ばした。
「セットモンスターは【魂を削る死霊】。このカードは戦闘では破壊されない」

【魂を削る死霊】
効果モンスター
☆3
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００

「時間稼ぎのつもりか？だがそんなのは無駄なことだ。僕はこれでターンエンドだ」

パントマイマー（マリク）
ＬＰ４０００
手札３枚
モンスター
【ヒューマノイドドレイク】
ＡＴＫ２２００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー。…よし、スタンバイフェイズに入りリバースカードオープン、【強欲な贈り物】。このカードの効果により相手はデッキから２枚カードをドローする。」

「おや、僕の手札を増やしてくれるのかい？何を狙っているかは知らないが、馬鹿な奴だ。じゃあ有難くカードを引かせてもらうよ」

パントマイマー（マリク）
手札３→５

パントマイマー（マリク）がカードをデッキから２枚カードを引いた。ここだ！

「この瞬間罠発動、【便乗】！相手がドローフェイズ以外でカードをドローした時に発動。今後相手がドローフェイズ以外でカードを引いた時、俺はデッキから２枚ドローすることが出来る」

「成る程、さっきの罠はそのカードを発動させる為だったというわけか。だが、そのカードの効果が発動するのは、僕がドローフェイズ以外でカードをドローした時だけだ。つまり僕がそれ以外でドローしなければそのカードは何の意味も持たない役立たずのカードだ」

確かにこの【便乗】の効果が適用させるのはドローフェイズ以外、つまり効果でドローした時だけ。その効果を分かって相手がデッキからカードをドローする効果を持つカードを発動するわけがない。

ましてや効果ドロー出来るカードは少ないはずだから尚更だ。この時代では。

「そうでもないよ。俺は【電動刃虫（チェーン・インセクト）】を攻撃表示で召喚」

俺のフィールドに鋏がチェーンソーになっているクワガタモンスターが現れる。

【電動刃虫（チェーン・インセクト）】
効果モンスター
☆４
地属性／昆虫族
ＡＴＫ２４００
ＤＥＦ０

「レベル４で攻撃力２４００だと!?」
「さらに【魂を削る死霊】を攻撃表示に変更してバトル！【電動刃虫】で【ヒューマーノイド・ドレイク】を攻撃！」
【電動刃虫】が突っ込んで両方の鋏で【ヒューマノイド・ドレイク】の胴体を挟むと、チェーンソーの歯が動き出し【ヒューマノイドドレイク】の体を挟みながら切り刻み破壊する。

パントマイマー（マリク）
ＬＰ４０００→３８００

「この瞬間【電動刃虫】の効果発動！このカードのダメージ計算終了時、相手はデッキから1枚ドロー出来る」
「何!?戦闘後に相手プレイヤーに強制的にカードを引かせるモンスターだと。しかもモンスター効果でドローする事は…」
「そう。相手がドローフェイズ以外でカードをドローした事で【便乗】の効果発動。俺はデッキからカードを2枚ドローすることが出来るってことだ。さぁ早くカードを引きな」
「チッ」
パントマイマー（マリク）は舌打ちしてデッキから1枚引く。

パントマイマー（マリク）
手札５→６

すると俺のデュエルディスクのＬＰが書かれている部分に「ＤＲＡＷ」の文字が表示される。
「【便乗】の効果で俺もデッキから2枚カードを引く。続けて【魂を削る死霊】でダイレクトアタック！」
【死霊】が鎌を持ち上げると見た目からは想像も出来ない速さでパントマイマー（マリク）にへと移動し、その身体を鎌で斬りつける。

パントマイマー（マリク）

ＬＰ３８００→３５００

「そして【魂を削る死霊】の効果発動。直接攻撃で相手に戦闘ダメージを与えた時、相手の手札を１枚ランダムに捨てさせる」

攻撃が終わった【死霊】の目が光ると、持っていた鎌でパントマイマー（マリク）の手札を１枚を斬り裂いた。

「くっ…。【電動刃虫（そのモンスター）】で攻撃する事で僕にカードを引かせ、そして【便乗（その罠カード）】の効果で貴様は毎回２枚のカードをドローすることが出来るというわけか」

「そういう事。【電動刃虫（このモンスター）】の効果は、単体では自分にとってデメリットになってしまう。でもこうやって他のカードと組み合わせる事でそのデメリットを最小限に抑える事が出来ると言うわけさ。しかも【魂を削る死霊】の効果のお陰で【電動刃虫】のドロー効果は事実無効になったようなもの。ど素人じゃないんだから、ちゃんと戦略の一つや二つは考えてあるんだ。伏せカードを１枚出してターンエンド」

悠也
ＬＰ４０００
手札３枚
モンスター
【電動刃虫】
ＡＴＫ２４００
【魂を削る死霊】
ＡＴＫ３００
魔法・罠
【便乗】
伏せ×１

「僕のターン。フン、少しは考えていたようだが、戦略と呼ぶには程遠い。貴様のお陰で今僕の手札は６枚となっている。敵に塩を送る

ようなマネをするとは君もお人好し、いや間抜だな」
「何言ってんだ?・俺は神降臨の準備を手伝ってるんだ。感謝はされども、そんなことを言われる筋合いはないと思うがな」
「その減らず口直ぐに叩けなくしてやる。僕はこのターン、このモンスターを召喚する。【リバイバルスライム】を召喚、守備表示!」
パントマイマー（マリク）の場に新たなスライムモンスターが現れる。

【リバイバルスライム】
効果モンスター
☆４
水属性／水族
ＡＴＫ１５００
ＤＥＦ５００

はい、出ましたァァ!・アニメだとブッ壊れているっと言っても過言ではない効果を持つチートカードの1枚が!
あのモンスターは戦闘及びカード効果による破壊でも何度でも再生する不死身のモンスター。攻撃には向いていないが、防御としてはピカイチっと言ってもいいだろう。
「さらに僕は永続魔法【スライム増殖炉】を発動!・このカードは毎ターン自分のスタンバイフェイズに【スライムトークン】を1体攻撃表示で召喚する。だがスライム以外のモンスターが召喚されるとこのカードは破壊される」
あ、アニメだとそんな効果なんだ。ＯＣＧ化ではモンスターを召喚することが出来ない効果だから結構使いづらいなんだよなぁ。やっぱりこの時代はアニメ効果の方が強い方が多いな。
「成る程、そのカードで神を召喚するための生贄を揃えるって言う魂胆か」
「そうとも。神の召喚、そして貴様の敗北へのカウントダウンは始まったんだ。まぁ無駄だろうが精々足掻け。僕はこれでターンエン

ドだ」

マリク
ＬＰ３５００
手札４枚
モンスター
【リバイバルスライム】
ＤＥＦ５００
魔法・罠
【スライム増殖炉】

「俺のターン、ドロー。【電動刃虫】で【リバイバルスライム】を攻撃！」

【電動刃虫】はさっきと同じように【リバイバルスライム】を挟みながら、チェーンソーで体を切り裂いて身体をバラバラにする。だがバラバラにされた筈の【リバイバルスライム】破片が集まりだし元どおりになる。

「無駄だ。【リバイバルスライム】は如何なることを持ってしても破壊することができない不死の能力を持っているのだ」

アニメで見たけど本当にチート過ぎる能力だよね、それ。

「だが【電動刃虫】の効果でお前はカードを1枚引け。そして【便乗】の効果が発動し、俺もカードを2枚ドローする」

パントマイマー（マリク）
手札４→５
悠也
手札４→６

これでマリクの手札は5枚。すでに【オシリス】のカードがあるとすればこれ以上手札を増やすのはまずいが、まだ切り札が来ない。ここは待つしかない。

「【魂を削る死霊】を守備表示に変更し、さらにモンスターをセットしてターンエンド」

ＬＰ４０００
手札５枚
モンスター
【電動刃虫】
ＡＴＫ２４００
【魂を削る死霊】
ＤＥＦ２００
裏守備×１
魔法・罠
【便乗】
伏せ×１

「僕のターン、この瞬間【スライムトークン】が１体召喚される」
機械の窪みの部分が光ると、その頭上に悪そうな顔付きの小さなスライムが現れる。

【スライムトークン】
トークン
☆１
水属性／水族
ＡＴＫ５００
ＤＥＦ５００

「そしてリバースカードを２枚出してターンエンド」

マリク
ＬＰ３５００
手札４枚

・モンスター
【リバイバルスライム】
ＤＥＦ５００
【スライムトークン】
ＡＴＫ５００
・魔法・罠
【スライム増殖炉】
伏せ×２

「俺のターン、ドロー。確かに召喚のための生け贄を揃えてくれるってことを考えれば【スライム増殖炉】は有能だろう。毎ターン自動的にモンスターを生み出してくれるから、手札の消費も最小限に抑えられる。だが生み出された【スライムトークン】の攻撃力は５００。片や俺の【電動刃虫】の攻撃力は２４００、その差は２０００に近い。もしこのまま攻撃すれば次のターンで勝負が決まる。これじゃ神が召喚される前に決着が付いちまうぞ」

「フフフ、そう思うのなら攻撃してみるといい」

「望み通り攻撃してやる。【電動刃虫】、【スライムトークン】を攻撃だ！」

「この瞬間リバースカード発動！永続罠【ディフェンド・スライム】！」

【スライムトークン】に突撃していた【電動刃虫】の前に【リバイバルスライム】が現れ、【スライムトークン】の代わりに攻撃を受けた。

「フフフフ、永続罠【ディフェンド・スライム】は自分のモンスターの攻撃を【リバイバルスライム】が写し変えることが出来るカード。これで貴様の攻撃は通らない。そしてそのモンスターの効果で僕は１枚カードを引かせてもらう」

「だがこっちも【便乗】の効果で２枚引かせてもらう」

パントマイマー（マリク）
手札５→６

悠也
手札６→８

これで手札はマリクは６枚、俺が８枚となった。互いに手札がとんでもない量になっているな。それに神が召喚されたら今の状況では此方が不利だ。今はモンスターを出せるだけ出して壁を作っておこう。

「俺はリバースカードを２枚出し、モンスター一体をセットしてターンエンドだ」

ＬＰ４０００
手札５枚
・モンスター
【電動刃虫】
ＡＴＫ２４００
【魂を削る死霊】
ＤＥＦ２００
裏守備×２
・魔法・罠
【便乗】
伏せ×３

「僕のターン、この瞬間２体目の【スライムトークン】が召喚される。さらにリバースカードオープン、罠モンスターカード【メタル・リフレクトスライム】。このカードは自分のフィールドに【メタル・リフレクトスライム】を１体特殊召喚する事ができる」

【増殖炉】から２体目の【スライムトークン】が召喚されると同時に、発動した罠カードがモンスターゾーンに移動してカードの向きが守備表示の状態とへなり、その中から銀色のスライムが姿を表す。

【メタル・リフレクトスライム】

永続罠・モンスター
☆１０
水属性／水族
ＡＴＫ０
ＤＥＦ３０００

これでパントマイマー（マリク）のフィールドには【リバイバルスライム】以外に3体のモンスターが揃った。
「待たせたね、今神を見せてやろう。僕はスライムトークン2体と【メタル・リフレクトスライム】を生贄に降臨せよ！【オシリスの天空竜】！」
1枚のカードがディスクに置かれると、突然空が暗くなり無数の雷が降り注ぐ。その中のとびっきりデカイ雷が【スライム増殖炉】に命中し大爆発を起こす。その爆発に【スライムトークン】と【メタル・リフレクトスライム】が巻き込まれて消滅。辺りに飛び散った残骸が吸い込まれるように上空にへと消える。
そして上空から雷とともに、額に青い宝石が埋め込まれ、２つの口を持つ巨大な赤い竜が姿を現した。

13話

少し遡ること数分前。海馬コーポレーションの複数のモニターがある一室、そこで社長である海馬瀬人は弟のモクバと共にバルトシティに登録されているデュエリスト達のデュエルの様子を観ていた。そこでとあるデュエル中継に目をやっていた。それは神山悠也とパントマイマーのデュエルであった。

「…そろそろか」

神山悠也の力によって中継されている映像は、勿論海馬コーポレーションにも流れていた。最初は何ならの悪戯かと思い映像を遮断しようと時のある単語が耳に入ってきた。

神

さらには『神の力』とまで言っている。その言葉の意味を海馬は直ぐ理解した。「神山悠也（コイツ）と対峙している奴は神のカードを持っている」と。そこで海馬はそれを確認するためにこのデュエルの様子を観戦することにしたのだった。

そしてパントマイマー（マリク）のターンとなり、2体目の【スライムトークン】が召喚される。さらに【メタル・リフレクトスライム】が召喚され、3体の生け贄となるモンスターが揃った。

「ッ！来るか!?」

『降臨せよ、【オシリスの天空竜】!!』

そしてデュエルディスクに1枚のカードが置かれた瞬間、青空が一変し厚い雲に覆われ一筋の雷が降り注ぎ大型の機械を破壊。そして雲の中から巨大な竜【オシリスの天空竜】が映し出される。

「これが俺の【オベリスク】と対なす存在…【オシリスの天空竜】…」

「ス、スゲェ…」

その迫力に海馬にモクバ、そしてその場にいたオペレーター達も硬

直してしまう。だが海馬だけは直ぐに正気を取り戻しその場から離れようとする。
「兄様、何処へ？」
「デュエルが行われている場所へ行く。神の力をこの目で直接確かめる」
「あっ！俺も行くよ、兄様！」
海馬瀬人はデュエルが行われている場所へ急いで向かい、モクバもその後を付いて行くのであった。

青空だった天候は一変、雲が太陽を遮り夜でもないのに、その中から赤い竜が姿を現した。
「どうだ。これぞ神の１体、【オシリスの天空竜】だ！」
『ギャァァァァー!!』
【オシリスの天空竜】
効果モンスター
☆１０
神属性／幻神獣族
ＡＴＫ？
ＤＥＦ？
【オシリス】はパントマイマー（マリク）の声に答えたかのように大きな咆哮を上げる。しかし、流石は神だ。ソリッドビジョンの筈なのにタダ鳴いただけで凄い威圧感をビリビリ感じる。
「オシリスの攻撃力は、僕の手札の枚数によって決まる。今僕の手札は６枚、よってオシリスの攻撃力は６０００ポイントだ」

【オシリスの天空竜】
ＡＴＫ?→６０００

「行け、神よ!その力を持ってして奴のモンスターを蹴散らせ!【オシリスの天空竜】の攻撃、『超電動波サンダーフォース』!!」
【オシリス】の大きな下の口が開かれると、そこに共方もないエネルギーが凝縮されていき、極太の光線が放たれ【電動刃虫】にへと向かう。
「罠発動、【和睦の使者】!このターン俺のモンスターは破壊されず、戦闘ダメージも受けない」
発動と同時に大勢の巫女が現れ、【電動刃虫】を守りながら【オシリス】の攻撃を防いだ。しかし攻撃の余波が襲い掛かり吹き飛ばされそうになる。ソリッドビジョンのはずなのに、ここまで衝撃が襲って来るなんて…。これが神の力か、是非使用したものだ。
「バトルを行ったことで【電動刃虫】の効果が発動、カードを１枚引け」
【電動刃虫】の効果はダメージ計算時に発動するから、相手に攻撃されても効果が発動する。

パントマイマー（マリク）
手札６→７
悠也
手札５→７

「ほぉ、このターンはなんとか防いだか。だがそれがいつまで持つかな?僕は【生還の宝札】を発動してターンエンド」

マリク
ＬＰ３５００
手札６枚
モンスター

【オシリスの天空竜】
ＡＴＫ６０００
【リバイバルスライム】
ＤＥＦ５００
魔法・罠
【生還の宝札】
【ディフェンド・スライム】

また来ました、【リバイバルスライム】に続くアニメでは強過ぎるチートカードの1枚。ＯＣＧの方では自分の墓地限定だが、アニメの【生還の宝札】は敵味方問わずモンスターが蘇生するとドロー出来る。しかもその枚数はＯＣＧでは1枚だが、アニメでは3枚！チート過ぎるにも程があるだろう。

「俺のターン、ドロー。セットモンスターを表側表示にする。そのカードは…【人喰い虫】だ！」

裏守備にしていた1枚のモンスターが表側表示になり、二本の角を生やし鋭い爪を持ったモンスターが現れる。

【人喰い虫】
リバース効果モンスター
☆2
地属性／昆虫族
ＡＴＫ４５０
ＤＥＦ６００

「フフフ、この瞬間【オシリス】の恐ろしい特殊能力が発動する」

【オシリス】の開いていた口が閉じていくと、閉じていた上の口が開きそこに丸い球体が作り出されていく。

「【オシリス】の特殊能力、それは相手フィールドにモンスターが召喚された時発動。そのモンスターに２０００ポイントのダメージを与える。攻撃表示なら攻撃力が、守備表示なら守備力が２０００削ら

れる。そしてこの効果で数値が０になったモンスターは破壊される！ヤれ、『召雷弾』！」
【オシリス】の口に溜まった『召雷弾』が放たれ、それを受けた【人喰い虫】は一瞬で影も形もなく消し飛ばされた。
「だが【人喰い虫】のリバース効果。フィールド上のモンスター１体を破壊する。破壊するのは…【リバイバルスライム】！」
消し飛ばされたはずの【人喰い虫】の爪が一本が残っており、それが上空から落下し、そのまま【リバイバルスライム】を一刀両断する。
「しかし【リバイバルスライム】は如何なる効果を持ってしても破壊されない。そして【リバイバルスライム】が再生復活したことによって【生還の宝札】が発動！この効果で僕はカードを３枚引くことが出来る」
パントマイマー（マリク）がデッキから３枚カードを引いて手札が増えたことで、同時に【オシリス】の攻撃力もアップする。

パントマイマー（マリク）
手札６→９
【オシリスの天空竜】
ＡＴＫ６０００→９０００

「だがお前が効果でドローしたことで【便乗】の効果も発動！よって俺も２枚カードを引く（このカードはッ！）」

悠也
手札８→１０

「それがどうした？幾ら貴様が手札を増やしたところで神の前では無力だ」
チッ、悔しいが確にその通りだ。今俺の手札に状況を逆転出来るカードはない。モンスターを召喚したところで【オシリス】の『召雷弾』によって攻守２０００以下のモンスターは一瞬で死滅する。どう

すれば。……いや、待てよ。
「…俺はモンスターを守備表示で召喚」
【電動刃虫】の横のモンスターゾーンに1体裏守備で出す。モンスターを召喚したが【オシリス】は上部の口が開かない。
思った通り。【オシリス】の特殊能力は表側表示で出たモンスターにのみ発動する効果のようだ。だから裏側で出せばその効果は発動しない。確信のない賭けだったが、ハズレなくてよかった。
「さらに【電動刃虫】を守備表示に変更し、リバースカードを1枚出してターンエンド。この瞬間手札が6枚以上のため、6枚になるように捨てる（これで【オシリス】を倒せる伏線は出来た。後はあのカード来るまで耐えるしかない）。」

悠也
ＬＰ４０００
手札６枚
モンスター
【電動刃虫】
ＤＥＦ０
【魂を削る死霊】
ＤＥＦ２００
裏守備×１
魔法・罠
【便乗】
伏せ×３

「僕のターン、ドロー。この瞬間【オシリス】の攻撃力はさらに上がる」

【オシリスの天空竜】
ＡＴＫ９０００→１００００

【オシリス】の攻撃力が１００００台にまで到達した。
「【オシリス】、【魂を削る死霊（そのあくれい）】を蹴散らせ！」
【オシリス】が口を開き攻撃態勢に入ろうとした時、１枚のカードを発動させる。
「リバースカードオープン！永続罠カード【グラビィティ・バインド―超重力の網】！これでレベル４以上のモンスターは攻撃を封じられる！」
【オシリス】のレベルは１０。４以上だから【グラビィティ・バインド】の効果範囲内にいるはず。これで少しでも時間を稼ぐ。しかし【オシリス】は【グラビィティ・バインド】が発動中にも関わらず、開けた口にエネルギーが溜まっていく。
「馬鹿め。神に罠が効くとでも思っているのか！ヤれ【オシリス】！」
ドギューーン
マジかよ!?止められないのかよ!?だが攻撃された【魂を削る死霊】は戦闘では破壊されない。だから大丈夫のはず。しかし結果はどうだろう。攻撃を受けた【魂を削る死霊】は跡形もなく吹き飛んでしまった。
「馬鹿な！モンスターとの戦闘では破壊されない【魂を削る死霊】が破壊された!?」
「違う。モンスターじゃない、神だ!!」
ハイ、出ました。名台詞にして理不尽な台詞!!神様だから何でもありか!?それとも理念に囚われないってか!?どちらにしろ理不尽にも程がある！
「更に僕は手札から永続魔法【無限の手札】を発動。これで互いのプレイヤーは手札制限が無くなる。これがどう言う意味か分かるか？」
「…手札制限が無くなったことで【オシリス】は攻撃力を上げ続けることができるようになったってことだろ？」
「その通り。神は攻撃力を無限に上げ続ける、これで貴様に勝ち目は

ない。素直に降参(サレンダー)することをオススメするよ」
「冗談はその喋り方だけにしろ。誰が貴様如きに降参(サレンダー)等するか！」
「いつまで強気でいられるかな？僕はこれでターンエンドだ」

パントマイマー（マリク）
ＬＰ３５００
手札９枚
モンスター
【オシリス】
ＡＴＫ９０００
【リバイバルスライム】
ＤＥＦ５００
魔法・罠
【ディフェンド・スライム】
【生還の宝札】
【無限の手札】

原作で遊戯がやった様にデッキ切れで勝負を決める手をある。だがそれまでにＬＰが残っている保証はない。今の【オシリス】の攻撃は９０００、次のターンになれば１００００になる。しかも【オシリス】自身の効果で表側表示で出したモンスターは攻守どちらかを２００ポイント削られる。
下手に攻撃しようとすれば俺は瞬殺される。今は壁を出して耐えるしかない。
「俺のターン、ドロー。（チッ、このカードじゃない）。ターンエンドだ」

悠也
手札７枚
ＬＰ４０００
モンスター

【電動刃虫】
ＤＥＦ０
裏守備×１
魔法・罠
【便乗】
【グラビィティ・バインド―超重力の網】
伏せ×２

「僕のターン、ドロー。フフフ、どうやら貴様の負けが決まったようだ。魔法カード【守備封じ】発動！これで貴様のその虫を攻撃表示に変更させる。【オシリス】奴のモンスターを粉砕しトドメをさせ！『サンダー・フォース』!!」
「リバースカードオープン！永続罠カード【スピリットバリア】発動！自分フィールド上にモンスターがいる限り、俺への戦闘ダメージは０になる」
【電動刃虫】は吹き飛ばされたが【スピリットバリア】のお陰で俺へのダメージは０になった。
「そして【電動刃虫】の効果でお前はカードを１枚引き、俺は【便乗】の効果で２枚引く」
「フン、しぶとい奴め。だが蹄けば蹄くほど、貴様の最後は惨めになるだけだ。ターンエンド」

パントマイマー（マリク）
ＬＰ３５００
手札１０枚
モンスター
【オシリスの天空竜】
ＡＴＫ１００００
【リバイバルスライム】
ＤＥＦ５００
魔法・罠

【ディフェンド・スライム】
【生還の宝札】
【無限の手札】

「俺のターン、ドロー。（これは！）俺はモンスターを召喚する。出でよ、【クリッター】！」
俺のフィールドに三つ目で、【クリボー】より大きな身体を持つ毛むくじゃらのモンスターが現れる。

【クリッター】（エラッタ前）
効果モンスター
☆3
闇属性／悪魔族
ＡＴＫ１０００
ＤＥＦ６００

「バカめ。貴様がモンスターを召喚したことで【オシリス】の特殊能力が発動！『召雷弾』！」
【オシリス】の頭上の口から放たれた雷のエネルギー弾が【クリッター】に命中。攻撃力が１０００しかない【クリッター】はその衝撃に耐えられず破壊されてしまう。
「折角のモンスターも無駄死だったようだな」
「そうかな。【クリッター】が破壊され墓地に送られた時の効果発動！デッキから攻撃力１５００以下のモンスター1体を手札に加える」
デッキを取り出しその中から1枚のカードを取り出す。このデッキ最大の切札となるカードを。
「そして今手札に加えたカードこそ、このデッキ最強とも言えるモンスターだ」
「ホォ、そうか。なら見せてみろ！だがどんなモンスターを出したところで、神の前では無力だがな！」
「言われなくても今見せてやるよ。とくと見るがいい！俺はフィー

ルドの表側表示になっている【便乗】、【グラビティ・バインド】、【スピリットバリア】、この3枚の永続罠を墓地に送って、降臨せよ【神炎皇ウリア】!!」

3枚の罠カードが炎に包まれ、それが一箇所に集まり巨大な火柱が立ち上る。その中に巨大な影が見え、中から【オシリス】に似た赤い竜が姿を現した。

「な、何だこのモンスターは!?【オシリス】にそっくりだと!?」

「これこそ三幻神がモデルになったとされている三幻魔の1体、【神炎皇ウリア】だ!」

【ウリア】は俺の声に応えるかのように、大きな咆哮を上げる。

【神炎皇ウリア】
特殊召喚・効果モンスター
☆10
炎属性／炎族
ATK0
DEF0

【ウリア】を始めて見た時、【オシリス】にソックリで驚いた。しかも効果も似ているから更に驚いた。だから一度でいいから戦わせてみたいと言う欲求があったが、今それが遂に叶う時が来て内心興奮している。しかしソックリな2体が対峙している描写は絵になるな。

「フフフ、ハハハハハハハ!まさかそんなモンスターを出してくるとは、驚いたよ。だが、【ウリア(ソイツ)】の攻撃力は0だ。三幻神がモデルになったと言っていたけど、だとすればとんだ出来損ないの紛い物だ。そして貴様の場にモンスターが召喚された。ヤれ【オシリス】、『召雷弾』!」

再び【オシリス】の上の口が開き、【ウリア】に『召雷弾』が放たれ命中する。【ウリア】のいた場所から煙が舞い上がる。

「ハハハハハハッ!所詮紛い物は紛い物。神の前には無力なのだ。紛い物はササっと消え失せ――!?」

パントマイマー（マリク）は高らかに笑っていたが、煙が晴れ俺の場を見た瞬間言葉を失う。それもその筈。『召雷弾』で破壊されたと思っていた【ウリア】がまだフィールドに健在だったのだから。

「何故だ！何故貴様のモンスターが破壊されていない！」

【ウリア】の攻撃力は自分の墓地に存在する永続罠カード１枚につき１０００ポイントアップする。まず【二者一輪】で墓地に送ったので１枚。そして今召喚する為に墓地に送ったので３枚の計４枚。よって攻撃力は４０００。それで『召雷弾』をくらって２０００ポイントのダメージを受けても攻撃力はまだ２０００も残っているんだ」

【ウリア】
ＡＴＫ０→４０００→２０００

「ちッ。だがそれでそのモンスターの攻撃力はたかが２０００だ。【オシリス】の敵ではない」

「それは如何かな。リバースカードオープン！罠カード【大暴落】発動！このカードは相手の手札が８枚以上ある時に発動する事ができる。相手は手札を全てデッキに戻してシャフル、その後２枚のカードをドローする」

「何!?ということはッ！」

「さぁ、手札を全てデッキに戻して２枚ドローしな」

「チッ」

パントマイマー（マリク）は手札を全てデッキに戻し、一度デッキを取り出してシャッフルする。そしてデッキを戻した後２枚カードを引いた。これで奴の手札が減ったことで【オシリス】の攻撃力が大幅にダウンした。

【オシリスの天空竜】
ＡＴＫ１００００→２０００

エッ？そんなメタカードを使うのは卑怯じゃないのかって？何

言ってるの？相手はレアカードを奪いまくっている上にコピーカードを大量生産している犯罪組織のボスだよ。それに神のカードなんて《チート》とも言えるモンスター使ってるんだよ、そんなのに比べたら俺のやっていることなんて可愛いもんでしょ！

「クッ！だが僕の場には【ディフェンド・スライム】がある。例えに貴様が攻撃しても【リバイバルスライム】が盾となる「リバースカードを1枚セット」ッ!?」

「さらに手札から速攻魔法【ダブル・サイクロン】を発動！互いの魔法、罠を1枚ずつ破壊する！俺は今伏せたカードとお前の【ディフェンド・スライム】を破壊する！」

黄色とピンクの2色のサイクロンが発生し、今俺が伏せたカードとパントマイマー（マリク）の【ディフェンド・スライム】をそれぞれ破壊した。

「これでお前を守る【リバスバルスライム】は使えなくなった。そして今破壊されたのは【心鎮壺】、永続罠だ。よってウリアの攻撃力が１０００ポイントアップする！」

【ウリア】
ＡＴＫ２０００→３０００

「オシリスの攻撃力を上回っただと!?」

「いくぞ、【ウリア】で【オシリスの天空竜】を攻撃！『ハイパー・ブレイズ』！」

【ウリア】の口に炎のエネルギーが凝縮されていき、強烈な火炎が放たれ【オシリス】に命中。【オシリス】は炎に包まれ苦しみもがいていたが、力尽き炎の中に消えていった。

パントマイマー（マリク）
ＬＰ３５００→２５００

「馬鹿な…こんな事が……神が…あんな紛い物如きに…倒されるな

んて…」
「神とて完璧じゃない。寧ろ完璧ならそれ以上はない。故に成長もしない。だから負けたんだ。お前の敗因は1つ、『神の力は絶対』と過信し過ぎたことだ！」
パントマイマー（マリク）は【オシリス】が倒されたことに対するショックが大きかったようで、膝から突き崩れ落ちた。
「どうした？まだデュエルは終わっていない。俺はこれでターンエンドだから早く進めろ」
しかしパントマイマー（マリク）は顔を伏せたままで動かなかった。俺の言葉が聞こえているのかも分からない。するといきなり顔を上げて此方を見つめてきた。
『フフ、フフフフフフフ。どうやら君の認識を改め見直す必要があるようだ。今回は僕の負けだと認めよう。しかしこれで終わったと思うな！貴様は遊戯共々僕が葬ってやる！それまで神のカードは貴様に預けておくよ。首を洗って待っているんだな』
それだけ言うと糸が切れたように顔を伏せ動かなくなる。
「その言葉ソックリそのまま返してやるぜ。お前を倒し【ラー】のカードも手に入れやる」
俺は動かなくなったパントマイマーに近づきデュエルディスクを取り上げ、【オシリス】のカードとパズルカードを1枚取り出す。
「これがオリジナルの神のカード。これで1枚手に入れたぞ」
歓喜に震えていると誰かが近づいてくる気配を察し、振り向くと海馬とモクバがいた。
「貴様、神のカードを手に入れたようだな」
「そうだが、何をしに来た？今ここで【オシリスの天空竜（スカイドラゴン）】を掛けてデュエルして手に入れるか？それとも力ずくで奪うか？」
「…貴様には王国での借りがある。だが貴様なら恐らく決勝戦まで進むだろう。貴様への借りは決勝戦でじっくりと返すつもりだ。ましてやデュエリストたるもの、カードを手に入れるのはデュエルに勝利してからだ。それまでそのカードは貴様に預けておく」
それだけ言うと海馬と去って行った。

「それまでそのカードはお前が持っていろ。でも忘れるなよ。お前を倒してそのカードを手に入れるのは兄様だからな」
モクバも海馬の後を追うように去って行った。
しかし手に入れるのはデュエルに勝利したからね…。前のお前なら黒服の男を使って力ずくで手に入れていたのに、遊戯に敗れて考え方が少し変わったのかな。
何はともあれ、これで6枚中3枚のパズルカードを手に入れることが出来た。しかし残り3枚か。直ぐ様別の奴と戦いたいが、近くにいる連中は視線を向けると背け離れていく。これじゃ後3枚手に入れるなんて無理…あっ！待てよ、あの連中ならいけるかも！
少し面倒かもしれないが手っ取り早くパズルカード3枚手に入れるためだ。俺は近くにいたこの大会に参加してない人に話しかけた。
「ちょっと聞かせてくれ。この辺の近くに――――――――――――――――――墓地はあるか？」

１４話

どうも皆さん、神山悠也だ。俺は今墓地に来ています。何故こんな人が寄り付かない場所に来たかって？それは勿論パズルカードを手に入れるために決まっているだろう。

俺の記憶だと墓地（ここ）に参加者３名が、セコい手を使って他の参加者からパズルカードを奪っていた。今俺のパズルカードは３枚、その３人のを合わせれば６枚になる。決勝戦への参加資格が手に入る上に、他の参加者を見つける手間も憚る。正に一石二鳥だ。

しかし墓地となると夜ではないと言えキミがが悪いな。此処を拠点にしてた連中気にしなかったのかな？

そんなことを考えながら歩いていると、広場の中心部に感じが悪い３人組がいた。

「何だお前？」

眼鏡を掛けた不良ぽい赤髪の男性が鋭い眼差しを向け噛み付いてくる。

「お前達、バルトシティの参加者だろ？俺もそうだ。そして参加者同士が出会したってことはやることは１つしかないだろ」

装着していたディスクを見せ起動させる。

「俺は神山悠也。お前達にデュエルを申し込む！」

「神山悠也？その名前どっかで…」

「アッ、思い出したゾ！コイツあの『バンデット・キース』を倒した奴だゾォ!!」

「何ッ!?た、確かにあの顔、デュエリストキングダムで準優勝した奴だ!?」

「ど、どうすんだよ。あんな奴が相手じゃ俺達が束になったって勝てるわけないぜ」

俺の正体を知った３人は完全に戦意喪失している。このままだと、下手をすれば逃げられる可能性もあるな。なら逃げられないよう餌を撒けばいい。

「いいのか？俺に勝てば神のカードが手に入るぜ」

俺は傍から【オシリス】のカードを取り出し見せつける。しかし3人は「何だそれ？」みたいな表情を浮かべていた。
コイツ等さっきの俺のデュエル観てなかったのか？まぁ、コイツ等原作でもバクラとデュエルする時まで、決勝進出者の現状も把握していなかったからな。
しかし神のカード（これ）で釣れないのなら、更なるカード（餌）を撒けばいい。
「さらにそれだけじゃない、オマケにこのカード達も付けようじゃないか」
新たに【闇より出でし絶望】、【野生開放】、【雷魔神ーサンガ】の3枚を見せる。ゾンビ顔の奴はアンデット族を中心としているデッキを使うから【闇より出でし絶望】は欲しいだろう。
他の2人はどう言うデッキか知らないが【エクゾディア】使いのレアハンターが調べていたデータに載っていたカードは、片や【ファイヤー・ウィング・ペガサス】、片や【双頭の雷龍（そうとうのサンダードラゴン）】。だったら同じ種族のモンスターやそれに関連するカードなら食いつくはず。
俺の予想は的中し、3枚のカードを見た途端3人の目の色が変わる。
「いいだろう。お前の挑戦受けてやるゾ。それと今の話、忘れるなゾ」
「勿論だ、俺は約束は守る。パズルカードは互いに全賭け、俺は3枚だ」
「3枚だと!?」
「こりゃあいい。アイツを倒せば俺達の誰か1人が決勝へ行けるぜ」
「だがただ勝負するのもつまらない。そこで特別ルールでやろうと思う」
俺は大まかなルールを説明する。
先ず3人の内誰か1人が俺と対戦し、俺が勝てば次の誰か1人と対戦。また同じように俺が勝てば最後の1人と対戦し、勝てば俺は3人のパズルカードを貰う。つまり俺がパズルカードを手に入れるには3人全員と戦い勝利すること。
そして奴らの場合は誰か1人でも勝てば、俺のパズルカードを全部手に入れることが出来ると言う奴らにとって圧倒的有利な条件を出

した。
「おいおい、いいのかよ。そんな条件出して」
「あぁ構わない。バンデット・キースを倒し、神のカードを手に入れた俺と戦うには、これくらいのハンデがあった方がいいだろう（寧ろこれくらいやらないと相手にならないだろうしな）」
「巫山戯やがって。俺達を嘗めたこと後悔させてやるゾ！」
「ちょっと待った。折角墓場なのにこんな明るくちゃ殺風景みたいもんだ。だから雰囲気を変える」
　俺は片腕を掲げ掌から黒い霧を放出させる。その霧は忽ち広がり、あっという間に墓地全体を包み込んでしまう。さっきまで太陽に照らされた墓地は、夜のように真っ暗闇な風景に早変わりした。
「何だ!?何で夜になっちまってたんだ!?」
「俺が知るかよ！」
「これでいい。墓場だったらこっちの方が雰囲気があるだろう。待たせたな、さぁデュエルを始めるぞ！」
「言われなくも分かってるゾ。俺のゴーストデッキの恐ろしさ思い知らせてやるゾ」
　互いにデュエルディスクを起動させ、デュエルのスタンバイをする。

『デュエル！』

悠也
ＬＰ４０００
骨塚
ＬＰ４０００

「俺の先行ドロー！俺は【ゴブリンゾンビ】を攻撃表示で召喚」
　フィールドに身体が腐敗し骨が丸見えになっている、片手に剣を持ったアンデットモンスターが現れる。

【ゴブリンゾンビ】
効果モンスター
☆４
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ１１００
ＤＥＦ１０５０

「さらに１枚カードを伏せ、ターンエンド」

ＬＰ４０００
手札４枚
モンスター
【ゴブリンゾンビ】
ＡＴＫ１１００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターンだゾ、ドロー！俺は【鎧武者ゾンビ】を召喚！」
向こうも身体が腐敗しているモンスターが現れる。その顔色は緑に変色しており、背中には矢が数本刺さっている。

【鎧武者ゾンビ】
通常モンスター
☆４
闇属性／アンデッド族
ＡＴＫ１５００
ＤＥＦ０

「【鎧武者ゾンビ】奴のモンスターを攻撃だ！」
【鎧武者ゾンビ】は腰に掛けていた剣を引き抜き、走りながら振り上げ【ゴブリンゾンビ】を斬り付ける。【ゴブリンゾンビ】は粒子となり

消滅した。

悠也
ＬＰ４０００→３６００

「この瞬間【ゴブリンゾンビ】の効果発動。このカードが墓地に送られた時、デッキから守備力１２００以下のアンデット族モンスターを１体手札に加える事ができる。俺は【カース・オブ・ヴァンパイア】を手札に加える」
「だが、これでお前の場にモンスターはいなくなったゾ。俺はこれでターン終了だゾ」

骨塚
ＬＰ４０００
手札５枚
モンスター
【鎧武者ゾンビ】
ＡＴＫ１５００
魔法・罠
なし

こいつたかがモンスターを１体破壊してＬＰを４００減らしたくらいでいい気になっているとは、とんだおめでたい奴だ。だったらその余裕ぶりを一気に醒まさせてやる。
「俺のターン、ドロー。手札から永続魔法【ミイラの呼び声】を発動！このカードは自分のフィールドにモンスターにモンスターが存在しない時、手札からアンデット族モンスターを１体特殊召喚できる。さっき手札に加えた【カース・オブ・ヴァンパイア】を特殊召喚！」
俺のフィールドに大きな棺桶が出現すると扉が開き、そこから両肩にプロテクターと思われる物を装着し、黒いマントを纏っている吸血鬼が現れる。

【カース・オブ・ヴァンパイア】
効果モンスター
☆6
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ８００

「何、攻撃力２０００だと!?」
「しかも、6星の上級モンスターを生け贄なしで召喚しやがった」
「更にリバースカードオープン。永続罠【追い剥ぎゾンビ】！このカードは自分のモンスターが相手に戦闘ダメージを与えた時、相手のデッキの1番上のカードを1枚墓地に送られる。そしてバトル！【カース・オブ・ヴァンパイア】、【鎧武者ゾンビ】を攻撃！『ネイルファングブロー』！」
【カース・オブ・ヴァンパイア】は羽根を羽ばたかせ素早い速度で【鎧武者ゾンビ】に近づき、鋭い毒の爪で切り裂き破壊する。

骨塚
ＬＰ４０００→３５００

「そして【追い剥ぎゾンビ】の効果発動！お前のデッキの1番上のカードを墓地に送ってもらうぞ」
骨塚は悔しそうに唇を噛み締め、デッキの1番上のカードを墓地にへと送る。
「さらにモンスターを守備表示で出しターンエンド」

悠也
ＬＰ３６００
手札３枚
モンスター

【カース・オブ・ヴァンパイア】
ＡＴＫ２０００
裏守備×１
魔法・罠
【追い剥ぎゾンビ】
【ミイラの呼び声】

「どうした、異名を持つお前の力はそんな物か？だとしたら大したことないなぁ」
「何だと!?馬鹿にするな！俺のデッキの凄さはまだまだこれからだゾ！俺のターン、魔法カード【融合】！このカードで手札の【メデューサの亡霊】と【ドラゴンゾンビ】を融合！出ろ、冥界最強のモンスター【金色の魔象】!!」
１枚の魔法カードが発動すると、奴のフィールドに２体のモンスターが現れ【融合】のカードによって混ざり合い、全身金色の骨で構成されたマンモスとなった。

【金色の魔象】
融合モンスター
☆６
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ２２００
ＤＥＦ１８００

「ほぉ、【カース・オブ・ヴァンパイア】の攻撃を超えるモンスターを出したか。しかし融合モンスターは大会ルールでは融合召喚されたターン攻撃出来ない。分かっているだろ？」
「勿論分かっているさ。だがこのカードがあれば問題ないぞゾ。魔法カード【速攻】！このカードで融合モンスターは召喚されたターンでも攻撃が出来るぞ。さらに魔法カード【早すぎた埋葬】発動！このカードは８００ポイントのＬＰを払って墓地のモンスター１体を復

活されるゾ」

骨塚

ＬＰ３５００→２７００

「蘇れ、【ドラゴンゾンビ】！」

地面から一本の腕が飛び出すと、身体が腐敗し、骨が丸見えになっている紫色のドラゴンが現れる。

【ドラゴンゾンビ】

通常モンスター

☆３

闇属性／アンデット族

ＡＴＫ１６００

ＤＥＦ０

「行け【ドラゴンゾンビ】、奴のモンスターを蹴散らせ！『朽ち果ての吐息（ゾンビ・デッドリー・ブレス）』!!」

【ドラゴンゾンビ】の吐き出した腐敗の吐息が俺の守備モンスターに襲い掛かる。甲羅がピラミッドになっている亀であった。攻撃を食らったモンスターはそのまま風化してしまい消滅する。

「【ピラミッド・タートル】の効果発動！このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから守備力２０００以下のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する。現れろ、【ヴァンパイア・ロード】守備表示だ！」

俺のフィールドに新たな吸血鬼モンスターがマントを靡かせ現れる。

【ヴァンパイア・ロード】

効果モンスター

☆５

闇属性／アンデット族
ＡＴＫ２０００
ＤＥＦ１５００

【ピラミッド・タートル】
効果モンスター
☆４
地属性／アンデット族
ＡＴＫ１２００
ＤＥＦ１４００

「チッなら【金色の魔象】、【カース・オブ・ヴァンパイア】を攻撃！」
命令を受けた【金色の魔象】はその巨体で突撃し、鋭い牙で【カース・オブ・ヴァンパイア】の身体を貫き破壊した。

悠也
ＬＰ３６００→３４００

「どうだこれでも、まだ俺のことを大したこたないなんて言えるか！」
「そうかな。この瞬間戦闘で破壊された【カース・オブ・ヴァンパイア】の効果発動」
ディスクの墓地スロットから破壊された【カース・オブ・ヴァンパイア】が飛び出し、口を開け鋭い牙で俺の首に噛み付いた。その光景に３人は恐怖し、特に骨塚は「ヒッ！」と言う悲鳴を上げた。
「【カース・オブ・ヴァンパイア】は、戦闘で破壊されたターンのエンドフェイズに、ＬＰを５００払うことで墓地から復活させることが出来る」

悠也
ＬＰ３４００→２９００

「だ、だが幾ら復活しようとも攻撃力なら俺の【金色の魔象】の方が上。次の俺のターンでまた破壊してやる。ターンエンドだゾ」

骨塚
ＬＰ２７００
手札１枚
モンスター
【金色の魔象】
ＡＴＫ２２００
【ドラゴンゾンビ】
ＡＴＫ１６００
魔法・罠
なし

「俺ターン、ドロー。この瞬間【カース・オブ・ヴァンパイア】の効果によって墓地から復活する！」
俺の生き血を糧にした【カース・オブ・ヴァンパイア】は再び俺のフィールドに召喚される。しかしさっき首元噛まれた時、めっちゃ痛かったなぁ。これがソリッドビジョンじゃなかったら大惨事になっていたかもしれないな。
「言ったはずだゾ。攻撃力なら俺のモンスターの方が上だと。復活しても所詮は犬死にするだけだゾ」
「フン、ただ復活しただけだと思うな。【カース・オブ・ヴァンパイア】は自身の効果で復活した時、攻撃力が５００ポイントアップするのだ」
【カース・オブ・ヴァンパイア】
ＡＴＫ２０００→２５００
「攻撃力２５００!?」
「これでお前のモンスターの攻撃力を上回った。さらに【ヴァンパイ

ア・ロード】を攻撃表示に変更させ、バトル！【カース・オブ・ヴァンパイア】、【金色の魔象】を攻撃！『シャープスネイルブレード』!!」
パワーアップした【カース・オブ・ヴァンパイア】の一撃は先程よりもキレの良さが増し強力になっていた。目にも止まらぬ速さで【金色の魔象】を一刀両断、さらに数回斬り刻みバラバラにし破壊した。
「俺の…【金色の魔象】が…」
骨塚は自身の自慢のモンスターが破壊されたことにショックを受け唖然としていた。

骨塚
ＬＰ２７００→２４００

「そして【追い剥ぎゾンビ】の効果でデッキの１番上のカードを墓地に送れ！」
カード効果で骨塚は自身のデッキの上のカードを１枚墓地に送る。
「さらに【ヴァンパイア・ロード】で【ドラゴンゾンビ】に攻撃！『暗黒の使徒』!!」
【ヴァンパイア・ロード】がマントを翻すと、中から大量の蝙蝠のが放たれ一斉に【ドラゴンゾンビ】に群がる。そして身体全身を蝕まれ破壊される。

骨塚
ＬＰ２４００→２０００

「そして【ヴァンパイア・ロード】の効果発動！このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、相手は俺が宣言種類のカードを１枚デッキから墓地に送らなければならない。さらにそれにチェーンして【追い剥ぎゾンビ】の効果が発動！先ず【追い剥ぎゾンビ】の効果でデッキの１番上のカードを墓地へ送れ」
再び骨塚は自身のデッキの上のカードを１枚墓地に送った。
「次に【ヴァンパイア・ロード】の効果で、俺が宣言する種類のカード

を1枚墓地に送る。俺が宣言するのはモンスターカードだ。さぁモンスターカードを1枚デッキから墓地に送れ！」
次はデッキを取り出しモンスターカードを1枚選んで墓地に送った。因みに送ったカードは【ゴースト王ーパンプキングー】だった。

【ゴースト王ーパンプキングー】《アニメ版》
効果モンスター
☆6
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ１５００
ＤＥＦ２０００

「俺はこれでターンエンドだ」

悠也
ＬＰ２９００
手札４枚
モンスター
【カース・オブ・ヴァンパイア】
ＡＴＫ２５００
【ヴァンパイア・ロード】
ＡＴＫ２０００
魔法・罠
【追い剥ぎゾンビ】
【ミイラの呼び声】

俺のフィールドには攻撃力２０００以上のモンスターが2体、片や相手はモンスターがいない。現状を逆転するのはこの時代ではかなり難しい状況。顔を見るだけでわかる、戦意消失しているのが。
「お、俺のターン…よし。【魂を削る死霊】を守備表示で召喚」
出したのは、俺もさっきパントマイマー（マリク）とのデュエルで

使用した【魂を削る死霊】だ。

【魂を削る死霊】
効果モンスター
☆３
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ３００
ＤＥＦ２００

「このモンスターは戦闘では破壊されない。コイツでお前のモンスターの攻撃を耐え抜くゾ。ターンエンド」

骨塚
ＬＰ２０００
手札１枚
モンスター
【魂を削る死霊】
ＤＥＦ２００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー。ン？…フフフ、どうやらこのターンで決着が付きそうだ」
「何だと!?【魂を削る死霊】は戦闘では破壊されない。如何にお前が強力なモンスターを出そうとも無駄だゾ！」
「確かに戦闘では破壊されない。だったら【魂を削る死霊】とバトルしなければいいだけだ！」
俺は今引いた魔法カードを発動される。
「魔法カード【威圧する魔眼】発動！このカードは自分フィールド上の攻撃力２０００以下のアンデット族モンスターを対象に発動。そのモンスターはこのターン、相手プレイヤーに直接攻撃が出来る」

「何ッ…」
「対象とするのは【ヴァンパイア・ロード】！」
魔法カードから放出された紅い光が【ヴァンパイア・ロード】に纏わりつくと、目が紅く染まり、獲物を見るかのように骨塚に視線を向けていた。
「【ヴァンパイア・ロード】骨塚[奴]にダイレクトアタック！『暗黒の使徒』!!」
【ヴァンパイア・ロード】から放たれた無数の蝙蝠は【魂を削る死霊】を無視して、後ろにいる骨塚にへと突撃した。
「ウ、ウワァーーー!!」

骨塚
ＬＰ２０００→０

「異名を持つ割には大したことなかったな。さて、次はどっちが相手をしてくれるんだ？」
「次は俺が相手だ！」
前に出てきたのは、さっき俺に突っかかってきた赤髪の眼鏡だ。
「俺は骨塚の様にはいかねェぞ」
「そうかい、それは楽しみだ」

『デュエル!!』

悠也
ＬＰ４０００
高井戸
ＬＰ４０００

「俺の先行ドロー。【再生ミイラ】を攻撃表示で召喚」
先ず俺が召喚したのは包帯がボロボロになり、朽ちている皮膚が露わになっている片目のミイラモンスター。

【再生ミイラ】
効果モンスター
☆４
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ１８００
ＤＥＦ１５００

「さらに伏せカードを１枚出し、ターンエンド」

悠也
ＬＰ４０００
手札４枚
モンスター
【再生ミイラ】
ＡＴＫ１８００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン。俺は【暗黒の狂犬（マッドドック）】を召喚！」
牙が剥き出しで凶暴な顔付きの犬が現れる。

【暗黒の狂犬（マッドドック）】
通常モンスター
☆４
闇属性／獣族
ＡＴＫ１９００
ＤＥＦ１４００

「【暗黒の狂犬（マッドドック）】奴のモンスターに攻撃だ！」
【再生ミイラ】に噛み付き身体を無惨にも食い違った。この獰猛さ、

名前通りの狂犬って訳か。

悠也
ＬＰ４０００→３９００

「どうだ、サレンダーするなら今のうちだぜ。ターンエンドだ」

高井戸
ＬＰ４０００
手札５枚
モンスター
【暗黒の狂犬（マッドドック）】
ＡＴＫ１９００
魔法・罠
なし

「俺のターン。魔法カード【愚かな埋葬】発動！このカードは自分のデッキからモンスター1体を選んで墓地に送ることが出来る。俺は【ヴァンパイア・ロード】を墓地へ送る」
「自分からモンスターを墓地へ送るだと？勝てないと思ってヤケになっちまったか？」
「そんな訳ないだろ。さらに手札から魔法カード【死者蘇生】を発動！効果で今墓地に送った【ヴァンパイア・ロード】を復活させる」
【ヴァンパイア・ロード】か現れ、その鋭い眼差しで相手プレイヤーを睨み付ける。
「【ヴァンパイア・ロード】攻撃！『暗黒の使徒』！」
【ヴァンパイア・ロード】から放たれた無数の蝙蝠が【狂犬】の身体を覆い貪り尽くす。

高井戸
ＬＰ４０００→３９００

「そして【ヴァンパイア・ロード】の効果発動！デッキからモンスターカードを1枚墓地に送ってもらうぞ」
　さっきの奴と同じように一度デッキを取り出すと、モンスターカードを1枚墓地にへと送る。だがカードを墓地に送った時一瞬笑ったように見えたが、気のせいか？
「俺はこれでターンエンドだ」

悠也
ＬＰ３９００
手札３枚
モンスター
【ヴァンパイア・ロード】
ＡＴＫ２０００
魔法・罠
伏せ×１

「俺のターン！ドロー。俺は魔法カード【地砕き】を発動！このカードの効果でお前のフィールドの１番守備力が高いモンスター１体を破壊する！」
　カードの発動と同時に【ヴァンパイア・ロード】の地面に亀裂が入り砕けた。そしてその中に【ヴァンパイア・ロード】は引き摺り込まれるように落ちていき消滅する。
「これでお前のモンスターは居なくなった。そして俺もこのカードを使うぜ。【死者蘇生】！コイツで俺の墓地にいる【ファイヤー・ウィング・ペガサス】を召喚させる！」

【ファイヤー・ウィング・ペガサス】
通常モンスター
☆６
炎属性／獣族

ＡＴＫ２２５０
ＤＥＦ１８００

【ファイヤー・ウィング・ペガサス】!?いつの間に墓地に…!!そうか、さっき【ヴァンパイア・ロード】の効果で墓地に送ったのがあのカードだったか。クソッ、【ヴァンパイア・ロード】の効果を逆に利用されたか。

「行け、【ファイヤー・ウィング・ペガサス】！ダイレクトアタックだ！」

命令を受けた【ファイヤー・ウィング・ペガサス】が飛び上がると、身体を炎で包み込みそのまま体当たりしてきた。その威力に俺は吹き飛ばされる。

悠也
ＬＰ３９００→１６５０

「どうだ、これでお前も終わりだ。そしてお前のパズルカードとレアカードもいただきだ。ターンエンド」

高井戸
ＬＰ３９００
手札４枚
モンスター
【ファイヤー・ウィング・ペガサス】
ＡＴＫ２２５０
魔法・罠
なし

ホント、ソリッドビジョンとは言え、モンスターに攻撃された時の感覚はリアルだよ。下手すれば失神する奴も出るかもな。だが俺には今そんなこと関係ない。ダメージを受けたことに対してイラつい

ている。相手に対してもそうだが、何より雑魚相手にこんなにダメージを受けた自分自身に腹が立った。
「やってくれたな。この落とし前は高く付くぞ。俺のターン、ドロー。この瞬間【ヴァンパイア・ロード】の効果発動！」
地面から棺が現れる。扉が開くと前のターンで破壊された【ヴァンパイア・ロード】が眠っており、目が開くと棺から出てくる。
「【ヴァンパイア・ロード】には相手のデッキを蝕む効果の他にもう1つある。それは相手のカード効果によって破壊された時、次の自分のスタンバイフェイズに復活する効果だ！」
「つまり戦闘破壊以外なら何度でも復活するってことか!?そんなのありかよ！」
「落ち着け佐竹。奴のモンスターが復活しようとも、攻撃力なら俺のモンスターの方が上だ」
「それはどうかな。俺は【ヴァンパイア・ロード】をゲームから除外、取り除いて手札から【ヴァンパイアジェネシス】を特殊召喚させる！」
【ヴァンパイア・ロード】が光に包まれると、その身体を変化させていく。全身が筋肉質の紫肌、背中には巨大な羽、身長は2メートル近くある巨大な悪魔のような姿にへと変わった。

【ヴァンパイアジェネシス】
特殊召喚・効果モンスター
☆8
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２１００

「攻撃力３０００!?あの【青眼の白龍】と同じ攻撃力だと！」
「まだだ。【ヴァンパイアジェネシス】の効果発動！1ターンに1度、手札のアンデット族モンスター1体を捨て、自分の墓地に存在するそのモンスターよりレベルの低いアンデット族モンスター1体を特殊召喚出来る。レベル6の【龍骨鬼】を墓地に送り、【再生ミイラ】を特

殊召喚する！」
【龍骨鬼】のカードが埋葬されると、地面から【再生ミイラ】が飛び出す。
「さらにリバースカードオープン！【闇次元の解放】！このカードの効果でゲームから除外、取り除かれている闇属性モンスターを1体特殊召喚する！三度現れよ、【ヴァンパイア・ロード】！」
俺のフィールドの上にドス黒い渦が出現すると、その中から【ヴァンパイア・ロード】がゆっくりと出て来て降臨する。
「【ヴァンパイアジェネシス】奴のモンスターを蹴散らせ！『ヘルビシャス・ブラッド』
【ヴァンパイアジェネシス】が力み出すと、身体が紫色の疾風の刃となり【ファイヤー・ウィング・ペガサス】を切り裂いた。そして攻撃終了後その身体を復元させ俺のフィールドに戻ってくる。
「クソッ」

高井戸
ＬＰ３９００→３１５０

「さらに【再生ミイラ】ダイレクトアタックだ！」
【再生ミイラ】の身体から伸びている包帯が触手のように伸び襲い掛かりＬＰを削る。

高井戸
ＬＰ３１５０→１３５０

「そして【ヴァンパイア・ロード】トドメをさせ！『暗黒の使徒』
例の如く放たれた大量の蝙蝠が一斉に襲い掛かり、残りのＬＰを削り切る。
「ウワァァーー!!」

高井戸

ＬＰ１３５０→０

「高井戸…お前まで」

「これで２人目、次で最後だ。ここで買った方が決勝進出だ！」

「上等だ。アイツ等の仇打ってやる！」

『デュエル!!』

悠也
ＬＰ４０００
佐竹
ＬＰ４０００

「２回とも俺が先行だったからな。今回はお前に先行をくれてやるよ」

「上等だ、ドロー！俺は魔法カード【融合】を発動！手札の２枚の【サンダードラゴン】を融合させて【双頭の雷龍（サンダードラゴン）】を召喚するぜ」

フィールドに出現した２体の緑色のドラゴンが混ざり合い、２つの首を持ち顔の先に角を生やした赤いドラゴンが現れる。

【双頭の雷龍（サンダードラゴン）】
融合モンスター
☆７
光属性／雷族
ＡＴＫ２８００
ＤＥＦ２１００

「どうだ、これが俺の最強モンスターだ！融合モンスターは大会ルールじゃ召喚したターンに攻撃出来ないが、１ターン目ならどの道攻撃出来ないから関係ねェ。ターンエンドだ」

佐竹
ＬＰ４０００
手札３枚
モンスター
【双頭の雷龍】
ＡＴＫ２８００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー。永続魔法【ミイラの呼び声】を発動！これによって手札から【ピラミッド・タートル】を守備表示で特殊召喚させる。さらに【精気を吸う骨の塔（ボーンタワー）】を召喚、攻撃表示」

【精気を吸う骨の塔（ボーンタワー）】
効果モンスター
☆３
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ４００
ＤＥＦ１５００

「攻撃力４００のモンスターを攻撃表示だァ!!ハハハ、ここに来て勝負を諦めたか？」
「それは【精気（コ）を吸う骨（イ）の塔（ッ）】の効果を知ってからいいな。リバースカードを１枚出しターンエンド」

悠也
ＬＰ４０００
手札２枚
モンスター
【ピラミッド・タートル】
ＤＥＦ１４００

【精気を吸う骨の塔】
ＡＴＫ４００
魔法・罠
【ミイラの呼び声】
伏せ×１

「俺のターン。【双頭の雷龍】その不気味な塔を攻撃！」
命令を受ける【双頭の雷龍】。だがどうしたことだろうか、今まで経っても攻撃しようとしない。
「おい、どうした!?」
「フフフ、【骨の塔】は自分のフィールドに他のアンデット族モンスターが存在する時、このカードを攻撃することは出来ないのだ」
「何だと!?じゃあ仕方ねェ、【双頭の雷龍】その亀を攻撃しろ！」
攻撃出来ないことを知り、仕方なく攻撃対象を【ピラミッド・タートル】にへと変更。二頭の口から放たれた電撃が【ピラミッド・タートル】にへと命中し跡形もなく破壊した。
「この瞬間【ピラミッド・タートル】の効果発動。このカードが戦闘で破壊された時、デッキから守備力２０００以下のアンデット族を１体特殊召喚することが出来る。２体目の【ピラミッド・タートル】を特殊召喚する」
再び【ピラミッド・タートル】が俺のフィールドに現れる。
「さらに【骨の塔】の効果発動！フィールド上にアンデット族モンスターが特殊召喚された時、相手プレイヤーのデッキの上から２枚のカードを墓地へ送らせる」
「何だと!?クソッ」
そう言いながらデッキの上から２枚を墓地にへと送った。これで５枚だ。
「だが俺にはまだ攻撃力２８００の強力モンスターがいる。守ってばかりいちゃ勝てないぜ。ターンエンド」

佐竹

ＬＰ４０００
手札４枚
モンスター
【双頭の雷龍】
ＡＴＫ２８００
魔法・罠
なし

「俺のターン、ドロー」
確かに俺の手札に【双頭の雷龍】を倒せるモンスターはいない。だが目先の攻撃力だけが全てじゃない。
「【ピラミッド・タートル】を生贄に【ヴァンパイア・ロード】を召喚！さらに魔法カード【生者の書ー禁断の呪術ー】を発動！このカードは相手の墓地のモンスター1体をゲームから除外、取り除き自分の墓地のアンデット族モンスター1体を復活させる。お前の墓地の【サンダードラゴン】1体を墓地から取り除き【ピラミッド・タートル】を攻撃表示で特殊召喚させる」
奴のディスクの墓地スロットからカードが1枚飛び出すと、さっき破壊された【ピラミッド・タートル】がフィールドに出現する。
「そして【骨の塔】の効果でお前は再びデッキの上からカードを2枚墓地送らなければならない」
「クッ」
苦い顔をしながらデッキの上からカードを2枚墓地に送った。これで奴の墓地のカードは6枚。
「バトル。【ピラミッド・タートル】で【双頭の雷龍】を攻撃！」
「何ッ!?」
【ピラミッド・タートル】を命令を受けるとドシン、ドシンと身体を動かせ体当たりしようとする。しかしこちらの方が攻撃力が下のため【双頭の雷龍】の2つ首から放たれた電撃によって吹き飛ばされ破壊される。

悠也
ＬＰ４０００→２４００

「何だアイツ。攻撃力の低いモンスターで攻撃してきたゾ」
「さては勝てないと思ってヤケになったか？」
「フッ、破壊された【ピラミッド・タートル】の効果でデッキから【龍骨鬼】を攻撃表示で召喚させる」
俺のフィールドに新たに現れたモンスターは、胴体と両腕は無数の顔の骨で構成され、心臓部であるコアが丸出し、そしてニタニタと不気味な笑顔を浮かべる1本角を生やした骨のモンスター。

【龍骨鬼】
効果モンスター
☆6
闇属性／アンデット族
ＡＴＫ２４００
ＤＥＦ２０００

「そして【骨の塔】の効果。アンデット族モンスターが特殊召喚されたことで、相手のデッキの上からカードを2枚墓地に送らせる」
「チッ、またかよ」
愚痴を言いながらも、再びデッキの上のカード2枚を墓地にへと送る。これで奴の墓地のカードは8枚になった。
「バトルはまだ終わっていない。【龍骨鬼】、【双頭の雷龍】に攻撃だ！」
「また攻撃力の低いモンスターで攻撃？」
「やっぱ可笑しくなりやがったな。このままバトルしても自爆するだけなのによ」
確かにこのまま戦えばまた返り討ちに合うだけ。だが俺はこの時を待っていたんだ。奴の墓地のカードが8枚以上になるのを。
「この瞬間罠カード発動！【墓地墓地の恨み】！このカードは相手の墓地に存在するカードが8枚以上の時に発動する罠カード。この効果

によって、相手フィールド上のモンスターの攻撃力は０になる」
「何だと!?」
奴の墓地スロットから昔ならではのお化けが大量に飛び出してきた。そのお化け達は【双頭の雷龍】の周りを取り囲むと、その身体にへと入り込んでいく。すると【双頭の雷龍】は力なくその場で両膝と手を突いた。

【双頭の雷龍】
ＡＴＫ２８００→０

そう、俺はこのカードを発動するために、ＬＰと【ピラミッド・タートル】を犠牲にして奴のカードを次々に墓地へ送らせたのだ。
「俺の…【双頭の雷龍】が…」
「【龍骨鬼】、【双頭の雷龍】を蹴散らせ！」
命令を受けた【龍骨鬼】はその体格からは想像も付かない程素早い動きで迫り、振り上げた骨で出来た剛腕が【双頭の雷龍】の身体を貫いた。

佐竹
ＬＰ４０００→１６００

「ラストだ。【骨の塔】と【ヴァンパイア・ロード】でダイレクトアタック!!」
【骨の塔】から出てきた無数の火玉、いや人魂が【ヴァンパイア・ロード】に憑依。マントを翻すと、青い光を纏い凶暴さが増した蝙蝠の群れが飛び出し襲い掛かった。
「ウワァァァーーー!!」

佐竹
ＬＰ１６００→０

奴のＬＰが０になったことでデュエルは終了したことで、煽っていた闇は晴れお日様が顔を出す。
「俺の勝ちだ。じゃあ約束通り、お前達のパズルカードは頂くぞ」
俺は右掌を３人に向かっると、それぞれのポケットからパズルカードが独りで飛び出す。そして俺の方へ向かい掌にへと収まる。
「それじゃあパズルカードは貰っていく。あぁ、レアカードの方は要らないから。じゃあな」
これで６枚揃った、後は決勝戦の会場まで行くだけだ。俺は前もって場所は知っている。原作（予想）通りなら海馬が１番目に来るはずだが、確かその時にはもうマリクがいたはず。先に行って鉢合わせすると色々と面倒になりそうだ。それに全員が集まるのは夜、まだまだ時間はたっぷりある。取り敢えず腹も減ったし、食事にするか。

１５話

「もうそろそろいいだろう」
　あの３人とのデュエルを終え、食事を取り適当なところをブラブラして時間を過ごしてたらすっかり夜になった。もうそろそろ会場へ向かわないと出場出来なるかもしれないな。
　だがただ登場するだけじゃつまらない。折角だから目立ちたい。俺は人気がない路地裏に入り込み、背中をアンモナイトの殻の姿にする。そして身体から闇を放出させ、鋭い嘴に爪を持った２ｍ位の大きさの二足歩行の鳥を一体召喚させる。俺はその鳥に近づき話し掛ける。
「俺を指定する場所まで大至急送ってくれ」
　その問いに鳥は「ＯＫ」と言わんばかりの鳴き声を上げる。俺は背中を元に戻し、鳥の背中に乗る。
「よし、行くぞ！」
　俺の声に反応した鳥は羽を羽ばたかせ飛び上がり、目的地まで運んでくれる。エッ、こんな町中で大胆なことして問題ないのかって？確かに普通に行けばそうだろうが、高速で飛び尚且つ色が黒だから夜の空に溶けんでいて周りには気付かれていない。
　あっという間にパズルカードが示した建設中のドームの上空まで来ると、その中央に一機の飛行船が着陸するのが見えた。あれがバトルシップ、決勝戦が行われる会場か。
　そしてそのままスタジアムにへと降りる。しかしかなり早かったな、流石《邪神の尖兵》と呼ばれる存在。
　周りを見渡すとその場にいた全員が唖然としていた。理由は多分、いや絶対《邪神の尖兵》のことだろうな。これ以上混乱を招くのも厄介なので、直ぐ様《邪神の尖兵》の魔法陣を展開させ転移させた。
「よぉ、皆さん全員お揃いのようで」
　俺の呼び掛けにいち早く反応した海馬が発言する。
「貴様、神のカードを手に入れた割には随分来るのが遅かったな。それとも余裕と言うやつか？」

「言うだろ。『主役は遅れて来るもの』だと」
「フン、それにしても無駄に手の込んだ登場が好きなようだな」
「いやいや、この大会を考えた奴の大胆さには負けるわ」
俺の反発に海馬は若干眉を顰める。明らかに怒ってますね。海馬相手にここまで張り合える奴なんてそうそういない。出来るのは遊戯と城之内くらいじゃないか。
その中俺は口元をフードで隠している女性【イシズ・イシュタール】の方へ視線を向けると、彼女は驚いた表情を浮かべながら俺を見つめていた。恐らく【千年タウク】で見えた未来には、今の状況はなかったんだろう。
「パズルカードの提出をお願いします」
「ほら、これでいいか？」
脇から6枚のパズルカードを取り出し係の人に見せつける。
「確かに」
そして係の人から1枚のＩＤカードを貰う。
「それではデュエリストの皆様、お乗りください」
扉が開き勝ち残ったデュエリスト達は次々と乗り込んでいく。しかし遊戯や城之内の連れはデュエリストでないから乗ることは出来ないと言われ追い返されそうになるも、モクバと海馬が彼等の同席を許可した。最後に海馬とモクバが乗り込むと扉は閉まり、バトルシップは浮上する。
夜の町はやっぱりいい。町の明かりがロマンチックと言うか、癒される。夜景を楽しんでいると海馬が声を掛けてきた。
「…貴様、神のカードを手に入れたにも関わらずデッキに入れてずに戦っていたな」
「…それがどうした？」
「どうしただと…貴様巫山戯ているのか!?いいか！神のカードを手に入れた瞬間、貴様は俺と同様神の領域に足を踏まれたのだ！それなのに神のカードをデッキに入れないなど、それはこの戦い対する冒涜だ！貴様にはそれが分からんのか!?」
「冒涜ねェ？じゃあ聞くが、神のカードを使って勝ってお前の嬉しい

か？」
「何ッ!?」
「確かに神のカードは強力だ、それはどんなカードも足元にも及ばないくらい。だがそれで勝ったからと言って、それは神のカードの力で俺の実力とは言えない」
　神のカードは一度召喚すれば圧倒的な力で全てを凌駕し、そのプレイヤーを勝利にへと導く最強のカード。だがそんな力で勝ったところで意味がないし、誰も認めてはくれない。
「俺は自分の実力で強いことを証明する。だから神のカードは使わない、それで勝っても俺が面白くないんだよ。だが、神のカードを持つお前やマリクには使ってやる。流石に神相手には神でなきゃ難しいだろうしな」
「チッ、勝手にするがいい。だがこれは覚えておけ。俺は貴様とマリクを倒し、3枚の神のカードを手に入れる。そしてデュエルキングの称号を手にする!」
　それだけ言うと海馬は奥の通路にへと去っていった。因みにこの時の城之内の顔はめちゃくちゃニヤついていた。自分を良いように言った海馬が、俺に言いくるめたられたのが余程爽快だったのかもしれない。
　デュエリストには専用の部屋が与えられるとのことなので、一旦自分の部屋に行きカードキーを使って中に入る。中々いい部屋だな。ベットはデカいし、冷蔵庫はあるしでプライベートも充実しているな。
『デュエリストの皆さん、ホールへお集まりください』
　集合アナウンスが流れ、その中央の2つのテーブルには豪華な料理がズラリと並んでいた。

　照明が消えると壇上の床下から【アルティメット・ドラゴン】方のマシンが出現する。
　トーナメント戦は抽選で行い、真ん中の首から入った2つピンポン球が左右のそれぞれから出て対戦相手を決めるとのこと。しかし【青

眼の白龍】が好きだからってここまでするかって話。まぁ自家用ジェットを【青眼の白龍】にするくらいだしな。
マシンが起動して真ん中の首の口が開くと1つのピンポン球が口に入り、左側の口から【3】の番号が書かれたピンポン球が出てくる。
「デュエリストＮｏ．３《武藤遊戯》！」

再びマシンが作動し真ん中の首から2つ目のピンポン球が入り、右側の口から【4】の数字が書かれたピンポン球が出てくる。
「デュエリストＮｏ．４《孔雀舞》！」
トーナメント第1回戦は遊戯と孔雀舞になった。確かに本来でも遊戯は1回戦目だったが、対戦相手は闇バクラであった。だがそのバクラがいないから、代わりである俺が相手かと思っていたが。王国編での対戦カードがここで実現するとは。これも原作（本来あるべき運命）になると言うことなのか。
決勝戦は天空デュエル場と言う飛行船の屋上で行われるようだ。選ばれた2人は中央エレベーターで一足先にデュエル場にへと向かい、続いて観戦者達も別のエレベーターで屋上にへ向かっていった。
エッ？俺は行かないのかだって？俺は飛行船内で人が少ない今やって起きたいことがあるんだ。俺はホールを出て通路を進み、【7】と言う数字が書かれた部屋の前に来てインターホンを鳴らす。
『どうぞ』
入室の許可が下り部屋の扉が開き中に入る。
「貴方は!?」
「どうも。一応初めましてと言っておこうか、イシズ・イシタールさんよ」
彼女は俺の顔を見るや否、立ち上がり後退する。完全に警戒されているな。ここは先ず警戒を解くか、でなきゃ話が進まない。
「そう警戒するな。俺はただアンタと話がしたくて来たんだ」
「（この人は一体。私の見た未来にはこの人はいなかった。それに会場（あそこ）に到着するのは、私が最後のはず）」
「だが変だな。アンタはその首に付けている千年アイテム【千年タウ

ク】で未来を見通す力を得た。それなら俺がここに来ることも分かっていたはず。それなのに何故驚くんだ？」
「ッ!?何故そのことを!?」
「おいおい。今は俺が質問してるんだから、先にそっちの方を答えてくれ」
「…【千年タウク】の力で私は未来を見る力を得ました。しかし私の見た未来に貴方の姿は映っていません。それどころか貴方の未来が見えない。だから私はあの場で貴方がいることも、ここに来ることも知らなかったのです」
　やはり俺の未来は見えていなかったのか。俺の無数の闇の力は【千年タウク】の未来を見通す力までも凌いでしまうのか。
「貴方の質問には答えました。次は貴方が答える番です」
「そうだな。何故アンタの千年アイテムの力を知っているかだったな。悪いがそれはまだ答えることは出来ない。だが【千年タウク】の力が俺に反映されていないことについては答えてやる。俺には複数の闇の力がある」
「複数の闇の力？」
「1本の矢は折れるが、3本は折れないって言うだろう。単体では無理でも、複数の力が合わされば対抗出来る。つまり俺の力が千年アイテムよりも勝っていたってことだ（まぁ、あくまで単体の話だがな）」
　イシズは何も言わずに黙って聞いていた。俺の話は俄に信じ難いことばかりだが、目の前で起こっている状況が彼女にとって何よりの証拠になっている。だから論破しないのだろう。
「それで貴方は私に接触して来た目的は何ですか？」
「…アンタは未来が見えているのなら、マリク（自身の弟）がこの後どうなるのかも分かっているだろう？」
「ッ!?」
「俺がお前の弟を助けてやってもいい。その代わり報酬として、俺が優勝したら3枚の神のカードを貰う！それでいいな？」
「…貴方とマリクはそんな親しい間柄ではないはず。それなのに何故そこまでするのですか？」

「別に特別な意味はない。俺自身あの闇人格(クソ野郎)が気に入らない。だから奴の邪魔をしたい、そして悔しがる姿が見たい、それだけだ」
「…分かりました。マリクを救い、貴方がこの戦いで優勝したら神のカードを差し上げましょう」
「契約成立だな。これで用は済んだからお暇する。邪魔したな」
伝えたいことを終え俺は部屋を出る。マリクがどうなろうが知ったこっちゃない。だがアイツは俺の手で葬りたい。そのチャンスが来たんなら利用しない手はないからな。
因みに1回戦の結果は遊戯が勝利したとのこと。やっぱり原作主人公が勝つか、まぁ予想はしていたけど。
続く2回戦は原作(予想)通り城之内とリシドの対戦となった。この戦いは特に変わりはなかったのでデュエル中の内容は割愛させれもらう。
稲妻の直撃を受けたリシドが倒れ、その所為でマリクの中に眠っていた闇の人格が表に出てきてしまったらしい(以降その人格を闇マリクと称する)。
そして3回戦は何と海馬とイシズの対戦となった。本来なら4回戦目だったはずが、これもイレギュラー(俺)がいる影響なのかもしれない。
しかしそれだと闇マリクがリシドを始末しようとするだろう。現状止める人もいないし、止める理由も奴にはないから。それはそれで色々と今後の展開が変な方向になりそうなので阻止しておくか。
リシドが寝ていると思われる【6】の数字が書かれた部屋に向かうと扉が空いていたのが見えた。こっそり中を覗いて見ると、丁度闇マリクがリシドにトドメを刺そうとしていたところだった。
「ちょ〜と待ってもらおうか」
俺は声を掛けて行動を中止させた。しかしリアルで見るとやっぱ迫力を感じるな。髪が逆立ってるし、目付きが如何にも悪人ズラだ。有名なJ漫画のプライドが高い初期の王子様みたい。
「…なんだ?まさかとは思うがリシド(コイツ)を助けに来たのか?」
「その答えは《当たらずも遠からず》と言っておこうか」
「そうかい。じゃあ見過ごす訳にはイカねぇなァ」

闇マリクは【千年ロッド】を俺に向け翳すと、身体の周りに黄色いオーラが纏わりついてきた。【千年ロッド】の力で、俺の動きを封じたのだ。
「そこで大人しくしてるんだな。コイツの始末が済んだら貴様の番だ」
そう言って闇マリクはリシドを亡き者にしようとする。だが幾ら闇のアイテムとは言え、1つだけの力じゃ足りないな。俺は力づくでこのオーラを吹き飛ばす。
「な、何だと!?」
闇マリクは千年アイテムもない奴が、その呪縛を打ち破ったことに驚きを隠さなかった。その隙に俺は右腕から無数の触手を出現させ、闇マリクの身体、四肢を縛り上げ拘束する。闇マリクは振り払おうするがビクともしない。
「動くなよ、下手なことをすればお前の右腕の骨が折れることになる。まだデュエルしてないのに片腕が使い物にならなくなったら困るだろう?」
闇マリクは眉を顰め睨み付ける。だから今の状況ではどうすることも出来ないと分かっているのか、それ以上抵抗しなかった。
「そう、それでいいんだ。闇の感情のお前なら分かるだろう?弱者は強者に従わなきゃならないってことが」
その言葉に余程腹が立ったのか、こめかみに血管が浮き出ていた。
「それよりお前の姉、いや正確にはもう1人のお前の姉のデュエルが始まる。見に行ってやったらどうだ?」
「その必要はねェ。海馬の奴は姉上様のデッキには敵わねェんだからなァ」
確かにこのままだとイシズが見た未来(ビジョン)通り、海馬は【オベリスク】が攻撃した瞬間に敗北する可能性が高い。だから保険を掛けておくのさ。
「どうかな?その姉上様は俺の未来は見えなかったみたいだ。さっき会いに行った時凄く驚いていた」
「何ッ!?」

「だからこの戦いも未来が変わるかもしれない。それにお前にとっても面白い物が見れるかもしれないぞ」
「どう言う意味だ？」
「それを知りたければ自分の目で確かめることだ」
俺は拘束していた触手を離ししまう。闇マリクは俺に睨みを効かせながらも俺の横を素通りして出て行く。俺もその後を着いていき共にエレベーターに乗り屋上へ向かう。
しかしエレベーターの中でも闇マリクは睨み付けてくるが何もしてこない。意外だな。さっきのやり取りで力の差を理解しているようだ…納得はしていないと思うが。
「チィン」と音が鳴ると扉が開き、風が吹き荒れる屋上へ辿り着いた。闇マリクの姿を確認した主人公組はかなり警戒をしていた。特に操られた城之内は仇のような顔をしており、近くにいた俺の姿を確認すると突っかかってきた。
「おい！何でお前がマリクと一緒にいるんだよ！まさかお前、ソイツの仲間なのか!?」
「仲間？俺はコイツに面白いものが見れるからと言うことで連れて来たんだ。大体俺もコイツに目の敵にされているのに、仲間な訳ないだろう」
【エクゾディア】使いを倒した後、表側のマリクに目を付けられたのを見ていたはずなのに。もう忘れたのかよコイツ。
「おい…本当に面白いものが見れるんだろうな」
「勿論、それは約束するぜ」
海馬とイシズのデュエルは着々と進んでいき、イシズの企みによってデッキが6枚だけになってしまった。しかし海馬は彼女のモンスターを利用し【オベリスクの巨神兵】を召喚させることに成功した。しかしそれも全てイシズが見た未来（ビジョン）によって仕込まれたもの。あのまま行けば確かに海馬は負けてしまうだろう。
「勝負あったな。【オベリスク】が攻撃を仕掛けたその時こそ、海馬の負けだ。どうやらお前の言ったことは外れたようだな」
「…どうかな」

海馬が【オベリスク】に攻撃命令を下そうとした瞬間、闇マリクの【千年ロッド】の邪眼部分が光り出す。すると海馬が突如攻撃を中断し、その場で硬直してしまう。…どうやら来たようだな。
軈て頭を抑え改めて手札のカードと睨めっこする。そして1枚の魔法カードを発動させモンスター1体を召喚した後、そのモンスターと【オベリスク】を生贄に【青眼の白龍】を召喚させ、海馬がそのまま勝利を勝ち取った。
「ほら、俺の言った通りに面白いものが見れただろう」
「…貴様、俺を嵌めやがったな」
「さぁて、何のことだか？」
「チッ、まぁいい。さっきの借りと共にデュエルで貴様を葬ってやるぞ」
闇マリクはそれだけ言う去っていった。
さて、次はいよいよ俺の番だな。アイツには相応しいデッキで挑んでやろうじゃないか。葬られるのはどっちかな。